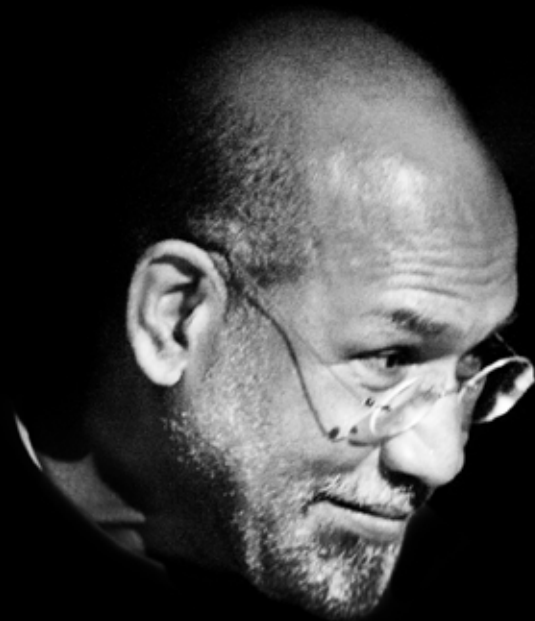
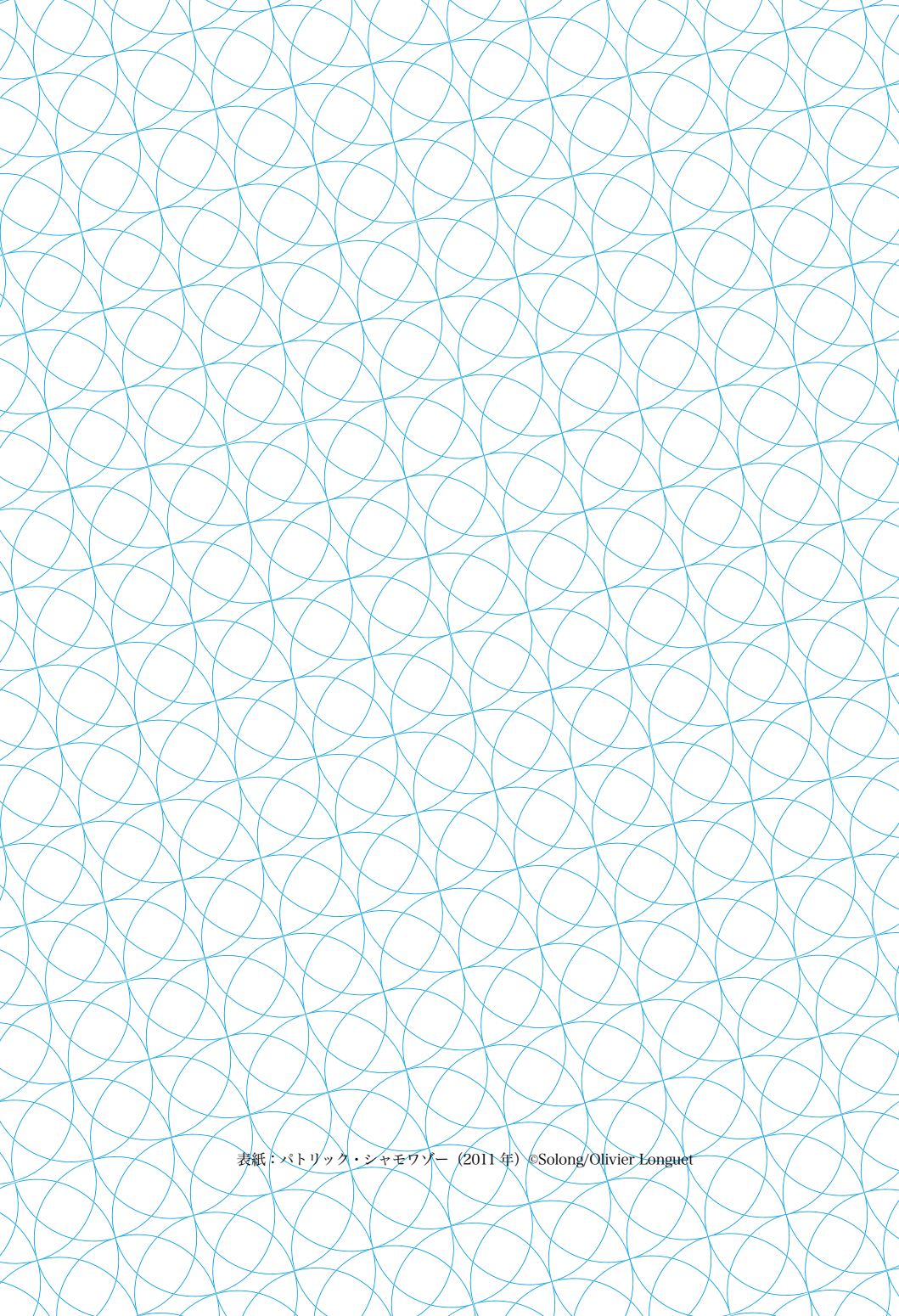


パトリック・ シャモワゾー

サミア・カッサブ=シャルフィ 著



INSTITUT
FRANÇAIS



表紙：パトリック・シャモワゾー（2011年）©Solong/Olivier Longuet

フランス外務省管轄のフランス政府公式機関アンスティチュ・フランセは、フランス国外での文化活動を推進する機関です。本書の出版及び、外国でのフランス文化交流網への流通にあたってパトリック・シャモワゾーの世界各地での講演会開催などもアンスティチュ・フランセが企画・組織しています。

フランス・アフリカ文化交流の一貫として南アフリカでの講演の後は、フランクフルトの国際ブックフェアに際しドイツに、2013年にはさらに北米、南米、アフリカへと向かいますが、2012年11月12日～18日、アンスティチュ・フランセ日本に招かれ講演を行います。

このデジタル版（PDFとePubで提供）により、日本の読者が、現代の最も偉大なフランス語作家であるパトリック・シャモワゾーの作品に触れるために、この機会に制作されました。

アンスティチュ・フランセ日本が企画した「言葉の記録人」、「想像界の戦士」、パトリック・シャモワゾーの講演旅行により日仏文化交流がさらに密になり深まり、討論会などにより両国知識人の意見交換の場を設けられることは最大の成果といえます。

L'Institut français est l'opérateur du ministère des Affaires étrangères pour l'action culturelle extérieure de la France. La publication du présent ouvrage et sa diffusion dans les Postes du réseau culturel français à l'étranger accompagnent une tournée mondiale de Patrick Chamoiseau, également initiée et soutenue par l'Institut français. Après l'Afrique du Sud, dans le cadre des saisons croisées France-Afrique du Sud, l'Allemagne, lors de la Foire du Livre de Francfort, et avant d'autres destinations en 2013 (notamment en Amérique du nord, en Amérique latine et en Afrique), Patrick Chamoiseau sera l'invité de l'Institut français du Japon du 12 au 18 novembre 2012. Cette version numérique (disponible au format pdf et epub) a été réalisée à cette occasion, pour convier le public japonais à la découverte et à la lecture de l'œuvre de l'un des plus grands écrivains contemporains de langue française.

Ce voyage du « Marqueur de paroles », du « Guerrier de l'Imaginaire », sera assurément un beau voyage.

L'Institut français et l'Institut français du Japon, tout à leur rôle de tisser et de renforcer les relations, de promouvoir la création et le débat d'idées, sont heureux d'avoir œuvré à sa réalisation.

サミア・カッサブ＝シャルフィは、テュニス大学のフランス・フランス語圏文学教授。
サン＝ジョン・ベルスやエドゥアール・グリッサン、パトリック・シャモワゾーなどに
関する研究書の他、『そして事物には一方と他方の顔が』グリッサン『インド』『黒い白』
における世界史の詩的脱構築』（オノレ・シャンピオン出版社 2011 年）の著者。

INSTITUT FRANÇAIS

アンスティチュ・フランセ

8-14, rue du Capitaine Scott – 75015 Paris – France

www.institutfrancais.com

INSTITUT FRANÇAIS DU JAPON

アンスティチュ・フランセ日本

c/o Ambassade de France au Japon

4-11-44, Minami-Azabu, Minato-ku, Tokyo 106-8514

〒106-8514 東京都港区南麻布4丁目11-44

フランス大使館内

www.institutfrancais.jp

©Institut français, 2012

pour la version française originale

isbn 978-2-35476-091-5

©Institut français/Institut français du Japon, 2012

pour la présente version japonaise numérique

isbn 978-2-35476-103-5

パトリック・シャモワゾー

サミア・カッサブ＝シャルフィ 著
塚本昌則／中村隆之 訳

この翻訳は Samia Kassab-Charfi, *Patrick Chamoiseau*, Gallimard/Institut français, 2012 の全訳である。翻訳にさいしては、原書において大文字で始まる単語は〈 〉で、原文のギユメは「 」で示し、イタリック体は太字としている。引用文については既訳がある場合にはそれを参照させていただいたが、文脈の都合上一部改訳したところもある。文中の [] は訳者による補足を表している。脚注は原則的に原注であるが、必要に応じて訳注を補っている。その場合は脚注文末に〔訳注〕とした。

9	「書き言葉のなかに潜む話し言葉」
21	記憶の季節
37	数々の抵抗——想像界の戦士
50	幼年時代
63	都会と生者の寓話、あるいはメランコリー
81	アンソロジー
109	略年譜
113	作品

「書き言葉のなかに潜む話し言葉」

〈語り部〉の豊饒な言葉は、「始まりの日」の精髓を語り伝えるが、それでもどうしても言葉にできないものがあり、その核心を言い表す言葉をなんとか作りだし、〈歴史〉に形をあたえ、〈奴隷貿易〉や奴隷制という、アンティル諸島での言い方にならえば^{プレス}内傷、カリブ海および黒人アメリカ両大陸全域ではいまなお疼いている^{プレス}内傷を語らなければという切迫した思いがある——そんな〈語り部〉の言葉と、言語を絶するものとの隔たりのうちにこそ、^{エメルヴェイユ}驚異が、つかの間あらわれる世界の魅力が、さまざまな事物の秘密が隠されている。『テキサコ』に登場する独房の男は、河岸でちらりと見ただけの若い洗濯女だった、語り手の祖母にその秘密を次のように手ほどきする¹。

男は、水や、ザリガニ釣りや、大きな池の窪みにいるラピア魚についての色々な考えを、ただただお喋りした。それから、ベケの石鱈の代わりに泡の立つ蔓を使って、余った石鱈を横流しにすることを教えてくれた。白っぽい色をした葉っぱの下にある種子のエキスをシャツの香りをつけたり [……] するのをやってみせた。とりわけ、彼女には想像もつかないある土地を思い出す喜びを打ち明けてくれた。アフリカ、そう呟いたのだった。[……] 自然を駆け抜けるほんのわずかな震えにも聖なる驚異を感じることを教えた。

さまざまな物語の断片や「アフリカの跳ね返り」から再発明された言葉の驚異、絶えず作り直すべき〈文学の家〉の驚異。パトリック・シャモワゾーの驚異とは、何よりも、現実をクレオール的に寄せ集めることだ。理解しようとせず、硬直もさせないまま、シャモワゾーはこの収集を実行しようとする。「理解しないまま書きつける、硬直させずに書きつける」とは、『カリブ海偽典』の語り手の不安交じりの希望である。二〇〇二年に出版されたこの浩瀚な小説は、倫理が詩的なものと政治的なものに結びつき、擬人化された〈自然〉

1 *Texaco*, Paris, Gallimard, 1992; rééd. 1994, p. 55. [『テキサコ』上巻、星望守之訳、平凡社、1997年、61頁]。シャモワゾーの詩学では、^{エメルヴェイユ}驚異——驚くべき事柄と驚くことのどちらも指示するクレオール語の単語——は不運や不幸の襲来を妨げに来る魔法が不意に現れ、神話や超自然現象が日常のうちに突如出現することを表している。「(ハイチでは大昔からやられてたわけだけど) 不可思議と現実との擦れ合い」(*Texaco*, 1994, p. 415, 『テキサコ』上巻、前掲、186頁) から生じた奇蹟の啓示。また、『いくつもの驚異』という題名で、画家モールの挿画による子ども向けの本が1998年ガリマール社から刊行されている。

の貴重なパノラマを通して、官能的で見事な言葉が、通り抜けるさまざまな風景の美を称揚する、そうした小説だ。シャモワゾーにとって書くことは、時間と記憶の冷酷な空間を駆け巡ることであり、その空間の濃密な不透明性に親しむことであって、記憶の羊皮紙のパリシアセストぎごちない折り目のなかに閉じこもることでは決してない。最初の著作『水の精対魔女カラボッス』(一九八二)から一九九二年ゴンクール賞受賞作『テキサコ』——作家の登場を告げる作品だが頂点ではない——まで、クレオール版アマドゥ・クルマ〔コートジボワールの作家(一九二七—二〇〇三)]のごとき香りが立ちこめる『七つの不幸の年代記』(一九八六)から最新作『クルソーへの足跡』(二〇一二)まで、パトリック・シャモワゾーは、自分を取りまく世界の細部という細部に対して、並外れた注意を払っている。この研ぎ澄まされた注意が、エクリチュールに活力を与えている。その活力はエクリチュールをバロック的きらめきへと高めているのであり、その高みでは不確かなものの幻影のかたわらで、直観的閃光、瞬間的閃光が明滅している。いたる所に広がっている悲劇的なものが、逆説的に、死の圏外への堂々たる高揚を糧としているようなエクリチュール。世界への決して満たされない渴望が、クレオールの人間ならではの類まれな言語の跳躍のなかで渦巻きつつ、黙して地中に潜んでいるときもあれば、激昂することもある長大なエレジーと交わるとき、いくつもの可能性を秘めた文学と、神話とが結びつくのだが、カリブ海の時代の根源的誕生を告げるその結合には、底なしの谷間の影が漂っている。

この驚異は確かに、クレオールの遺産が再活性化される伝承物語のなかで生じるものである。この遺産は、西洋の神話素と進んで合体する傾向があり、そのためエドゥアール・グリッサンが「〈関係〉の詩学」²と呼ぶものの実験が可能となる。その最初の試みが『水の精対魔女カラボッス』だ。この作品のなかで二人の象徴的人物は対決し、術策を弄しながら、あの抜け目ない迂回の詩学を実践する——周縁に押しやられた民は、この抜け目ない迂回の詩学をとおして、自分たちの見方を示そうとするのであり、そうであるから、自分たちは生き延び、ここにいるのだということを事物の中心ではつきり見せようとする。シャモワゾーは、ファノンに次いであらわれた「火打ち石の戦士」シレックス・グリエであり、さまざまな切れ端、彼が——セーレン・キェルケゴールをほのめかし

2 Édouard Glissant, *Poétique de la Relation*, Paris, Gallimard, 1990. 『〈関係〉の詩学』管啓次郎訳、インスクリプト、2000年]

ながら——諸文化の「破片」と呼ぶものを、何度でもつかみ取り、一方の破片を別の破片にこすりつける。そこからわきだす希望は、世界の朝、失われたり疎外されてしまったものに再びあたえられた言葉、健康の回復である。あるがままに再現するのではなく、預言的に復元するのであって、その舞台はまさしく、複数の新しい創世へと招いている作家がつくりだした舞台である。

マンマン・ドゥロ
『水の精対魔女カラボス』によって、フランスの伝承のモデルをパロディー風
に転倒させるという試みはなされた。「戯曲語り」と命名されたこの著作
が導入した混成的な舞台では、アフリカの水の精霊が、カリブ海のサーガの
なかに組み入れられ、そこにシャルル・ペローの伝統が交差する。ランシエ
ンヌ [「昔の女」の意] という、「ギリシャ・ラテン魔女文化の称号をもつ」、
バレエ・スクール
「箒学校」の忌まわしい女主人は、水の母たるマンマン・ドゥロを、カリブ海
の女アルチンボルト³の容貌をした「水辺の女悪魔」として軽蔑の眼差しで見
る。マンマン・ドゥロによれば、「われは大いなる自然の交感／わが血は緑の
樹液／われの一部はいくらか木／わが髪は海藻／そしてわが身体は澄んだ水
／われの一部はいくらか河／わが声は豪雨／そしてわが心は地球だ」⁴。ここで
相対しているのは、異なる文化と時代を代表するふたりの女である。マンマン
・ドゥロの方は、熱帯の島の深部から生じ——彼女の名前はエドゥアル・グリッ
サンの戯曲『ムッシュー・トゥサン』⁵に登場するヴォドゥの女司祭マンマン・
ディオにきわめて似ている——、もう一方のランシエヌは、自分の名前のう
ちに、「モミの木と雪の魔女」という、彼女の魂をゆがんだかたちで反映した
負の烙印が刻印されている。シャモワゾーはそれでも、『カリブ海偽典』を「死
ぬとき、あるいは生きるとき、憎しみが自分たちを通り抜けなかったと知る満
足感」⁶という文章で締めくくっているように、原初的で繊細さに乏しいマニ教
的善悪二元論とは別のものをこの戯曲のうちに見るように示唆している。この
戯曲における決闘は、ほとんどバレエの結末のような大団円に向かい、ハンチ
ントン流の「文明の衝突」⁷などすべてどうでもよくしてしまう。シャモワゾー

3 マニエリスムを代表するイタリアの画家ジュゼッペ・アルチンボルド (1527-1593) の描く絵に似ているということ。〔訳注〕

4 *Manman Dlo contre la fée Carabosse*, Paris, Éditions Caribéennes, 1981, p. 136.

5 Édouard Glissant, *Monsieur Toussaint*, Paris, Le Seuil, 1961.

6 *Biblique des derniers gestes*, Paris, Gallimard, 2002; rééd. 2008, p. 854. [『カリブ海偽典』塚本昌則訳、紀伊國屋書店、2010年、929頁]

7 Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York, Simon & Schuster, 1996. [サミュエル・P・ハンティントン『文明の衝突』当真洋一編注、金星堂、1998年1月。]

の文学はここではまさしく大文字の歴史の彼方を目指す。文学は歴史の贖罪でもその回復でもない。そこで賭けられているものは、その先にあるのだ。

『水の精対魔女カラボス』の冒頭、マンマン・ドゥロとその娘アルゴリーヌによって明らかになるのは、シャモワゾーの詩学において女性が本質的な位置を占めていることである。シャモワゾーの小説と伝承物語^{コソント}では、女性がかならず登場し、水と森の女神や女魔法使いとして、生き茂る森林のなかに紛れ込み、島とその波乱に満ちた運命とアニミズム的交感を行なう。たとえば『カリブ海偽典』のルブリエ [忘れられた女]、『独房の日曜日』のラフリケーヌ [アフリカの女]、『テキサコ』のマリー＝ソフィーは、シャモワゾーが作品を書くたびに異教の女神として讃える、あの超自然的と言ってよい存在を形象化した人物たちである。元型であれ、花の化身であれ、また女主人、三つの血が混じった混血女^{カブレス}やコンゴ出身の黒人女戦士であれ、『七つの不幸の年代記』のマルグリット・ジュピテールのような強欲な愛人や、反対に、初恋の崇高なイメージであれ、とにかく女性はカリブ海世界の^{ポトミクシ}支柱である。リレール [この世に存在しない女] は言葉で描きたいほどに不思議で美しく、憂慮の種で、あまりに捉えがたいシャビエヌ⁸だ。この女性をめぐる『幼年期の果てに』は、あの麗しき恋の時を祝福する自伝三部作の最終巻であり、彼女はシャモワゾーのオーレリア [ネルヴァルの遺作の題名]、初恋の相手だ。『独房の日曜日』では、シャモワゾーのオーレリアは、内傷^{ブレス}の悪夢——奴隷制時代の凍てついた記憶の想起——によって心も体も無理やり奪われてしまった失語症の少女であり、保護司 [シャモワゾー] は彼女の治療に全身全霊を捧げる。最後に、なによりも重要な女性として、幼いシャモワゾーの保護者だったマン・ニノットの名をあげなければならない。肝っ玉母さんであり、称賛を一身に受け、毅然とし、情の深い人物だ。家族アルバムから引き抜かれた勇敢な彼女の肖像が『幼年期の果てに』の表紙を飾っている。言葉が広まるのは、まずはマン・ニノットを通してである。彼女は、最初の語り部の女の声という中継であり、クレオール語の単語や言い回しを伝えてくれるのだ。

「言葉の記録人」とは、そもそもこの生き生きとした言葉の源泉を書字へ移す者のことだ。この源泉は、ややもすると重くのしかかってくる元型や偉大な神話の背後から汲みとらなければならない——より正確には、そうした元型

8 片親が白人、もう一方が黒人と白人の混血から生まれた女性を指す（男性の場合は「シャパン」。明るい肌の色をしているのが特徴。〔訳注〕

や神話がないまま、それらに反するかたちで、祖先から代々伝わる基盤が崩壊してしまった、創世の物語をもたないこの文化から、言葉の源泉を汲みとらなければならないのである。始原のアフリカから引き離されてしまったという^{ドラマ}悲劇は、民衆が共有する芸術上の出来事のなかに、具体的に現れている。つまり、中世の大道芸人のようなやり方で、見事に演じるべき演技として話し言葉は伝達されてきた。『素晴らしいソリボ』（一九八八）の末尾でソリボの力のこもった途方もない語りの業が示すように、民衆の歴史の細い脈絡を、多くの方法で、演出し、中断し、再開し、述べる。民話の物理学、つまり聴衆に差し出された身体と、澄まされた耳は、漠然としたアイデンティティを探究するのに最良の道具になる。この「精神的な武器」⁹を通じて、〈言葉の記録人〉は、ゴーギャンの有名な絵が問うたあの謎と同じ謎を、間接的に問いかける。「われわれはどこから来たのか？ われわれは何者か？ われわれはどこへ行くのか？」個人が父祖の土地を知らない、根こぎの状態から生まれるような人類の文化の形態においては、〈語り部〉の発する原初の教訓的言葉は、自己を見失わないよう個人に働きかける。『クレオール礼賛』では、文化の基礎となる口承性との絆が、戦略的に支持されている。確かにそれこそアフリカという基層を強調する方法であるためだが、同時に口承性がクレオール性の「特権的な様式」となるからでもある。「さまざまな^{コント}説話、格言、《チチム [なぞなぞ]》、はやし歌、歌謡……等々の担い手として、口承性はこの世界に対するわれわれの読解であり、われわれの複雑さのいまだ盲目状態における手探りなのだ」¹⁰。パトリック・シャモワゾーはヴィオンとラブレーが大好きで、そのことは「感傷図書館」と命名されたあの内密な図書館のなかで確認されるとおりだが、そのシャモワゾーにとって、〈言葉の記録人〉という人物像は決定的に重要だ。まさしく〈言葉の記録人〉こそが、先祖から伝わる言葉を書字へ移すことができるのであり、それによって初めて、貴重な文化遺産の保護が約束されるのである。ところが、歴史的には、この移行は当初は失敗だったと『クレオール礼賛』の著者たちはいう。口承性は、少しでもその実質が取り除かれると、フランス的なものへの同一化によって押しつぶされてしまうのだ、あ

9 *Bible des derniers gestes*, op.cit., p. 751. [『カリブ海偽典』前掲、817頁]

10 Jean Bernabé, Patrick Chamoiseau et Raphaël Confiant, *Éloge de la créolité*, Paris, Gallimard, 1989 ; nouv. Ed. bilingue français/anglais, 1993, p. 33. [『クレオール礼賛』恒川邦夫訳、平凡社、1997年、51頁]

まりに硬直し、疎外を深めるばかりのフランス性への、深刻なまでに盲目的な同一化によって¹¹。

われわれの伝統的な語り部の存在を別にすれば、あとはいわば沈黙だった。人が通わなくなった道だ。よそでは、吟遊詩人あるいは吟唱詩人、グリオ、吟遊楽人、トゥルバドゥールといった書記たちが（言葉の記録人）にバトンタッチして、彼らが次第に自主独立を獲得していった。しかしここ [カリブ海] では、断絶だった。普遍的・近代的であろうとする書き言葉とわれわれの多大な部分が眠っている伝統的なクレオールの間には溝があり、深い谷が刻まれていた。この口承伝統の排除はわれわれの疎外の一形態、一次元であった。

『クレオール礼賛』の著者たちが懸念するのは、政治の構成要素としての文化的なものであり、観光名所で語り部が伝統芸能を見せ物にする道とは対極的な道を歩むことが問題なのだ。「伝統の籐（ふるい）にかけられた言葉の平板な継承者たち、墮落したカーニヴァルの素朴なプロモーターたち、耳を聳せんばかりの大音響のズークのしがない仕掛け人たちがいた」と『クレオール礼賛』には書かれている¹²。ハイチ民族学者ジャン＝ブライス・マルスが『伯父さんはこう語った』で「借り物の魂」¹³と名づけるものとともに生きるのを避けるため、逆説的であるけれども、書字のほうが上等だという恣意的な考えから距離を取ることによって、自分自身に回帰しなければならない。シャモワゾーの詩学では、エドゥアール・グリッサンの美学と同じように、書かれたものの力は、流れるような口承性を復権することではじめて認められるものである。口承性の移ろいやすさ、変わりやすさこそ、クレオールの人間の「不連続な断面」¹⁴を何よりも回復させるのだ。アフロ＝アメリカの民の歴史の奥底にとどまるのは、口承性という形式のもつ忍耐強さという性質であり、その持続性、その放埒な抵抗である。とはいえ、それが真正なものであるからといって、シャモワゾーは反転された熱狂をそこに感じているわけではない、つまり口承性を熱烈に擁護したり、西洋の伝統に従属する純然たる植民地的現象として、

11 Ibid., p. 35. [同書、53頁]

12 Idem. [同書、54頁]

13 Jean Price-Mars, *Ainsi parla l'oncle. Essai d'ethnographie*, Compiègne, Imprimerie de Compiègne, 1928 ; rééd. Montréal (Canada), Mémoire d'encrier, 2009.

14 *Éloge de la créolité*, op.cit., p. 34. [『クレオール礼賛』前掲、52頁]

書き言葉に無償の攻撃を加えたりするわけではないのだ。言葉の記録人が『テキサコ』でマリー＝ソフィーに「書き言葉と闘う」よう勧めるのは、何よりも書き言葉が「語られた言葉のなかにある言い難いものを恥知らずなものに変えてしまう」¹⁵からである。それゆえクレオール語の場所は、書かれたものと口承性の位置関係を再発見し、口承性の位置を再調整することによって、はっきり価値あるものとなる。位置を調整することで、口承性は、書かれたものの固い地盤の下に見出すべき肥沃な源泉とみなすことができるようになる。実際、『礼賛』の著者たちは「われわれは書字に潜む言葉である」¹⁶と絶叫している。

したがって、クレオールの口承性を熱烈に称賛することは、あまりに頻繁に黙殺されるか、抑圧されてきた「内なる国土」¹⁷を「測量」したいという欲求と完全に結びついている。この関心事は、シャモワゾーによれば、アイデンティティの複合的な表象という考え方と深く絡みあっている。実際、この言語の様式を通じて、シャモワゾーは、純粋性、本質性という概念に断固として逆らうアイデンティティのあり方を、強く心に抱くようになった。「全-世界」の「小生活圏」¹⁸において、口承性という固定せずに移ろい続ける過程は、可塑的な柔軟性の模範的な例であり、そこからアイデンティティの着想を得ることが可能である。生まれながらの環境である口承性は、存在の震え、存在者のさまざまな屈曲と巧みに調和している。ポリフォニーを戯れながら拡張することで、口承性は公の歴史と公の文化を脱領土化する。口承性とは、変わりやすく、捉えがたく、作家が記録しなければ消失するかもしれない、あの「記憶-砂」をついに組み入れる、総合のための決定的要素だ。その「記憶-砂」¹⁹はすべて「古老たちの記憶の断片のなか」¹⁹にあり、すべてが、生涯読み書きを覚えることになかった、あの名もなき人びと——『七つの不幸の年代記』の冒頭がうたう、まさしくあの人びと——の記憶として存在するのだ。この「クレオール語とフランス語との隙間でおこなわれる冒険」²⁰は、多くの点で、アンティル文学の冒険そのものであり、一言語使用絶対主義や、「文学的分裂症」²¹などの形式すべてに対する解毒剤である。「文学的分裂症」に陥ると、「一方では

15 Texaco, op.cit., p. 258. [『テキサコ』上巻、前掲、304頁]

16 *Éloge de la créolité*, op.cit., p. 38. 強調は原文。[『クレオール礼賛』前掲、57頁]

17 Ibid., p. 40. [同書、62頁]

18 Patrick Chamiseau, « J'ai vu un peuple s'ébrouer... Nous n'avons jamais été aussi vivants. Les « états généraux » ne sont pas à la hauteur de la dynamique à l'œuvre », *Le Monde*, Paris, 14 mars 2009.

19 *Éloge de la créolité*, op.cit., p. 38. [『クレオール礼賛』前掲、58頁]

20 Ibid., p. 49.

21 *Écrire en pays dominé*, Paris, Gallimard, 1997 ; rééd. 2002, p. 67.

支配する言語で書かれた作品を、もう一方では支配された言語で書かれた作品」を作ることになりかねないのだ。

口承の非合理的な言い回しという同じ探究が、シャモワゾーのどのテキストにおいても待ち構えている。読者はまさに尊重するよう求められる、シャモワゾーを賛美するミラン・クンデラが数年前に述べたあの「シャモワゾー化したフランス語」と、シャモワゾーが言語に吹き込むあのきわめて個性的な文体の曲がり角に解き放たれる、独特な屈曲を。「悲しみながら読む。喜んで読む。頁を飛ばして読む (Lire-triste. Lire-joie. Lire-sauter-pages)」必要があるのであり²²、〈言葉の記録人〉が「クレオール語で話し、話したてる (parler-déparler en créole)」のを聞く必要があるのだ²³。こうした、ある種の戯れのような、アイロニカルな挑発のようなもののせいで、規範的な言語の、踏み固められた小道の外へ漂流しようという気持ちが高まってゆく。シャモワゾーにとっての書くことの悦びはそこにある。つまり、「支配者の」言語を不遜にも転覆することのうちに、道なき道を何度でもさまようことができるようにと、「その宮廷、その華麗さ、その葬列」もろとも、言語をまるごとひっくり返すことのあるのだ。おごり高ぶった、まるで欠陥ばかりの「ヘラクレスの言語」の硬直を前にしたこの居心地の悪さを、シャモワゾーは一九九七年刊行の試論『支配された国で書く』のなかではつきり述べている²⁴。

私はこう感じていた、散文は段をとばしながら階段を上る術を知らないと、散文は近道を、犬の抜け道を、海賊の通った跡を知らないと。散文はうんざりするほどの石ころに覆われた道を通るように強い、救いようのない現実に対して、眩量を感じることもなく、その現実を緻密に描くことを強いてきた。私は、ヘラクレスの言語が掃き清めようとする私という存在のこの結び目のなかで、驚異を感じることもなく、辛い思いで働く自分に気づくことがあった。

生きた文学を生み出すためには、この代価を支払わなければならない。つまり確立した言語を転覆すること、その言語のうちに一群のクレオール語を

22 フランス語としては破格の用法だが、このような言葉の使用はクレオール語表現を下敷きにして見るとほぼ間違いない (たとえばクレオール語では上記の « lire-sauter » のように動作・行為を示す動詞を重ねることが可能)。〔訳注〕

23 Ibid., p. 30, 190.

24 Ibid., p. 87.

沈殿させることだ。一群のクレオール語とは、民話の登場人物の名前、口承のリズムに合わせた熱気を帯びた口調——沈黙や中断をふくむ——、語られる物語が一時的に中断しているあいだも、声の糸が震えたまま維持される、著者が「音響催眠術」と名づけるもの、さらには「太鼓の前奏とよく調和する、途切れなく繰り出される名前と言葉の、打ち震える反復」²⁵など、時間、断絶、非人間化に抵抗する言葉の贈り物がもたらす、あらゆる眩暈とあらゆる繁茂のことである。これが、シャモワゾーによる「口承文学」であり、彼が各地のかつての言語復権文学運動の後継者であること、モロッコ人作家アブデルケビール・ハティビが夢見たような「二言語」を編み上げる代書人であることを示している²⁶。

口承性の驚異を再活性化しようというこの意志の根底には、思想信条的な理由もある。『支配された国で書く』の冒頭で、シャモワゾーはいきなり重要な問いを投げかけている。「さまざまな文学は、君のために何を予見してくれたのか」。まさに問題は、アンティルの作家だけでなく、植民地化されている、あるいはかつて植民地化されていた土地の作家が、いま存在するさまざまな文学——あるいは支配的だと感じられる文学に対して、正確に何を期待しているかを明確にすることである。みなが一斉に生み出す賛歌が、この作家にとっては、自分の何ものにも還元できない固有性への侵害であるように思えるとき、その合唱のさなかでどうすれば自分の声を見出すことができるのだろうか。支配者の慣習と、話したてることから生まれる反逆的な漂流とをどのように和解させることができるのか。ここでは、サン＝ジョン・ペルスやカリブ海生まれの他の有名作家のように、言語は「神の喉元」²⁷には宿らず、アメリカスへ連れて来られ、クレオール化を容赦なく強いられた奴隷たちの口に宿る。だから迂回に迂回を経て行くべきなのだ。奴隷船からアンティル諸島に上陸し

25 *Biblique des derniers gestes*, op.cit., p. 737. [『カリブ海偽典』前掲、801頁]

26 「二言語」はアブデルケビール・ハティビが『二言語の愛』(Paris, Fata Morgana 1985; rééd., éditions de la Différence, 2008) という物語で展開した概念。自文化の二言語状況の網の目を起点に練りあげられた。その概念は、同時に存在する二つの言語を使用すること——ハティビの場合はアラビア語とフランス語——から来る危険な言語状態を回避するものであり、「第三の耳」を昇華させることを目ざしている。「二言語」は、使用する二つの言語のあいだをただ往還するというほかの何ものでもない。それゆえ「二言語」はとてつもない創造ではなく、諸言語間のもつれ、諸言語間の創造的な親密性、傲慢にも二言語を分離できると考えるあらゆる見方を越えてさまざまな対応関係を指し示すために、ハティビが見つけることができたのもっとも正確な名称である。

27 「まさしく私は神の喉元に宿る」『讃歌』9節より。Saint-John Perse, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1972, p. 41.

たばかりの「アフリカ＝ニグロ」の言葉、彼らをこの地の環境に順応させるクレオール化した黒人の言葉、死んだ奴隷の通夜のときにまさに語り部を務める黒人の言葉、という迂回路を経て、『七つの不幸の年代記』に序文を寄せたグリッサンにとって、「シャムの鳥」ことシャモワゾーは、「文学の今日的な展望のひとつが生まれる場である、口承と著述のあの境界を歩き」²⁸ながら、美学と存在論との一致を探し求めている。たしかにこの姿勢は、書き直しと移し替えによってできているが、それはまた知的な逃亡行為^{マロナージエ}、「言語のなかへの逃亡行為」²⁹によっても作られているのであり、その逃亡行為の騒々しさは、まさしく「新しい著述のなかにクレオールの言葉を受精させる」³⁰ことから来ているのだ。明らかに、〈語り部〉の神話的性質には、文学へ移行するとき、〈歴史〉を取り消そうとする〈言葉〉の創世記の刻印がぎざまれている。この公式の年代記の頁を、書き直さなくてはならない。実際、「言葉」は、首都の中央権力によって維持される慣習的物語の下からあふれだすこの対抗言説に、毛細管のように巻き付いている——それは歴史のエクリチュールに抑圧される言葉である。「われわれの〈歴史〉（より正確には、われわれの複数の歴史）は植民地の〈歴史〉のなかに難破している。集団的記憶はわれわれの急務である。われわれがアンティルの歴史だと思っているものは、アンティルの植民地支配の〈歴史〉にすぎない」³¹。植民地の歴史のこのヘゲモニーに対して、シャモワゾーは「小さな声」、つまり〈語り部〉によるその場しのぎの反逆を対置する。〈語り部〉は、「記憶を統べる人」³²であり「行き場を失った声に言葉を与える」祈禱者であり想起者だ。彼はこの資格でプランテーション社会を通じて損なわれてきた、共同体の結集を引き受ける。すなわち、「〈語り部〉は、身ぶりによって回復したこれらの身体に、一緒に話すこと、一緒に答えること、歩を揃えて歩くこと、同じ喜びを感じることを教える」³³のだ。言語と身体を結びつける、この「一緒に話す」ことの瘻學的な美³⁴を表現するために、特別な統語法が用いられる。つまり抑揚のアクセント、言葉の加速化と断続音、ダンスのリズムを再現し、〈語り部〉と聴き手との相互作用を増大させる、ありとあらゆる拍

28 *Chronique des sept misères*, Paris, Gallimard, 1986 ; rééd. 1998, p. 6.

29 *Antan d'enfance*, Paris, Hatier, 1900 ; rééd., Gallimard, 1996, p. 69.

30 *Éloge de la créolité*, op.cit., p. 36. [『クレオール礼賛』前掲、55頁]

31 *Ibid.*, p. 36-37. [同書、56頁]

32 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, Paris, Gallimard, 1997 ; rééd. 1999, p. 141.

33 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 186.

34 ブルトンが『ナジャ』に記した表現。「美は瘻學的なものだろう。さもなくば存在しないだろう……」(ブルトン『ナジャ』 巖谷国土訳、岩波文庫、191頁)。[訳注]

子の付け方——「オ！」——などであり、そうしたなかで、「身体の記憶、バンバラ族、バミレケ族、モシ族、マンディンカ族、フォン族、ヨルバ族 [いずれもアフリカの民族] の記憶」³⁵ が姿をあらわすのだ。言語と身体を統合する〈語り部〉は、爆発して散り散りになった集団をもとの状態に戻す、言ってみれば「皮膚-自我」(ディディエ・アンジュー)³⁶ の機能を引き受けている。「たくさんの声をもった、多様なリズム組織のようなものがあると私は感じている。その声のひとつ——気の触れた独唱者——が、その組織のなかに宿るあらゆる声の皮膚となっているのだ」³⁷。ただ単に朗唱を行なうという次元を超えたところで、言葉は予測できないパフォーマンスのなかに身体をまるごと引き入れる。合衆国南部のジャズが、多くの点においてまさしくそうであるように、ここでは「偶然的な美学」とでも呼べそうな何かが生まれつつあるのだ。そして、『奴隷の老人とモロス犬』のなかで強調されているのは、まさに治療のパフォーマンスとしての〈物語〉のこの力である。それは『奴隷の老人とモロス犬』の〈語り部〉が言葉を独占し、〈語り部〉の身体が驚くべき変身を遂げる箇所である。

アビタシオン [農園] のパパ・コントゥール [語り部父さん] はちつともうだつのあがらない男 (目は小さく、身体は板みたい痩せ、やや猫背の、真っ黒ニグロ) だった。彼は言葉を継ぎながらその姿 (大きく見開いた目、厚みを増した体、ぴんとはった背筋) を変えていった。彼は自分の言葉に栄養をつけるために、周囲の生命を吸い込んでいた。そしてその言葉でもって、彼は生命を呼び覚ましていた。彼は言葉して (parolait) 笑わせていた。そして笑いによって胸部は広がり、大きくなっていった。すべての人間の憎しみ、欲望、失われた叫び、沈黙は、彼の口を通して、自らを表現していた³⁸。

このような状況では、〈語り部〉の担うさまざまな声を称賛することと、クレオール語を讀めることを切り離すことはできない。植民地文化の崇高な頂きでは、「言語の天才」が突出した輝きを放っていると集団的想像力のなかで思われているが、シャモワゾーはそのような頂きに根源的な懐疑を感じてい

35 Ibid., p. 169.

36 「皮膚-自我 (moi-peau)」はフランスの精神分析家ディディエ・アンジューが提唱した概念。ディディエ・アンジュー『皮膚・自我』福田素子訳、言叢社、1993年。[訳注]

37 Ibid., p. 186.

38 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 47.

る、ただしそれと同じほど、母語に穿たれたいくつもの穴のなかへ沈潜するという、まさに洞窟探検家を感じるような恍惚を好んで口にして。「船倉の叫び」と「逃亡奴隷の沈黙」とのあいだにこそ、このクレオール語という確かな場所における奇跡的な均衡点があるのだ。その場所はまた一つの時期でもあり、普遍的な時期でさえある。シャモワゾーは普遍性という概念に懐疑的な性格であるけれども、あらゆる言語はその起源においてクレオール語であったかもしれないのだから、その場所は普遍的にみられる時期なのだ。それは、「多言語に対する鋭い感度」、つまり他のさまざまな言語を自らのなかに取り入れ、それらの言語によって豊かになるという、一つの言語のもつ能力を浮き彫りにするのに適した場所である。どのようなものによっても、この場合で言えばどのような系譜学によってもふさかれることがない多孔性。クレオール語は「古びることで変色し、その古色を傲慢に見せびらかしたことなど一度もなく」、「高慢な孤独の時空間を所有したことなど一度もなかった」³⁹。この若々しい可塑性には、「最初の諸言語」の痕跡が刻み込まれているが、この可塑性に力を得て、クレオール語の身体は、文化的アイデンティティの増大に関与している。シャモワゾーにおいて、このことは排他的・絶対的アイデンティティのようなものとしてクレオール語を振りかざすことによってではなく、フランス語が新たな着想＝養分 (innutrition) をくみ取ることができるような、活発な自由地下水の揚力によって、自然な再上昇によって実現されるのだ。「クレオール語は、われわれアンティル諸島、ギューヤヌ、マスカレーヌ島の住人にとっては第一言語であり、われわれの深層の自我、われわれの集団的無意識、われわれの大衆の天才を伝達する原言語 [……]」⁴⁰である。『クレオール礼賛』におけるこのクレオール語への高らかな頌歌は、アンティルの歴史と記憶の再発見へと導いていくさまざまな道のひとつなのであり、作家はその歴史と記憶を証言することを自らの責務とするのだ。

39 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 286.

40 *Éloge de la créolité*, op.cit., p. 43. [『クレオール礼賛』前掲、66頁]

記憶の季節

クレオール世界を再構成しようというこの広大な企てのなかで、記憶を取り戻すことは死活問題だが、それは単純にはいかないことでもある。「記憶を失えば世界を失うのさ」と『カリブ海偽典』でマン・ルブリエは悲しそうに述べる。「そして世界を失えば、人生の脈絡そのものを失うのさ」⁴¹。奴隷制が根源的に刻印されているカリブ海文化復興の試みは、とりわけ「拒んだ者たち」を思い出すことによって行なわれる。人間としての尊厳を隷属に対抗させ、グリッサンが一九五六年の詩集『インド』でカリブ海の「闇の英雄たち」と名づける、デルグレス [一八〇二年グアドループで奴隷制復活に抗戦した軍人]、トゥサン＝ルヴェルチュール、デサリーヌといった、あの「剥き出しの夜の征服者たち」⁴²へ道を開いた「拒んだ者たち」を思い出すこと。まさしくこの記憶の要請の論理によって、マルティニックの映画監督ギイ・デロリエが二〇〇〇年に制作した映画『中間航路』の脚本をシャモワゾーは作成した。奴隷貿易時代、一隻の奴隷船の大西洋横断を映しだした映画である。『クレオール礼賛』とは言えば、「徒党を組んだ逃亡奴隷たちによる不透明な抵抗、生き残りのための暗号とあの手この手の執拗な抵抗を繰り広げ、今日では解読不能なさまざまな妥協を試み、思いがけない生活の統合をはかって、奴隷制の地獄に立ち向かった者たちの新鮮なヒロイズム」⁴³に敬意を表する。しかし、記憶をめぐる二大傑作といえ間違いなく、エドゥアル・グリッサンの一九六四年刊行の小説『第四世紀』——奴隷貿易の始まりから二〇世紀までのアンティルの歴史の広大なサーガ——と、一九九七年出版のシャモワゾーのスリリングな物語『奴隷の老人とモロス犬』^{スレイヴ・ナラティブ}である。アメリカ合衆国の奴隷の自伝の伝統においてみても濃密で力強い、シャモワゾーのこの物語の題名は、著者によれば、アーネスト・ヘミングウェイのあの名作『老人と海』に着想を得たということだ。

七つのリズムに従って順番に展開するこの物語は、ある奴隷の老人が自由を勝ち取るまでの恐るべき通過儀礼を描いている。解放のお告げ^{デシヤルジュ}を得た年老

41 *Bible des derniers gestes*, op.cit., p. 518. [『カリブ海偽典』前掲、568頁]

42 Édouard Glissant, *Les Indes, Poèmes complets*, Paris, Gallimard, 1956, p. 155.

43 *Éloge de la créolité*, op.cit., p. 37. [『クレオール礼賛』前掲、56-57頁]

いた奴隷は、その「生の命令」⁴⁴に促されて、プランテーションの深淵から逃走し、丘陵の麓へたどり着く⁴⁵。

解放のお告げについて話そう。奴隷の老人たちが経験してきたことだ。それは忘れられた場所に向かって吐き出される質の悪い衝動、奥底から込み上げる熱、固まる血、とんでもない一大奮起、心を揺さぶる呼びかけで、それを聞いてお前たちは脱線する頑なな力をもつさ。

物語のエクリチュール全体は、スリリングな緊迫感によって練りあげられ、失踪者の「弓なりの身体」⁴⁶を突き動かす「発されることのない沈黙の叫び」⁴⁷の跳躍によって磨かれている。それぞれの文は短く、取り乱したようなオーバーラップで描かれていて、「壊滅のなかで生きている」⁴⁸という、奴隷の老人が感じている荒々しい感情がどれほどのものであるかを示している。感情の表現に適した、文の簡潔な構造においてこそ、逃亡奴隷の頑なな活力は定着されるのであり、エクリチュールの味わいは身体エクリチュールのエクリチュールと同じ発熱に囚われるのだ——「長いあいだ懇願する引き締まった筋肉のように」⁴⁹。読者は彼のシルエットが消えては再び現れるのをたどり、彼の流浪につきまとう不測の事態、叢林を通るときに「植物の平手打ち」によって彼の皮膚が堪えがたいほど傷だらけになるのを目の当たりにし、「追いかける動物との衝突」⁵⁰を見まもる。奴隷の背後を肉食の死刑執行人が狂ったように追いかけていることを示すためには、それにふさわしい言葉が必要である。その言葉は「逃げることの息づかいを表す言語」であるというだけでなく、「老人が一言も発していないことを知らせながら、語ったとすれば言ったかもしれないことを伝える言語」である。「彼の沈黙の言葉を、彼が語ることを押し潰してきた支配の刻印に混ぜ合わせるような言語。高さも低さもなく、意思を完全に伝え、原則的に開かれている言語」⁵¹。シャモワゾーは、この身ぶりを通じて、新たなストイシズム、黒人逃亡奴隷のストイシズムを発明する。このストイシズムには、強

44 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 73.

45 *Ibid.*, p. 41.

46 *Ibid.*, p. 87.

47 *Ibid.*, p. 144.

48 *Ibid.*, p. 50.

49 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 161.

50 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 71.

51 *Ibid.*, p. 145.

烈な感情移入をとまなう証言の義務が厳格にふくまれている。思い起こすことは、共感をもって感じることを、ここでははっきりと意味しているのだ。「彼が、すべてからとても隔たったこの場所で、この石のそばで、覚えたかもしれない感覚を、私は感じていた [……]」⁵²。この誇りにみちた悲劇的な記憶を蘇らせる、そんな役目が自分に託されたことに、作家は気がつく。「こうして私は知ったのだ、私は一個の物語イストワールを書くだろう、入り交じったわれわれのさまざまな歴史イストワール、解きほぐせないさまざまな記憶がはらむ深い沈黙によって練られたこの物語をいつの日か書くだらうと。ある奴隷の老人が〈大いなる森〉へ逃げ込む物語、自由を目ざしてではなく、自らの骨が汲み尽くしがたい証言をすることを目かけて逃げ込む物語」⁵³。小説冒頭部での奴隷が描写がすでに、この人物が神話的な叙事詩の英雄であることを示している。これは、マリ＝クリスティヌ・ロシュマンが強調するあの「逃亡行為の神学」の伝統のなかに見出される人物像だ⁵⁴。逃亡奴隷マロニはこのように、アンティルの創世記における最初の人間なのだ⁵⁵。

砂糖島の奴隷制時代に、物語を何ひとつ知らず、ずば抜けた跳躍力もなく、人の楽しませ方も知らない老ニグロがいた。彼は沈黙を愛し、孤独を好んだ。彼は不動の忍耐からなる一個の鉱物だった。無尽蔵の竹だった。人は彼のことを〈南〉の土地のようにごつごつしているとか、千年を経過した老木の樹皮のようだと言っていた。それでも、〈言葉〉が仄めかすところでは、彼は人生という美しい巨大な炎によって突如燃え上がった。

「昔からある木々のなかでもっとも古い木よりも古い」⁵⁶ という、この年を取らない人物は、内的な流刑状態を生きている。新たなシーシュポスである彼は、畑仕事の後の奴隷たちの共同体のダンスには加わらない。魂は荒廃し、「もはや人間でもなく、獣でもない」、「形がなくなって見分けがたく、荒廃した実在者たちの混乱」にほかならない、「この大勢の人びとの不透明な実質」⁵⁷

52 Idem.

53 Idem.

54 Marie-Christine Rochmann, *L'Esclave fugitif dans la littérature antillaise. Sur la déclive du morne*. Paris, Karthala, 2000.

55 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 17.

56 Ibid., p. 24.

57 Ibid., p. 25.

を自分のものとしていた。なぜなら、「服従のまね、隷属の姿勢、ブランテーションのリズムとサトウキビを刈るリズム」だけを行うアピタシオンで、彼は自分の「生活を無力なものにしてしまった」からだ⁵⁸。ブランテーションで、生き延びるために、彼は鋳物のような無気力で防備し、底知れぬメランコリーに襲われる。そのとき、解放のお告げが、少しずつ強烈な熱を帯びてゆきながら、非人間化したこの世界の外に彼を投げだし、誰も経験したことのない暴力への死に物狂いの探求へ向かわせる。そのとき、決定的に回復不能とみえた彼の意識の奥底で、生命のきらめきがかくすぶりはじめ、芽吹き、突如として燃えあがる。そして苦痛が、唯一無二の遺産のかたわらに、彼を連れ戻す。その遺産とは、自分自身の奥底に感じるあの「光の刻印」⁵⁹をなんとか追いかけてようしながら、彼がついに所有しているのだと意識するもの、つまり身体という遺産である。彼の逃走は、実際、内的なものである。

〈大いなる森〉へ上ること——逃亡行為！——はある種の地獄下りでもある。「古の奴隷」を追跡するのは、一個の劫罰であり、主人が放つ猛り狂う一匹のモロス犬だ。その後、逃亡する奴隷は猛獣の「洗礼を知らない口」⁶⁰に脅かされる。船倉で運ばれてきたアフリカ人と同じ、悲惨きわまりない条件下で島に到着した獣は、怪物と化していた。シャモワゾーはこの機会をとらえて、読者を大西洋横断の瘴気のなかへ陥れる。「鉄枷をつけられた積み荷」、「飢えと黄熱で干からびた人間という名の商品」⁶¹が、陸に降ろされる奴隷市場の雰囲気の中へ陥れるのだ。主人とモロス犬は暗澹たる契約を結ぶのだが、この場面は、小説中では、恐るべき儀式において結ばれる、食物を通した異様な絆として示される。「白人主人は、モロス犬を、特異な、なんととっても人目に触れない仕方、食べ物を与えていた。瘠撃する肉。髓が燃えたままの骨。白人主人その人がカリブ族の戦士の頭蓋骨のなかで捏ねた、人肉の血染めソーセージ」⁶²。イメージの力は、この野蛮で、原始的な聖体を表象するのに一役買っている。だが、闇の食人鬼として表象されるモロス犬は、逃亡する奴隷を狩る側であるにもかかわらず、じつはある種、逃亡者に似ている。モロス犬は、結局のところ、「奴隷 [逃亡者] の苦しみの分身」でしかないからだ⁶³。こ

58 Ibid., p. 22.

59 Ibid., p. 64.

60 Ibid., p. 40.

61 Ibid., p. 36.

62 Ibid., p. 40.

63 Ibid., p. 51.

のため、物語は、一方に主人とモロス犬がおり、他方に逃亡奴隷がいるという、安易な二項対立によって組み立てられてはいない。三つの中心人物の精神の深い苦悩を、とりわけ三者をひそかに似たもの同士にしているかもしれない絆を通じて、われわれは想像せずにはいられない。語り手にとって、モロス犬が怪物となったのは、犬もまた奴隷船の恐怖を、「あの崩壊」⁶⁴を経験したからである。追跡の最後に、モロス犬は奴隷の息の根を止めず、狂ったように粘り強いこの人間に打ちのめされ、ひたすら彼を舐めるだろう。密林の奥深くで踏み迷う主人もまた、苦しんでいる。彼は後悔の瞬間を味わっているのであり、「授けることのできない優しさ、自分が壮大だと信じ込んでいた創設の無意味さ [……]、自分の人生が華々しい失敗だったという事実」を投じている⁶⁵。

逃亡行為のこの伝承は、神話の深部に触れている。モロス犬は、ただ単に「人がソローニュ地方の猟犬の群れとして讃え、[……] ニグロを栄養にしてきた」、アンティル諸島の奴隷たちを恐れおののかせてきた、あの「番犬」の一匹ではない⁶⁶。シャモワゾーによれば、この犬はケルベロスの化身なのだ——「ダンテの錯乱によく現れる三つの喉をもつ年老いたケルベロス」⁶⁷。通夜に集った奴隷たちに〈語り部〉が素描するその肖像は、その意味で重要である。先住民とギリシャ・ラテンの神話体系を参照しながら、〈語り部〉は超自然の系図を描きだすのだ⁶⁸。

彼が言うところでは、このモロス犬は死者と地獄の番犬だった。モロス犬は、毛の生えた鳥、翼をもつ馬、角をもつ水牛、物言わぬ癩病蛙＝人間、肉食花などの身体を備えていると彼は言った。母なる水と傷ついた月から造られたその肉体は、大切な扉の守護者だった。彼が言うには、その犬を打ち倒せば、誰一人として名づけたことのない幸福に至るのだった。影を吐きかける太陽を伴いながら、地下へ旅するさまを、彼は述べた。時折り、彼はモロス犬を、聖母の涙のようなほのかな光の群れの牢番と呼んだ。彼の話では、犬は、死んだ生命がもう一度芽吹く、想像を絶する墓石の縁に生えるシュロの葉で飾られている。彼の描写では、犬は、天体の移行にしたがって老人たちから捧げ

64 Ibid., p. 34.

65 Ibid., p. 133.

66 Édouard Glissant, *Les Indes*, op.cit., p. 155.

67 *Biblique des derniers gestes*, op.cit., p. 340. [『カリブ海偽典』前掲、379頁]

68 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 52-53.

られる死人を食べる。[……] 彼は、いつでも犬を、物と物との繋ぎ目、境界をなす水源、移行にして深淵、近道という名の細長い坑道に位置づけた。彼は、この犬が豹の毛皮を身にまとい、主人を超えて巨大になり、その肉に食らう者には予知能力をあたえるさまを想像した。

魔術的リアリズムと、〈語り部〉の幻視する驚くべき心的投射が結合することで、詩ハ絵画ノヨウニ (ut pictura poesis) の古来の伝統に連なる、詩と絵画の豪華な相互作用がここで生み出されている。この運動は、奴隷の老人の肖像を殉教の聖人に仕立て上げる。われわれは彼の受難だけでなく（「[……] 彼は両腕を十字架のように伸ばす、指の一本いっぽんは渴望する根、鋭敏な葉叢のようだ」⁶⁹、主人の〈呪われた者たち〉への自己投影も体験する。良心の疚しさのせいで、主人はそのような投射を活性化するのは。存在の回復は、ここでもまた苦しみを学ぶことによって果たされるのだが、その苦しみは、その先に自由があるために、外面化され、讃えられる。しかも、この通過儀礼のおかげで、老人は自身の身体の失われた知覚を奇跡的に回復する。真の充足感がここにある。「これまでの生涯、ゆつくりめぐらせてきた血が目まぐるしい早さで流れるのを彼は感じた。引き裂かれた苦しみのなかで、自分の身体のそれぞれの先端部、知らないままだったそれぞれの器官、忘れたままのそれぞれの機能を彼は感じた。身体の各器官を結びつけて動かす、循環する太陽を彼は感じた」⁷⁰。この悠久のジャングルでは、木々は「ほとんど人間のようなささやき」を発する。シャモワゾーのエクリチュールは、アニミズムの性質を否応なく帯びている。そのエクリチュールは生命をもたないものを、人が生氣のないと考えていたものを立ち上げる。それは〈大いなる森〉の「未踏^{ラジエ}の叢林」に潜り込む奴隷の歩みと、救済への逃走に完全に没入している作家の歩みとが似ていることに、気づくように仕向けてくる。いずれもそれぞれの仕方、聖なる「サンクチュアリ」⁷¹に精神のエネギーを注いでいるのだ。

このサンクチュアリは何よりも熱帯の〈自然〉であり、シャモワゾーは自然への聖務を熱心に執り行う者のひとりだ。それは生態系、つまり母なる大地の記憶であり、そのなかに他のさまざまな人間の記憶がつねに痕跡のかたちで埋め込まれている。小説第四章「月」は、ボードレールの「万物照応」のアンティ

69 Ibid., p. 72.

70 Ibid., p. 64.

71 Ibid., p. 72.

ル風変奏曲である。巨大な木々の「ほとんど人間のようなささやき」⁷²、生命の息吹、この植物の神殿の脈打つ心臓全体が、ゆっくりと聞こえるようになる。逃亡奴隷は木々を、「大聖堂をじっくりと見るように」⁷³眺める。感覚が混じりあい、世界が始まったあの驚くべき熱帯の宇宙のなかで、植物の「解きほぐしがたい契約」（サン＝ジョン・ペルス）⁷⁴と一体となる——そんな共感覚のふるえを通して、疾走のリズムによって刻まれる文章の流れはますます増幅される。運命の三女神〔ローマ神話に登場し、運命の糸（生誕、寿命、死）を司る〕の伝説的な舞台は、目も眩むような幻覚によって再構成され、その舞台で逃亡奴隷は、「綿を運んだ鳥、糸巻きをあたえた魚、機織りをした蜘蛛を見」、「世界の揺りかごであやされる両性具有のカップルを見る」⁷⁵。夢か幻のように絡まりあう動物相と植物相は、活動を停止した雑多な混合物を生みだすのではなく、神も人も等しなみに巻きこむ圧力となってどっと押し寄せ、あらゆるものに意味をあたえるのだ。ある曲がりくねった根は、シャモワゾーの筆によって「自閉する女神」⁷⁶になり、奴隷の老人は、突然、土を食べるシャーマンとなって、「伝説の苔」とたがいに浸透しあいたいという激しい欲動に駆られる。「実際には、すべての葉がわしには良かった、わしはこの植物の魂と一体になりたかった。[……] 信じるものはなにもない自分が、すべてに信頼を寄せていた。陰鬱な蔓を髪のように垂らしたこれらの木々、みだらな根を生やした青白い蘭の花々[……]。わしは道に迷った幼子のように加護を祈っていた」⁷⁷。〈大いなる森〉は母の胎内であり、生殖の熱気にみちている。逃亡者はそこから勇気と粘り強さをくみ取るのだが、そこはまた不安をかき立てるキマイラ——「七つの頭をもつ獣、あるいは秘儀伝授の恐怖にみちた竜」⁷⁸——とすれちがう場所でもある。一体となるような結合に、語り手も作中人物も巻きこまれる。語り手は物語を作中人物に譲り、作中人物のほうでも物語を引き継いで、両者のあいだの距離が少しずつ縮まり、やがて「彼」は「私」になる。物語の感情のリズムは、衰弱の瞬間、激しい歓喜の瞬間、禁欲的なエネルギーの瞬間を代わる代わる示してゆく。たとえば、奴隷は野獣の追跡から逃げるのを諦め、野獣と相対するという恐ろしい決心を固めるとき。まさしくここで、彼は逃亡

72 Ibid., p. 69.

73 Ibid., p. 105.

74 Saint-John Perse, « Pour fêter une enfance I », *Œuvres complètes*, op.cit., p. 23.

75 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 76.

76 Ibid., p. 88.

77 Ibid., p. 98-99.

78 Ibid., p. 125.

奴隷から戦士になるのだ。この段階で、両者の立場は逆転し、狩る側が獲物となり、狩られる側はアフリカ戦士の身ぶりが自身のうちに隔世遺伝のように蘇るのを感じ、追跡を開始する。「照りつけるサバンナで発せられる襲撃の雄叫びがわしに戻ってきた。仕留めた象たちの重量と猛獣たちのうなり声。泥のなかで疲れきるワニの包囲。勇士たちを励ますダンス」⁷⁹。もっとも戦士は、ここでは「征服や支配を求めない」⁸⁰ののだが……。

それでも語り手は、追跡の恐怖を言い表す言語が悲しいほどに不十分であることに躓き、途方に暮れる。息を切らす逃亡者の背後にこれらの文をいくら差しむけてみたところで、どのような場面も、逃亡者の真実にもっとも近い感情を伝達するために、結局は十分な正確さがない。「古い音と言葉遣い、複数の母音の性質、抑揚の束、興奮を呼び覚ます語の結びつきなど、どんなものを私にもってこようと、この言語で残りの部分を描写することは私には不可能だ [……]」⁸¹。別の言語表現を、別の語り方を発明しなければならない。文学の震源地は、「言葉の外」、「書くことの手前」⁸²にこそ宿るのであり、そのためどんなに高尚な修辞ももはや役に立たない。『奴隷の老人とモロス犬』では、この焦点は先住民の〈石〉によって表されている。その〈石〉は、絵文字が幾重にも彫り込まれた太古の聖なる羊皮紙パリンフセストであり、「運命を打ち砕くようにして」絶滅し、消え去った文明の「押し潰された海藻」ラミネ・ラミネールの痕跡だ⁸³。〈石〉は「民たちなのであり、その民については石しか残らなかった」⁸⁴のである。〈石〉は瞑想へと誘う。それは痕跡なのだ。

物語の終わりに、語り手はわれわれに、犠牲と再生のこの伝承が寓意的価値を持っていることを明らかにする。奴隷の老人は「歴史－記憶と集められた時間の運搬」を請け負っているが、この老人から語り手が引き継ぐ役割を超え、記憶を集めるという機能を超えて、「老いさらばえた男」の身ぶりは現代の寓話として読むこともできるのだ。物語の最後の段落で、シャモワゾーはこう書いている。「私たちは全員、怪物に追われて逃げる、わが老いさらばえた男のようだ。逃げること、私たちの古い確信から。私たちの心中に入念に

79 Ibid., p. 101.

80 Ibid., p. 146.

81 Ibid., p. 84.

82 Ibid., p. 87.

83 Ibid., p. 127.

84 Ibid., p. 129.

定着してしまったものから。私たちの馴染んできた、システムに従う時間通りの反射的行動から。私たちのぜいたくな〈真実〉から」⁸⁵。

エドゥアール・グリッサンと同様、エクリチュールを通じてあの「欠如している民」(ドゥルーズ)⁸⁶を世界に出現させようことを目指して、パトリック・シャモワゾーは二〇〇二年、歴史も、詩学も、政治も、エコロジーもふくんだ一大巨編『カリブ海偽典』を完成させた。八六五頁におよぶ小説に登場する、反植民地主義者で、色恋沙汰の多いバルタザール・ボジュール＝ジュールという同時代の人物は、逃亡奴隷の人物像を引き継いでいる。『奴隷の老人とモロス犬』では、逃亡行為の物語が練りあげられる過程で、テキストは、創設期の遺産を継承する物語と、生を授けるための書き直しのあいだで、豊かな対話を交わす場所となっていた。ユダヤ・キリスト教的な〈試練〉の物語の流れのなかに奴隷の踏み分けた道を刻むこと、〈脱出〉[聖書の出エジプト記]と迫害のテーマの刷新、キリスト教のテーマを再び自分のものとする、これらはすべて、対話と脱退、対話関係と断絶の方向へとむかう要素である。最初の反乱を支えに、神話的原型が誕生する。ある日、非常に年老いた奴隷、行動を起こすとはとても思えないその奴隷が、生まれて初めて逃亡するのだ。[奴隷が逃亡奴隷となるという]生成変化を引き受けることは、人間性を奪い、人間であることのありとあらゆる可能性を否定する植民地の企図とは正反対に位置するものであり、「奴隷であった老人」⁸⁷に、次の明白な確認をおこなわせる。「わしのものでない領土、わしのものでない言語、わしのものでない〈歴史〉、わしのものでない〈真実〉、だがこれらすべては同時にわしのものだ[……]。わしは一人の人間なのだ」⁸⁸。逃亡奴隷という模範的犠牲が、こうして共同体の絆の最初の結び目のひとつとなるのであり、この犠牲によって、苦痛の考古学を探究するための取り決めを結ぶことができる。この取り決めによって、「先住民、ニグロ、インド人、中国人」⁸⁹という、アンティル諸島の人類学全体をふくみこむ、生命の神話が創設されるのだ。この神話の構築には、すべての

85 Ibid., p. 146.

86 Gille Deleuze, *Critique et Clinique*, Paris, éditions de Minuit 1993 ; rééd. 2003, p. 14. ドゥルーズの引用は、ここではその抜粋を引いたにすぎないが、エドゥアール・グリッサンの最後から二番目の小説のエピグラフに掲げられている。Édouard Glissant, *Sartorius. Le roman des Batoutos*, Paris, Gallimard, 1999.

87 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 84.

88 Ibid., p. 135.

89 Ibid., p. 144.

文化の参加が求められるのであり、相互に関連するテキスト間の多様性と異質性が鏡となって、非連続な歴史の境界領域を映しだし、抑圧と欠如の苦しみに対する緩和剤になるのである。

『カリブ海偽典』の主人公は、『奴隷の老人とモロス犬』とはずいぶん異なる身体からの離脱を体験する。『奴隷の老人とモロス犬』の主人公は地獄の外への脱出という試練をくぐり抜けるのに対し、『カリブ海偽典』は、マルティニックの独立派活動家の老人の臨終の時から始まる。この人物はあらゆる戦争を経験し、大変ながい回想の物語を通して、過去の人生の忘れがたい時期と恋愛の感動を思い起こす。ネオ・ピカレスク小説風のこの物語は、きわめて広範な出来事と政治的行動を混ぜあわせ、叙事詩的、叙情詩的、劇的な要素をバロック的な混合のうちに結びつけながら、数多くの場所を複雑に交差させている。ここでは〈歴史〉のエクリチュールが追求されていると感じられるのだが、そのエクリチュールは、参加を強烈に求める、ファノン的なもので、カリブ海を越え「全-世界」(グリッサン)⁹⁰に接近しながら織りなされてゆく。実際、バルタザールは、彼の愛も、彼のラプレー風の無分別な行動もとどめることのできないすさまじい熱狂のうちに、すべての地に呪われた者〔ファノンの代表作の題名〕に力のこもった手を差し伸べる。この人物の造型は、聖書から影響を受けている。たとえば、メトセラとノアにならい、彼の生年月日は時間の闇夜のなかに失われてしまった。男は「飽くことを知らない自分の身体からくり」⁹¹によって「七百二十七人の女」を愛した。死の瀬戸際で、マルティニック人としての良心をかき立てた、反=植民地主義の冒険の数々をバルタザールは思い起こし、「支配された土地での数々の戦いの遍歴」⁹²で次々に起こった波乱をひとつひとつ言葉にしてゆく。この印象と出来事の塊を書き記すために、シャモワゾーの文体は直線的な書き方を放棄し、むしろ好んで、ファンタジーのもたらす非現実なヴィジョンを無秩序に積み重ねてゆく。エクリチュールは嬉々として、アイロニー、大河のような大胆奔放な描写、生きることへの並外れた渴望に身を投じるのだが、この渴望があったからこそ、バルタザールは世界の隅々へ運ばれ、出会ったすべての存在と交流することができたのだ。「す

90 グリッサンの概念「全-世界」は、〈関係〉の詩学の延長にある概念で、グローバル化〔世界化〕の完全な反対物である。「全-世界」の考えでは、かつての支配する者と支配される者とはまったく異なる型の関係へ、利害がもはや排他的ではなく、分かち合われる関係へ加わる。これはエドゥアール・グリッサンの小説『全-世界』（パリ、ガリマル社、1993年）の題名でもあり、1997年には『全-世界論』（ガリマル社）という試論が続くことになる。

91 *Biblique des derniers gestes*, op.cit., p. 775. [『カリブ海偽典』前掲、842頁]

92 *Ibid.*, p. 153. [同書、170頁]

すべての生命がわしのなかへ入ることができた、生のすべての原理、すべての動物、すべての実体が、「わしは全部を食べる者だ!」、そうわれわれの主人公は声を張り上げて言う。

何よりも、彼の誕生だ。遠い昔から生きている老いた反逆者は「百五十億万年前に生まれた」⁹³。彼は十三ヶ月という途方もない懐胎期間の後にこの世に生まれる。やがて彼が果てしなく戦い続けることになる、あの「世界の压制者たち」⁹⁴を予兆的に示す女悪魔イヴォネット・クレオストの魔力から逃れるために、両親は彼を「第二の母」⁹⁵ルブリエに託す。ルブリエは、森と海をつかさどる、カリブ海の一種の女神であり、島の世界にバルタザールを導く半魔術的、半魔女的な人物である——ちなみに、五年後、読者は『独房の日曜日』で彼女と再会することになる——。超自然の女性、人間と妖精の間である、異種混血的なオンディーヌ、^{カンボウズール}呪術師や治癒師の女性版、森の秘法と植物の秘密に通じる女性、これらが人間の形をとったこの幻想的な女性性に、『カリブ海偽典』は賛歌を捧げる。「どんな町、どんな村、どんな家族から来たのかと尋ねると、大きな道も小さな道もないような、とある丘からやって来たのよ、と言ったものだ。マン・ルブリエは、もっとも頭のさえた時刻、木々のあいだを散策し、小鳥を観察し、河のせせらぎを聞き、ヒキガエルの重たげな跳躍を喜び、イェン = イェン^{ほえ}の飛翔を追い、あるいは大きな蜘蛛の巣を真剣に見つめていた……」⁹⁶。マルティニックの土地の奥深くへとバルタザールが逃げてゆくたびに、その逃走は、海という「再生させる母胎」⁹⁷のなかを代わる代わる生きてきた人びとを想起するための口実となる。バルタザール少年はこのなかへ溶け込み、秘儀伝授の手ほどきを受け、消滅した昔の民に対する共感を非常に早くから感じ、数々のエデンの園だけでなく、この島世界に生息するゾンビや他の悪魔的被造物と戦いながら、「ダンテの地獄圏のひとつひとつ」⁹⁸を代わる代わる横切っていく。

〈自然〉の渾沌としたエネルギーとの相互浸透に匹敵するものがあるとすれば、愛における溢れるような感覚の共有しかない。ここでは、臨終の死の感覚は反転し（「臨終は、もはや私が想像していたようなひとつの終わりではな

93 Ibid., p. 54. [同書、57頁]

94 Ibid., p. 761. [同書、828頁]

95 Ibid., p. 209. [同書、232頁]

96 Ibid., p. 99. [同書、106頁]

97 Ibid., p. 84.

98 Ibid., p. 177. [同書、196頁]

かった) ⁹⁹、多量に押し寄せる幸福な思い出によって高まる。「インドの女たち。水の女たち。大地の女たち。火の女たち。猛り狂った肉体をもつ女たち。精液と唾にまみれた女たち。精神だけとなった女たち。口紅と香油の女たち。戦争と血の女たち。孤独な生、あるいは静かな死の女たち、透視の女たち。盲目の女たち。動物的な女たち、神々しい女たち」¹⁰⁰。数えきれない多種多様な挿話にあふれるこの小説において、女性の美がもたらす陶酔と、「欲望の砂糖」¹⁰¹ へのオマージュは一定のリズムで捧げられている。このフェリーニ的なエロティシズムは、書くことがあまりに政治的行動のための「戦いの切迫性」¹⁰² の道にはまりこんだとき、そこに高揚と陽気さをもたらす。小説にはそれゆえ二つの重心が備わっている。ひとつは、濃密な、止むことない肉欲の、あのエロティックな優しさという重心であり、バルタザールはそこから生きる喜びを汲みとる。もうひとつは兄弟愛という重心であり、それが同じ人物を、生涯、「戦争の野良犬」¹⁰³ にしてしまうのだ。

小説は「際限のない想像」¹⁰⁴、歴戦の反逆者の昂揚した気迫に包まれていく。アンティル版ガルガンチュアとも言うべき反逆者は、世界中のすべての神話と文化に夢中になる。「ああ、わしはシュメール族の『ギルガメシュ叙事詩』を聞いた！ 言葉が剣以上に切りつける、フィンランド人たちの『カレワラ』も知っている……。エジプト人たちの『死者の書』と、石やパピルス紙に書かれた彼らの本をあざったこともある……。人間がトウモロコシから生まれる、インディアンの『ポボル・ヴフ』を、わしは理解したと思った……」¹⁰⁵。憐れみは、何のためらいもない民族浄化の犠牲となった「虐殺されたクルド人」、「忘却されたアルメニア人」、「石油の圧力団体の殺し屋たちによって撃ち殺されたピグミー」¹⁰⁶ といった少数民族にも浸透してゆく。有名な著者たちの多少なりとも明確な声もそこに結びつくのだが、語り手は一定の間隔でこうした精神的同伴者に登場を願いでて、彼らの文学に固有の力に訴えかける。「私は、ジョイスのように、精神の嵐という気象をくぐり抜け、〔ありそうにない〕^{エビファニアニ} 真実の突然の顕現に至るまで漂流しつづけなければならないのか？ ラ

99 Ibid., p. 436. [同書、480頁]

100 Ibid., p. 261. [同書、289-290頁]

101 Ibid., p. 406. [同書、448頁]

102 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 147.

103 Ibid., p. 204. [同書、225頁]

104 Ibid., p. 162. [同書、180頁]

105 Ibid., p. 198. [同書、219頁]

106 Ibid., p. 776. [同書、843頁]

プレーの、度を越えた絶対自由主義という源泉に身を浸さなければならないのか？ フォークナーの、暴露が引き延ばされる世界で苦しまなければならないのか？ マルケスの、魔術的螺旋を自分も駆けのぼらなければならないのか？ 広大な刷新の溶鉱炉、グリッサンの叙事的不透明さに加護を祈らなければならないのか？」¹⁰⁷。シャモワゾーは『支配された国で書く』において、感傷図書館サンチマンテックという秘密の図書館を創設したが、他の作家たちと交感することへの関心は、この創設という行為を継続するだけでなく、おそらく、世界へ関与しようとするあの欲望、「星雲的開かれ」¹⁰⁸を考慮に入れることでもある。「星雲的開かれ」とは、詩的意図に、他者にむけて開かれた対話関係がふくまれている状態であり、シャモワゾーはそれを「垂直な世界のなかに自分を組み入れる」¹⁰⁹ ことと呼んでいる。作家たちへの強迫的な訴えかけは、解放戦争のそれぞれの出来事と、その指導者（シモン・ポリヴァル、パトリス・ルムンバ、チェ、ホーチミン、「偉オマンデラ」や、さらには「あの大好きなアルジェリア」の人びとなど）¹¹⁰を呼び起こす場合とまったく同じように、小説中での引用という行為全体に浸透している、あの相互作用の論理に関連するものである。この論理は、「記憶の荷運び」、「それぞれの記憶が別の記憶と密接に結びつき、新たな記憶が際限もなく次々に加わる」¹¹¹ というイメージを最終的にまとめあげるものである。喜びに満ちたこの感情移入は、ここでは治癒効果があり、生命に不可欠な笑いの力によって増幅される。奴隷船の船倉やプランテーションの地獄ゲヘナといった、アンティル創世期の黙示録的な描写とともに、世界の絶望を笑い飛ばす、ラプレーの庇護を受けた、並外れた自由があるのだ¹¹²。

[……] 確かに、『第四の書』で繰り広げられる彷徨の見事な一節を読むと、彼はいつでも頭のなかで活力で満たされるのだった。同様にして彼は、みすばらしい大農園にいる年老いた語り部たちの笑いにつねに注意するようになるのだった。彼らは笑いに生き、笑いながら愛し、笑いながらすき鋤で掘り返し、笑いながら苦しみ、笑いながら何とか生きつづけ、堪え忍び、この宇宙を、すでに打ちたてられた抑圧の秩序に

107 Ibid., p. 208. [同書、230-231 頁]。強調はイタリック体。

108 Ibid., p. 403.

109 Ibid., p. 309. [同書、344 頁]

110 Ibid., p. 256. [同書、285 頁]

111 Ibid., p. 277. [同書、308 頁]

112 Ibid., p. 263. [同書、292-293 頁]

抗議する笑いで包みこんだ。そして、この笑いの大風には、彼らの言葉の反逆の意味が隠されていた。

アイデンティティと文化の絶対性に対する告発は——「他の言語に戦いを挑むいくつもの言語の劇、別の文明に武装して立ち向かう数々の文明」¹¹³——、反帝国主義者として厳しい責務と隣りあっている¹¹⁴。

植民地主義者！ これこそ敵だ！と彼らに向かって叫んだ！ 我々が考え、理解しなければならぬのは、植民地主義なのだ。誰も我々に変わって考えてくれなどしないのだから。そのせいで苦しんでいるのは、我々、ひどい生活を送っている黒人アラブ人マダガスカル人クーリ黄色人種赤色インディアンなのだ！

バルタザールは、世界中に抵抗^{レジスタンス}の底流を発見することで成長するカンディード〔ヴォルテールによる同名の教養小説の主人公〕であり、その戦士としての憤激と身震いは、いつまでたっても闘争の再開に直面することになる。バルタザールの冒険を通して、アンティル諸島の社会的・心理的状況の情景を、作家は批判を込めていくつも描きだし、壊滅的な政治と文化的疎外が引き起こした卑屈な従属をあらわにすることができる。たとえば、そうした卑屈な従属は、「ラテン語が話せると言い張る、ジャケットを着る類の黒人で、編み上げ靴と四十五着のスーツをもって家に身を落ち着けることだけを求める、あの教会の用務員」¹¹⁵のイメージや、『学校への道』に描かれた、風土そのものの否定によって例証される。それは自己否定のひとつの形態であり、次の描写がその頂点を記している。「異常な暑さだったにもかかわらず、サンダルは嫌われていた。靴下を履かない足は嫌悪されていた。袖のないワイシャツは下品なジャンルに分類されていた。風土は否認されていた。そしてそれが変わることはなかった」¹¹⁶。

『カリブ海偽典』における広大無辺な世界の迷宮は、きらめきを放つ不安定な規則にしたがっていて、何人かの人物の性別を掻き乱すほど錯乱している。ニコル・ティモレオンは、バルタザールに教育を授けるよう、ルブリエが託

113 Ibid., p. 384. [同書、426頁]

114 Ibid., p. 359. [同書、400頁]

115 Ibid., p. 376. [同書、418頁]

116 *Chemin-d'école*, Paris, Gallimard, p. 185.

した小学校教師だが、少しずつ女性的な特徴が表れるがままにし、その結果、男女両性という自身の現実のありようを映しだす、デボラ＝ニコルという複合的な名前があたえられる。「デボラ＝ニコル・ティモレオンは男であると同時に女だった」¹¹⁷。シャモワゾーは事物と存在の世界のうちに、突如としてある不安定性を差し入れることが巧みであり、そのバロック的きらめきのなかで、あらゆる生命の原理は揺れうごき、予想できないサブダクション〔プレートが他のプレートに潜り込む現象〕に捉えられ、あらゆる固定性を打ち消すかのごとく、変幻自在の外見をあたえられるのだ。『カリブ海偽典』では「不安定な平衡状態」¹¹⁸が導かれ、個性豊かな人物たちの複合的性格は、聖書的だったり滑稽だったりする名前の組合せの選択のうちに、明確に示されている。バルタザール・ポデュール＝ジュール、アンヌ＝クレミール・ルプリエ、ガスドー・カカ＝ドゥロ、デボラ＝ニコル、サラ＝アナイス＝アリアシアといった名前がそうだ。たとえば、最後に挙げた人物は、取りつかれたように鏡と一緒に過ごし、悩ましげなきらめきを発する「反映とそのまた反映の組織網」¹¹⁹に魅了される。事物の素材のこうした波状の拡張、その移り気な、「際限のない増殖、殖、殖、殖 (démultiplié ééé)」¹²⁰から、書かれたものさえ逃れることはない。言葉それ自体が新たなねじれにしたがい、新たな造語やイメージ豊かな語となるのであり、反復を避けるという規則は、意図的な積み重ねのために破られる。たとえば、「小さな小さな小さな小さな配偶子、卵球、卵母細胞、卵囊、遊走子」¹²¹。時間は「過ぎ去り、超過し」、物語はポリフォニーの効果で際限なく拡張する——著者が「仕事場覚書、いくつかの苦しみ」のなかで、「多数の中心をもち、分散され、散り散りになった力の場」¹²²と名づけるものによって増殖するのだ。物語は、めったに崩れることのない、燃えあがる祈祷のなかで高まっていき、^{タンブリエ}太古叩きの打つ音にならって増大してゆく〈言葉〉から、その固有のエネルギーを引きだしてゆく。この「渾沌とした歴史の領域」、「おおよそ安定している唯一の基盤」のなかにこそ、「自分の震える手」¹²³があるのだと、著者もまた肯定する。こうして分別くさい価値はこの書では不確かなものとなる。ちょうど、われわれの不完全な世界と、シャモワゾーが発明する、あの第二世界の場所

117 *Bible des derniers gestes*, op.cit., p. 381. [『カリブ海偽典』前掲、423頁]

118 *Ibid.*, p. 429. [同書、473頁]

119 *Ibid.*, p. 623. [同書、678頁]

120 *Ibid.*, p. 431. [同書、475頁]

121 *Ibid.*, p. 617. [同書、672頁]

122 *Ibid.*, p. 436. [同書、480頁]

123 *Ibid.*, p. 694-695. [同書、756頁]。強調は原文。

——同年に出版された『第二世界の都市の手帖』のなかに再録されることになる——との「境界領域」¹²⁴が不確かであるように。

124 Ibid., p. 584. [同書、636頁]

数々の抵抗——想像界の戦士

「フランス人デスナンビュック [フランス領マルティニックの創設者] の、射石砲によるカライブ族の最初の虐殺」¹²⁵ を告発するのであれ、〈ニグロ〉の不運と奴隷制の「根源的・土着的」^{フォントラルナタル} [言語学者ジャン・ベルナベのクレオール語文法書の題名として知られる] 呪いを告発するのであれ、パトリック・シャモワゾーはつねに「舌戦によるゲリラ戦」¹²⁶ を展開する。バルタザールの政治行動の三つの極、すなわち「反植民地主義者としての誹謗文書」、「労働組合による権利要求」、「エコロジストとしての抗議」¹²⁷ は、文学を至上のものと考えないようにたえず警戒し、自分の土地の社会的現実と接触を失わないシャモワゾーを突き動かす極そのものである。『カリブ海偽典』の主人公が炎のごときゲリラ戦士であるのは、おそらく、アンティル諸島の痛みを和らげる麻痺の脅威に反対する、ひとつのやり方である。この見えない従属の特殊な表現方法こそ、論争の書『支配された国で書く』(一九九七)において提出され、細かく分析されていることである。

レトリックの面では、『支配された国で書く』は、議会演説の弁論ジャンルに類似しており、著者は、全員の幸福に役立つと判断する真実によって読み手を説得しようとしているが、じつはそれだけでない。『支配された国で書く』はおそらくとりわけ、法廷演説という弁論に類似しているものであり、実際シャモワゾーはここで、政治的・社会的違法行為の現状を厳しく批判し、告発しているのだ。ここには、もはや「ぼろぼろの服を着たムジャヒディン [イスラーム解放軍戦闘員]」¹²⁸ もいなければ、世界中でおこなわれる戦闘もない。これは共同体に影響するような調査と法律上の尋問を、個人的に進めようとする孤独な問題提起なのであり、虚構の彩りの豊かさを捨て去って、政治パンフレットの決然とした文体が採用されている。作品は、「老戦士」の介入によって、一頁ごとに中断される、ながいモノローグとして書かれている。「老戦士」は、賢者あるいは助言者のようなものであり、文中イタリック体で示されるその声は、語り手の声と緊密な対話をおこなっている。この精神的な共犯関係によって、内面感情を表現する雰囲気がかもしだされるが、著者の実生活から着想を得た数々の場面が挿入されることでその雰囲気はさらに強まり、この

125 *Bible des derniers gestes*, op.cit., p. 420-421. [『カリブ海偽典』前掲、463頁]

126 *Ibid.*, p. 779. [同書、847頁]

127 *Ibid.*, p. 776. [同書、844頁]

128 *Ibid.*, p. 168. [同書、187頁]

エッセーがもつ政治的射程は自伝的な打ち明け話によって和らげられることにもなる。それでも、マルチニックの歴史の浮き沈みのほうは、作家の母親と長兄だけでなく、膨大な数の作家たちが登場する、私的証言の次元を見事に組み入れることによって、十分に強調されている。作家たちの思考は、感傷的図書館という枠組みで召喚されている。冒頭の文章から、この本で何が賭けられているかが明かされる。つまり、文化的疎外がまとう新たな形態の告発であり、この疎外がフランス領アンティル諸島で引き起こす、心理的・集団的統一性の崩壊の告発である。こうした結果は、作家が指摘する、共同体の不满を通してはっきり認めることができるのだが、この不满を確認するシャモワゾーの声の抑揚は、根本的に現実主義的なものである。その声の抑揚は、フランツ・ファノンの『黒い皮膚、白い仮面』¹²⁹やエドゥアール・グリッサンの『アンティル論序説』¹³⁰のある種の分析を思い起こさずにはいられない。精神的な排除〔現実を否認しようとする心の防衛機制〕に近いこの感情は、シャモワゾーによれば、フランス本土の価値観への模倣的同一化の姿勢と、熱烈な消費主義のうちにあらわれている。「スーパーを通して、われわれは世界に出現した。加速する近代化、生活水準の向上〔……〕は、次の重大な帰結しかもたらさなかった。われわれが消費者として成長するということである」¹³¹。『支配された国で書く』の論証の展開は、そもそもすべて次のことを示す必要性にむけられている。植民地化された土地としてのアンティル諸島は、力による支配や露骨な帝国主義といった古い抑圧形態から陰湿な見えない統治へ、表面化しないどのような変遷を経て移行したのか。この見えない統治は第一に「同化主義的従属」というあの悪のなかへその根を深く張るのだ¹³²。

君の想像界が、朝から夢のなかまで、君のものではないイメージ、思考、価値で満たされているとき、どのようにして書けばいいというのか。君が自分の生命を育む躍動を絶たれて日陰で生きるとき、どのようにして書くのか。

支配されたままなのに、どのように書くことができるのか。

〔……〕 オッ、君は立ち向かえない、選ばれた民族にも、数々の障壁にも、君の歩道を地獄に変える軍隊にも、純然たる憎しみにも……。

129 Frantz Fanon, *Peau noire, Masques blancs*, Paris, éditions du Seuil, 1952.

130 Édouard Glissant, *Le Discours antillais*, éditions du Seuil, 1981.

131 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 79.

132 Ibid., p. 248, 19.

[……] これらのすべて——力による支配——はこれまでとは異なる時代に属している、たしかに世界を見渡せば、支配の恐るべき突然の跳躍が起こっているのだが。[……] 今という時代——どんな弾丸も役に立たない君の時代——は、みんなにとって来るべき時代なのだ。つまり今は支配の歌が君の精神を変形してしまう時代なのだ、その変形の果てに、君自身は自分の監視に夢中になる人間に、君の想像力は実子虐待の母親に、君の心は麻薬密売人に、君の想像界は不毛な模倣主義の源そのものになりかわってしまう。君の時代は、沈黙と化した支配の時代なのだ。

作家は論客、弁護士になる。このような隷属を決然と拒絶することで（「彼はこれらのラジオ放送に逆らう [……] 彼はこの活発な疎外を拒絶する。」¹³³、彼は感情の効果を出し惜しみしない論法をつくりだし、読者の情念に触れようと努める。作品冒頭の「おお、兄弟よ」という呼びかけは、話しかけ、感情を掻き立てようとする論者の躍動感を示しているが、そこには彼の話しかける聴衆が、期待通りの同一化を成し遂げ、その聴衆の支持を得ることへの関心が表れている。この同一化の追求は、誰が語るのかという発話の分配という点では、「私」と「君」が相互に応酬することで促進されている。「君」は、非難のレトリックの賭け金の受取手となるのであり、著者はその賭け金がまさしく現在の状況に関わるものであることを明らかにしようとしているのだ。しかし、この雄弁家のテキストの真の複雑さは、「私」と「君」の親密な相互作用が起こる一方で、語る「私」自身が二重化し、その二つの「私」のあいだで相互作用が並行して起こるといふ、逆説的な展開のうちにある。語る「私」は、もう一つの審級とのあいだで二重化し、異化作用がそこで起こるのだが、もう一つの審級とは、実際には、作家としての話し手そのものに他ならないのである。「こうして、哀れな代書人、この打ち砕かれた国の言葉の記録人[……]」といったように。二重化は、自己分析を行なう主体が分裂することを示し、分裂した主体が報告する進展は、何よりもまず自分の身分が徐々に崩壊していくことを証言している。「君の国よ、その民よ、君自身よ、その作家と詩人たちよ [……]、緩慢な衰弱を、緩慢な衰弱を生きよ」¹³⁴。

最初のうち、パトリック・シャモワゾーは、戦略的に、偽の問題を批判する。

133 Ibid., p. 19.

134 Ibid., p. 18.

偽の問題とは、圧制による支配、あるいははっきりと植民地的な支配の問題である。シャモワゾーが作成する現状報告書と、ポストコロニアル時代におけるアンティル人の社会心理的負債の総括は、状況が変化したことを証している。実際、問題はもはや銃をとって戦士になることでなく（「いまの時代には […] どんな弾丸も役に立たない」）¹³⁵、想像界に訴えかけ、想像界を構築する応答によって抵抗をおこなうことである。シャモワゾーにとって「想像界の戦士」であるということは、精神による反逆者であること、知的で倫理的な態度を取ることである。本土の中央権力からの援助を拒否し、自分たちを「不毛」にする支配の罫から抜けだす必要性があると自覚することが、何よりこの反逆の根幹をなしている。たたみかける論証は、政治的であると同時に感情的であり、問題が徐々に深刻化していることをエッセイストとしてきめ細やかに証明していて、彼に弁論家としての完璧な技量があることがわかる。シャモワゾーが弁護士としてどれほど卓越した才能をもっているかが理解されるのは、まさしくこのエッセイにおいてである。DOM-TOM [海外県・海外領土という海外フランス領の行政ステイタスの略称]（しかも、これは彼が絶対に認めない名称であり、別のテキストで自分は「海外県住民でも、海外領土住民でも」ないとはっきり述べている）の悲劇的状況、そしてアンティルの民の無化をもたらした、と著者が考える要因のすべてに、圧倒的に浴びせられる非難に、読者は本全体を通して立ち会うことになる。そのため、『支配された国で書く』という政治パンフレットは、構造的に、次々に打ち寄せる告発の波の構成をとっていて、しかもこの波は、目覚ましいメタファーの力、雄弁な問いの掃射の力によって、頻繁に大波になっている。この波は攻撃を強める一方で、植民地の古い束縛に関する議論を無効とし、より差し迫った、新しい動員への呼びかけへと向かっている。そのなかには、アンティル諸島を苦しめる、全体化した経済援助という悲劇があり、「私たちの民は裕福さによって死ぬのだ」とシャモワゾーは告発している。この場合にかぎり、傷を作るのは貧困化ではなく、豊かさであり、問題の発端は、一九四六年、マルティニックへの県制施行にまでさかのぼる。その政策決定には、当時フォール＝ド＝フランス市の市長で国民議会議員だったエメ・セゼールの責任が大きく関わっている。詩の理想と政治の現実の分離という逆説を、シャモワゾーはセゼールのうちにを際立たせようと努める。

135 Idem.

「詩人としては自由を願う一方で、政治家としては、あたえられた国籍のもたらす物質的優位への私たちの隷属を強固にしてきた」¹³⁶。

母なる祖国のふところに抱かれることは、植民地化された国民が被るさまざまな害悪と機能不全を引き起こす要因である、とこの論客は認めるのであり、シャモワゾーはあくまでもポストコロニアルの弁護士として、植民地支配の思想家たちの歩みを踏襲するのである。「支配のさまざまな効果（アルベール・メンミヤフランツ・ファノンによって記述された）は、私たちを荒々しく貫き、多様な劣等感、自分の肌を白くしたいという欲望、自己価値の否認、内的暴力、日常に支障をきたす非人格化、模倣主義、漂流と逸脱といったものを生み出してきた……ところが、支配の効果は植民地の暴力を伴わずに進行したのだ。」判決は決定的だ。「県化は私たちを私たち自身から切り離した」¹³⁷のである。それゆえセイレーンの歌の魅惑を断ち切ることで、自己を回復する方法を見つけなければならない。「満ち足りた持続注入」¹³⁸という、ファノンが考えた従属のモデルに対するこの告発については、われわれはシャモワゾーの他の作品のうちにもその数多くのヴァリエーションを見出せるのであり、そのもっとも新しいものは、二〇〇九年一月、グアドループとマルティニックで起きた深刻な社会的蜂起に続いて共同署名された声明文『高度必需品宣言』¹³⁹によって具体化された。著者たちはこの声明文で、アンティル人の生活必需品について、フランス本土の政策が何ひとつ理解していないことを明確に問題化している。彼らは消費から脱却した人間の尊厳を求めるとともに、政治的事柄の自立した管理運営と、クレオールであることの、アメリカスの人間であることの特異性の認知を要求している。

劣等感の植えつけが政治的にも社会的にも隠されたかたちで進行するこの状況において、世界への生き生きとした現前を維持する形態、抵抗の流儀は、どのようなものであれ養い育てるべきである。著者にとって、世界への現前とは、文学世界のなかへ入ること自体、アンティルのみならず、世界中の文学的遺産を発見することを意味している。作家たちとともに、「生まれ故郷」の

136 Ibid., p. 75.

137 Ibid., p. 250.

138 Ibid., p. 206.

139 Ernest Breleur, Patrick Chamoiseau, Serge Domi, Gérard Delver, Guillaume Pigeard de Gurbert, Édouard Glissant, Olivier Portecop, Olivier Pulvar et Jean-Claude William, *Manifeste pour les « produits » de haute nécessité*, Paris, Galaad/Institut du Tout-Monde, 2009. [「高度必需品宣言」中村隆之訳『思想』2010年9月号]。

概念は拡張し、「〈中央〉の言語的掩蔽壕」¹⁴⁰は崩壊する。とりわけ二冊の書物が、シャモワゾーの知的成熟と歴史意識の主要な境界標識となっている。ハイチ詩人フランケティエンヌの『デザフィ』と、グリッサンの『マルモール』である。「これらの本に誘われ私は創設の地点へ辿りついたのだった。すべてを読み直した。すべてをもう一度探索した。すべてを問い直した。[……] 私は二十三歳だった」¹⁴¹。自伝的な部分において、五人家族の末っ子として生まれたシャモワゾーは、母マン・ニノット、不運と根気よく戦いつづける「この絶え間ない女戦士」¹⁴²と、長兄のミゲルの役割に敬意を惜しまない。ミゲルは、『学校への道』では「代数学のジョジョ」とあだ名され、「代数学、絵画、詩、物理学、化学のなかに楽しみを見出す」「一種の天才」である。この兄こそが末の弟に、ネグリチュードがどのようなものかを、深くはないが、初めて知らせたのであり、彼に「ニグロのノート」を発見させた。カリブ海の夜明けに包まれて兄の朗唱するセゼールの有名な詩句「太陽のいなく百の純血馬」[『奇蹟の武器』]は、幼年時代のシャモワゾーの詩の世界に対する感受性に決定的な影響をあたえることになる。

書物の救済的機能について、シャモワゾーは『支配された国で書く』のなかで、ある胸を打つ例を挙げている。保護司としての彼自身の経験が関わっているその例によって、文学への情熱は、自己回復の試みの中心にふたたび位置づけられることになる。挿話は「フルリー＝メロジ刑務所、D2号館」を舞台としている。囚人は、一九八〇年代の「アンティル人ギャング集団」のボスであり、絶望と攻撃的性格のあらゆる特徴を示している一人の非行青年である。牢獄の世界、すなわち「典型的な読書なき世界。さまざまな緊急事態、際限なきストレス、苦悩のほかに、いろいろなハンディキャップまで加わった監視区域」¹⁴³に監禁された青年は、ある日マルチニックから小包を受けとる。『帰郷ノート』だ。その詩集は保護司と若い拳銃強盗とのあいだに新たな友情を作りだす。友情は本、とりわけ『帰郷ノート』を共有することから生まれたものだ。この関係は、作家にとって、自分自身への啓示を受けるきっかけとなった。「見事な反転だった。私たちは刑罰の手続や社会の契約などについてでなく、文学について話していた。私はもはや〈保護司〉ではなかった。私は私であるところのものになったのであり、教育者であることを止めたとき

140 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 280.

141 *Ibid.*, p. 103.

142 *Ibid.*, p. 44.

143 *Ibid.*, p. 93.

にしか、ひとは教育者とはならないという逆説を豊かに体现する存在に変わったのだ¹⁴⁴。

シャモワゾーの社会的役割、つまり司法省の務めとして非行青年から聴取する保護司の役割と、さまざまな支配への知的抵抗という行動様式を推進するという、彼の政治的位置とのあいだには、疑いもなく連続性がある。彼は同時に、弁護士、作家、記憶を活性化する者、言葉の記録人、想像界の戦士なのだ。『奴隷の老人とモロス犬』の終結部の一節は、特別な精確さで、増殖するこれらの役割すべてが、このアンティルの作家においては同一の倫理に役立っていることを表している。「私のうちには多くの名前がある。多くの可能な名前。[……]それらの名前すべてを正しく評価すること」¹⁴⁵——すべての名前、すべての役割だけでなく、すべての人びと、「欠如している民」を正しく評価すること（その民のためにも、彼は書いているのだから）。シャモワゾーの多くの名前——オワゾード・シヤムシヤムの鳥、シヤン・ジビエシヤムの狩猟鳥（Chamgibier, Chamzibié）——は、ポルトガル詩人フェルナンド・ベソアの異名のような、複数の自己であろうとする欲望とともに、それぞれの名前にそれが求めるはらかな旅をあたえたいという願望を示している。収監された非行青年の思い出と、彼とのあいだに築かれた友情の物語は、取るに足らないものではない。フルリー＝メロジの独房は、言ってみれば投獄されているアンティル人の精神の縮小されたイメージ、その精神の身体をそなえた分身である。独房には、受刑者の苦しみと立ちすくんだ独房の主人に共感する、シャモワゾーの人間性が浸透している。こうした独房は、カイエンヌ〔海外県ギウイヤンヌの主要都市〕の地獄を生々しく描写し、写真に収めた『ギウイヤンヌ、監獄の痕跡－記憶』（一九九四）にも見出せるし、奴隷たちがかつて投げ込まれた独房、『独房の日曜日』（二〇〇七）が、異界に囚われた凍りついた心のようにして、島の地下の沈黙のなかに位置づけるあの独房にも見出せる。

『ギウイヤンヌ、監獄の痕跡－記憶』は、一九四六年までカイエンヌに追放された徒刑囚たちへ捧げられた、慎重深く控えめなオマーージュの小冊子である。第二部は、図像的なノートから構成されており、直接イメージを挿入しているとも、シャモワゾーの描写にイメージに富んだ図柄をあたえているとも言える。作家は、基本的に三つの島からなる敷地の最初の地図へさかのぼり、

144 Ibid., p. 96-97.

145 *L'Esclave vieil homme et le Molosse*, op.cit., p. 135.

「ギューヤンヌの最初の監獄活動の震央」¹⁴⁶である、ロワイヤル島、ディアブル島、サン＝ジョゼフ島を訪れる。彼は監獄の廃墟をめぐり、大昔の徒囚たちの苦しむ魂が取りついている、サン＝ローラン＝デュ＝マロニの流刑収容所も入りこむ。収容所の沿革を記そうとも、収容所と一体化しようとしめない。記憶がいまも残っているからだ。建物は今にも朽ち果てそうで、壁を占領する熱帯林は建物を見事に覆い、あちこちに傷跡や亀裂が入っているにもかかわらず。小説家＝正義の士の幻視する目を通じて、壁は「肌-壁」¹⁴⁷になり、そこにひびが入り、湿気がにじみ、「不気味な入れ墨」のようなものがしばしば刻まれていることが明かされる。それは、徒囚の登録番号、つまり忘却から救われたある名前、おそらく徒囚が愛した女の名前だ。これは巡礼ではなく（「訪問は行なうべきものではない。占いのようにして生きるべきものなのだ」¹⁴⁸、「さまざまな記憶の震え」に注意を研ぎ澄ます、感情の高まる瞬間であり、「記念碑という観念を再発明」し、「文化遺産という」観念を「解体する」機会だ。実際、「偉大な記念碑は言い難いものであり、その偉大さは、記念碑が材料の積み重ねであることをやめる、その厳密に錬金術的な地点においてこそ検討されるのである」¹⁴⁹。こうして見えない記念碑と、触知できない痕跡と石碑を前にして、臆想がなされる。カリブ海人という意識の突発的な出現と、正義の人の感じる衝撃を結びつける、恐るべき、かすかな記憶を前にして¹⁵⁰。

鉄柵に繋がれた狂乱する数々の手よ、私は見ている。壁に傷をつけてきた数々の爪よ、私は知っている。意固地な泉のようににじむ、石が窒息させるのを拒んだ数々のうめき声よ、私は聞いている。鉄格子の錆は汗を養分にし、そのことをあまりに思い出したために黒くなっていった。その錆を見るだけで十分なのだ。

この収容所では——そしてかつての奴隷船における船倉では——、監房、独房、地下牢、防塞は、恐怖のメタファー、消滅の危機に絶えずさらされる記憶のメタファーとなっている。というのも、究極の流刑地を表す監獄は、ギューヤンヌ人の意識のなかでさえも抑圧されてきたからだ。「彼らは監獄を、忘

146 *Guyane. Traces-mémoires du baigne*, avec Rodolphe Hammadi, CMNHS, 1994, p. 23.

147 *Ibid.*, p. 30.

148 *Ibid.*, p. 22.

149 *Idem.*

150 *Ibid.*, p. 28.

却の監獄へ付与することに決めたのだ」¹⁵¹とシャモワゾーは明かしている。こうした記憶の消去に抗って、祈りと、廃墟にむけられた想起のまなざしによって、「根が巨大な岩石をひとつひとつ引きはがした」¹⁵²ように忘却を引きはがしその封印を破ることによって、人間性回復の努力がなされるのだ。

二〇〇九年に出版された『独房の日曜日』は、別の様式にしたがって、幽閉の主題をめぐる変奏を継続している。探究の一貫性、倫理的意図はそのまま維持されている。語り手は保護司であり、非行青年たち、しばしば落ちこぼれの若者たちの話に耳を貸すよう、絶えず気を配っている。ちょうど『カリブ海偽典』のバルタザールが「サン＝ジョゼフ地区の麻薬常習の若者たちのもと」へ定期的に通っていたように、『独房の日曜日』の中心の舞台は監獄でも、支配された世界のおびただしい広がりでもなく、古い時代の独房である。そこはかつて奴隷たちが拷問を受けてきた場所であり、船倉の非人間性を反映し、より深刻なものにした「独房という腹」である。この「独房の永遠の闇」については、すでに一九九二年、『テキサコ』が証言していた。それによれば、プランテーションで厄介事とサボタージュの罪を犯した奴隷たちを罰するために、ベケたちは不衛生な深い穴をいくつも作っていたのである。『独房の日曜日』では、小説の女主人公、恵まれない子供たちを受け入れる施設に避難していた少女のカロリーヌが、この悲劇の洞の不健全な雰囲気によって、激しい虚脱状態に襲われる。その雰囲気のせいで、彼女の意気消沈し、言葉が話せなくなり、早熟に年老い、「自分のうちに沈殿する」¹⁵³ようになる。その雰囲気によって彼女はやつれるのだが、それは『ソリボ・マニフィック』において語り部が——「内部から喉が詰まって」¹⁵⁴——死ぬときのように、「言葉を喉に詰まらせた」ためだけでなく、声が破壊されて出ないためである。少女は衝撃を隠さず、ただ穴倉の内壁に触れるだけで予感する先祖たちの苦しみを自分のものとして引き受け、過去から現れた幽霊の幻影を前にして身を守ることもしない。保護司は彼女の精神的苦痛に付き添い、これを取りのぞく、気の長い作業に取りかかる、彼は沈黙する歴史に語らせ、奴隷制時代の過去を生きる人物たちを登場させる——それらの人物は、シャモワゾー小説の過去の登場人物でもある。文学は、ここでふたたびテセウスとミノタウロスの神話を

151 Ibid., p. 18.

152 Ibid., p. 21.

153 *Un dimanche au cachot*, Paris, Gallimard, 2009, p. 83.

154 *Solibo Magnifique*, Paris, Gallimard, 1988; rééd. 1991, p. 215. 強調は原文。

上演するのだが、そこには重要な差異がある。ギリシャ神話ではテセウスの勝利は愚かな獣に対する知性の勝利を象徴しているが、シャモワゾーの小説においては逆に、勝利が獣のものとなるとき、出来事の影響が示されている。アンティルの迷宮の中心では、言葉による悪魔払いが不十分であったために、ミノタウロスの精神がいまなお呪力として強力に残っており、世代を越え、神話後の呪いのようなものとして持続してきた。そして、トラウマを負った少女の身体と精神のうちこの呪いが暴力的に刻印されることで、この二重の場所がどのような意味を持つかが明らかになる。それは [奴隷貿易・奴隷制] 罪の場所であるのだが、傷ついた脳（よう）の葉をかき分けるように、内的排除の苦しい蛇行をとおって、言葉が道を切り開かなければならない場所でもあるのだ。それは治療とレトリックの必要において要請される言葉、現前、誕生、そして権力の場所であり、その言葉は、示すべき場所が、記憶の場所であることを、それがしばしば忘れられ、ごまかされることを何よりも証言しているのである。なぜなら、独房は「記憶の場所」であるからだ。「記憶の場所」は不透明で、暗く、不確かになりやすいものなのだから、それに語らせなければならぬ。アンティル諸島における、共有された歴史の地下室とも言うべきこの場所は、耐え忍んだ、癒しがたい暴力に汚染され、沈黙と失語症にみだされている。言葉が無力であるという、究極的なパラドクス。口承文化の社会では、流れるような雄弁性こそが朗誦者や語り部の言葉の特徴づけるものであり、失語症、沈黙という選択は、語ることの正反対の極に位置づけられる。それは語ることの省略ではなく、語ることの失敗、その崩壊なのだ。保護司は、独房を言葉の顕現する場所に、言葉に通じる場所になんとか変えようと試みる。言葉は分婉されなければならない（「独房の割れ目」のイメージが、小説のなかでこの行為を暗示している）だけでなく、翻訳され、胎内にいる段階から自らを語る段階へ移行しなければならない。その出産を待つあいだ、独房の腹は墓場のような子宮となり（奴隷船の船倉を邪悪な母胎と捉えるグリッサンにならって）¹⁵⁵、保護司が守る女の子を虐待し、その子とともに、奇形の子の言葉を、あまりにか細く聞きとりがたい声の細い流れを生みだす。ちなみに、「独房」cachotの語源である「隠す」cacher（ラテン語の coactacire）は、意味深いことにこのような運動を指示しているが、「隠す」自体は「導く」、

155 「この船の腹は、君を溶かし、この世ならざる世界へ突き落とし、君はそこで悲鳴を上げる。この船は一つの母胎、母胎である深淵だ。君の叫びを生むもの。[……] この船は君の母胎であり、鋤型であり、けれどもやがて君を排出してゆく。執行猶予中の生者たちと、それに劣らぬ数の死者をはらんだ、この船は」。Edouard Glissant, *Poétique de la Relation*, op.cit., p. 18. [『関係』の詩学』前掲、12-13頁]

「(家畜の群れを) 自分の前へ押しだす」という意味での agir 「動かす」から派生している。知り得ないものに立ち向かいながら、沈黙を発話の可能性にまで導くことは、『独房の日曜日』の詩学全体を押し進める行為そのものである。シャモワゾーは意志によって何ごとかを成し遂げられるという哲学を展開しているが、その哲学の倫理的側面をになっているのは、おそらくはこの行為である。

この特殊な種類の産婆術のために、語り部＝保護司は深淵へ下り、この場所を試してみる。カロリーヌを窒息させる沈黙の結び目を解くためには、想起の推進者となることがまず必要であり、この想起だけが苦痛を緩和し、疎外からの解放を開始することができるのだ。穏やかな、唯ひとつの確実性の内側に拡散するものがあることを知らせ、苦しい二重化を明らかにする技術において、シャモワゾーはファノン、さらにはトニ・モリスンの後継者である。トニ・モリソンは、『ジャズ』(一九九二)で、「自分のうちに、全然自分でないようなもう一つの自己をもつ」¹⁵⁶ という不気味な奇妙さ指摘していた。保護司は、この小説における著者の分身だが、ここでもまた〈言葉〉を中継する人だ。彼が集め、分類整理する証拠の数々(独房で化石化しているものの、苦しみと暴力の痕跡、幻覚のような物語)は、この作品が裁判所の伝統に組みこまれていることをいま一度示している。いかなる言説もその場で繰り広げられたさまざまな恐怖の物語のすべてを数えあげることができないというのに、婉曲的に示される独房の空虚さに共鳴するようにして、題名が時間的な空虚さになっているのは、意義深い。このように定義された語義において、「日曜日」dimancheと「独房」cachotという言葉は、マラルメ的な意味で、「相互に反射して」、「発火」[「詩の危機」『ディヴァガシオン』]している。「日曜日」dimancheは、グリッサンが『オルムロッド』¹⁵⁷で示しているように、記憶の外にあるあの「典型的な非-時間」をはっきり感じられるものになっているからである。〈墓としての石〉(『ヒュール=トンプ 奴隷の老人とモロス犬』)、〈牢番としての時間〉(『支配された国で書く』)、独房は、シャモワゾーの詩学では、〈歴史〉の劇的な舞台空間の、地下に隠された、強烈な場所の痕跡を示すものである。『テキサコ』がマルティニックにおける文化と都市風景の変遷のさまざまな段階を描いているのに対し、『独房の日曜日』はもっとも危険な地点、危機が仕込まれる地点に視野を限定している。声が出ないほど締めつけられた、漠然とした結び

156 Toni Morrison, *Jazz*, New York, Alfred A. Knopf 1992; Paris, 10/18, 1993, p. 228.

157 Édouard Glissant, *Ormerod*, Paris, Gallimard, 2003.

目——喉と精神の結び目——は、『奴隷の老人とモロス犬』というあの創世記の物語における逃亡奴隷の解放のお告げを、重層的なかたちで引き継いでいる。握りこぶしに取り囲まれた握りこぶし、避難所のなかの避難所である独房は、この場所の二つの意味を結びつけている。地理的な意味（牢獄とその任務——「独房の口」）¹⁵⁸と、言語上の意味——つまり声の音が通らなければならない声門、「闇の口」（ユゴー）という、言葉の場所を指し示す意味。この場所は、言葉を寄せ集めることによって、証言という行為を始動させるのだ¹⁵⁹。

作家はそのことを認めたくなかった。南北アメリカ大陸の奴隷制の「真実」は、世界にとって完全に失われてしまったということ。ただし、独房の夢想のなかで、伝えることのできないまま残っている可能性はある。それなのに、カロリーヌにルブリエの姿を投影することで、頑固な作家はルブリエに、現在を差しだした。つまり作家はこの不可能な記憶を、証言の地位へ高めていた。虚構が虚構でありながら、それほど虚構に見えないような証言がある。証人は、自身の直接的な経験から生じるこの虚構に、自らの肉体を込めるのだ。証人はこの場にいるという衝撃によって、虚構を有効なものにする。苦しんでいる子供はルブリエのために証言するのだが、ルブリエ自身もまた堪え忍んできたのだ。カロリーヌは、彼女の身体の叫びを通して、自らの証人となり、作家を解放し、作家に自分の言葉につかみかかることを許可する。今度はルブリエが子供のために証言するという、貧弱な虚構の物語へ一緒に赴くことを。

伝達が次々に連鎖するという形をとり、作家の行為は、相互的な産出において把握されるべきだということが理解される。作家がカロリーヌを生みだしたのだが、彼女のほうでも、作家が自らの独房から脱出し、自分自身の言葉を発することを手助けすることによって、同じほど作家を生みだしたのであり、助産夫、言葉を生み出す者としての役割を彼にあたえ、「この恐るべき独房のありそうもない戦場のなかで」〈戦士〉に「なりつつある者」¹⁶⁰という地位を確固としたものにするのだ。言葉を発することは、実際には、独房——迷宮——

158 *Un dimanche au cachot*, op.cit., p. 259.

159 *Ibid.*, p. 101.

160 *Ibid.*, p. 283.

一から脱出口を作るのではなく、どうすれば独房を解明することができるのか、その方式を考えることに等しい。「[……] 出口をでっち上げるためではなく、そこからひとつの可能性を引き出すために、この不条理な場所で堪え忍ぶこと」¹⁶¹。その解明には、二つの方向性が必要である。一方には、自分に向かい、そこに埋葬されているカロリーヌ——犠牲となった被害者の、現代の悲痛な化身——を探す方向、他方では、過去へ深く潜りこむことに同意し、アンティルの人間が奪われた記憶を構築するだけでなく、作品という名で呼ばれる、長く、複雑な、この忍耐強い探究（調査）のそれぞれの輪を結びつける内的な記憶を構築すること。内的な相互テキスト性の活性化と、ひと続きのものという小説の概念によって、ある程度まで、想起の要求と同じ機能が保証されるからである。それらは、アナムネーシス [想起] という歩み、あの記憶の意志的な再活性化を連結させ、崩壊した完全性の回復というより包括的な運動を目指している。マルティニックの視覚芸術家セルジュ・エレノンの作品への序文として書かれた「アフリカの跳ね返り」という大変美しいテキストが、このことを述べている¹⁶²。

[……] グリッサン以降、私たちは、両アメリカ大陸のプランテーションの地獄ゲヘナのなかへ投げ込まれたアフリカ人奴隷が、荷物も、蔵書も、まとまった記憶ももたないまま上陸した、赤裸の移民だったという考えを受け入れている。実存に関する自らの考えを養うものを、もっとも深くまで打ち砕かれて。彼は上陸する、もはや有機的に組織することのできない……記憶の痕跡……神々の破片……言語の断片……聖なものの身ぶりと色の形跡……を携えて。

まさにこの悲劇のなかで、生き返ろうと試みなければならないのだ。

161 Ibid., p. 123.

162 « L'éclaboussure Afrique », en ouverture de Dominique Berthet, *Les Bois sacrés d'Hélénon*, Dapper, 2002, p. 9-10.

幼年時代

シャモワゾーには、確かに正義の人という器があり、記憶を取り戻す必要性、「犯罪を知り」「責任の所在を明確にし」¹⁶³、奴隷制と植民地支配の傷跡を糾弾する緊急性を正面から受けとめているが、だからといって幼年時代の作家という側面がおろそかにされてはならない。集団的記憶を扱うからといって、母親であるマン・ニノットの形象に集中して結晶化した、秘められた記憶に繰り返し立ち戻ろうとする傾向を覆いかくすことはできないだろう。この二つの記憶のために——『幼い頃のむかし』は「おお、記憶よ、この探究はお前のためだ」という呼びかけで始まるのではなかったか——、存在しない記録文書を書き写し、再構成し、創設しなければならない。それゆえ、グリッサンが『アンティル論序説』で言及する「否認された昔」という大陸に、幼年時代と青年時代の島々、その時代の危機と不安、つまり驚異がいまだ残っている場所から近づかなくてはならない。

この探究の中心となる作品『クレオールの幼年時代』は三部作で構成されており、各巻は一九九三年（『幼い頃のむかし』）、一九九四年（『学校への道』）、二〇〇五年（『幼年時代の果てに』）と立て続けに出版されている。生まれた町フォール＝ド＝フランスの情景は、ここでは可笑しさ、驚き、滑稽な恐怖など、複数の性質にしたがって繰り返される。「人は幼年時代から離れられない、人はそれを自分の奥底に抱きしめる」¹⁶⁴とシャモワゾーは打ち明ける。町、アン＝ヴェール街場を、『幼い頃のむかし』の主人公である黒ん坊の少年が歩きまわる。少年はネズミが横行する貧民窟を発見し、フランソワ・アラゴ通りにあふれかえるシリア人商人の奇妙きつな場面に立ちあい、ある少年団に加わることに誇りを覚え、買い物のお金の何スーか、幼年時代を彩るあのささやかな盗品のすべてを自分のものにする喜びを感じている。この世界の復元には、いたずらものの詩学という性質があり、記憶が白人工場やゾンビと喋る人など区別なく名づけたり、一九五〇年代のフォール＝ド＝フランスへ水道が到来したという大事件に言及したりする。「サイクロン一過」¹⁶⁵の日々の雰囲気、世界のリズムと色彩は、まるで画家が画布の上に描くように配置される。「夜明けには、クリームみたいな太陽が上がり、ココ椰子の芯のような色をした光を降りまき、

163 « De l'esclavage au Tout-monde », Jacques Chevrier (dir.), *Poétique d'Édouard Glissant*, Paris, Presses de l'université de Paris-Sorbonne, 1999, p. 61. (引用箇所は出典に従って訂正した [訳注]).

164 *Antan d'enfance*, op.cit., p. 93. [『幼い頃のむかし』前掲、80頁]

165 *Ibid.*, p. 124. [同書、114頁]

朝日の格子に夜の哀れな犬たちをからめとる」¹⁶⁶、あるいは「竜が吐く炎の息みたいで、生命の危機を感じさせた」¹⁶⁷ パン屋の窯の幻想的な光景。人びとがその到来を待っていて、勇ましくも備えをすすめている人生最初のサイクロン——「サイクロン、それはみさかいのない風だ」¹⁶⁸——、兄弟姉妹間の度を越した口論、詮索好きなマダムの質問責め、マン・ニノットが販売用に発明した紙の造花の思い出——「水晶のように透明でパチパチと音の鳴る」紙で包まれている——、書くことから息つく暇もなくこぼれ落ちるひとつひとつの事柄が、ささやき声とばか笑いのあいだにある、幼年時代への讃歌を繰り返している。

家族の統率、これについては恐ろしいほど独裁的で、同時に優しくもある二人組のバランスの上に成り立っている。母親のマン・ニノットと彼女の姉、ラ・パロニス女男爵の異名をとるアナスタジーだ。二人は、洗濯し、調理し、叱り、子供たちの宿題を監視し、黒ん坊の髪——「ああワセリンとブラシの時よ！」¹⁶⁹——を何とか服従させようとする。途方もない愛情が、母親の勇敢さに敬意を込めて捧げられている。母親はその人生を、「焼くこと、浸けること、探しに行くこと、市場に見に行くこと」など、家族にとって欠かせない身ぶりの連続に捧げている。それぞれの描写が、マンマン母さんの家政術の才能を繰り返し賛美している。そして、資力がひどく限られていたこの困難な時代、困難な状況から抜け出る唯一の方法が学校だったのだから、勉強を監視する母親の注意を逸らすあらゆる企ては、かならず失敗に終わった¹⁷⁰。

料理をしながら、ニノットおばさんは年長組の子供たちに授業のことを訪ね、教科書を読ませ、自然科学やフランスの歴史や三角形の斜辺や面積についておさらいさせた。ニノットおばさんは教科書よりも学問に通じているみたいだった。本当のところは、彼女は子供たちがつかえたり、言葉がふるえたり、視線が困惑した顔の下でビギンを踊ったりするのを観察していたにすぎなかった。彼女はそうした未熟さの徴候を問いつめて、完璧にスラスラ言えるようになるまでがなばった。よどみなくすらすら言えること、それこそ本物の知識のしるしだった。

166 Ibid., p. 132. [同書、121頁]

167 Ibid., p. 92. [同書、79-80頁]

168 Ibid., p. 120. [同書、110頁]

169 Ibid., p. 116. [同書、105頁]

170 Ibid., p. 86-87. [同書、73-74頁]

黒ん坊の少年が後になって同じ試練を受けなければならなくなったとき、すでに彼女のテクニックを何度も見て精通していたので、最初の頃は、自分の無知をうまくカモフラージュすることができた。しかしニノットおばさんはやがて少年のウソを見破った。少年がガリア人の所業について半ばデッチアゲの話をよどみない声でまくしたてていたある夕べのこと、[……] 彼女は、そう、やさしい声で少年に説明した。サル知恵を覚えてもいいけれど、そういうことなら、どんなにがんばっても年取ったサルにはかなわないよ。[……] 黒ん坊の少年は教課を誰よりも上手に二度暗唱しなければならなくなり、ほんの少しよんどでもまたはじめからやり直さなければならなくなった。

世界は、この黒ん坊の少年にとって、二つに分れている。ひとつは自分の世界、彼の属する少年団の世界であり、もうひとつは大人たちの世界だ。「請求書や借金のやりくり算段」¹⁷¹ や「小さな不幸の数珠を一つずつ並べること」から来る大人たちの重々しい態度は、子供たちのいたずら好きで無頓着な陽気さと好対照をなしている。記憶はいろいろ選別しながら、いくつもの印象的で、宿命的な場面を繰り返す。クリスマスに屠殺された家畜の豚マクドールへの愛着、老ネズミを捕らえるために作られた悪魔のような罠、蠅を退治するための共謀、そして蟻、蜘蛛、赤スズメバチなどの害虫の虐殺。一九五〇年代から一九六〇年代にかけてのアンティルの生活を復元しようとするこの試みのうちに、フランス語世界のさまざまな事物のクレオール化が、すでに現れている。使えるお金がほとんどないなかで、長姉を喜ばせようと、クリスマスの馬槽 [キリスト誕生の馬小屋の模型] の人形を作ろうとするとき、そこに見られるのは人形を完全にクレオール世界のものに変換するという現象である。「アナスタジーの馬槽には寺院の司祭でも祝福するのに困ったのではないかと思われるような連中がたくさん混じっていた。大足フィロメヌ／鳥泥棒ジジーヌ／クーリ＝クリルー／米粒中国人／魚のフライの行商女／サトイモ植えの男／牛の飼料の刈り取り人／夢魔／乳白肌の女／剛毛の混血男／ひずめのある魔女 [……]」¹⁷²。伝統的な紋切り型のこのような翻案には、クレオールの民衆文化と、植民地支配に固有のフランス化、県政施行によって強化されたフランス化との間にある距離への、批判的な眼差しが明らかに込められ

171 Ibid., p. 88. [同書、75頁]

172 Ibid., p. 75. [同書、60-61頁]

ている。シャモワゾーは、この断絶を、つねに警戒している批評的意図によって強調するのであり、まさにこの批評的意図によって、滑稽で、破壊的な同一化を言い当てることができた。その同一化は、この時代、アンティル人の疎外の勢いを着実に増大させていたのである。『幼い頃のむかし』の映画館のエピソードは、この点で重要であり、マルチニックに進出したゴーモン社〔フランス資本の大手映画配給会社〕の映画が世界に対するどのような見方を運んでいたかを示している。

映画は剣劇、ローマ時代の大スペクタクル、ジャンゴ西部劇、探偵物といったところだ。ヘラクレス、マシスト、ロピンフット、ターザンだ。[……] 映画に登場する黒ん坊は半分馬鹿で、大きな目をぎよろつかせ、いつもビクついていた。彼らが演じるのは献身的な奉公人、気のいいバーテンダー、ジャズ演奏家、響めっ面をして、白い歯をむきだした、救いようのない土人という役どころだった。[……] 黒ん坊の少年も自分とそれらの黒ん坊の間にはいかなる同類性も認めなかった。土着民とは黒ん坊を意味し、野蛮で、しばしば残酷であった。ぼくたちはターザンで、けっして彼が打ち倒す半分猿みたいな奴らではなかった。映画の影響は絶大だった。ぼくたちは一番強い者、それはいつも白人で、しばしば金髪で、天からゆくりなく降ってきたような眼をしていたが、ぼくたちは彼らに自分を重ね合わせていた。そして知らず知らずに内面の荒廃に落ちこんでいったのだ¹⁷³。

アンティル諸島のフランス教育システムと、このシステムが伝える価値（「フランスという単語は魔法だった。その単語は地獄も、天国も表していた」¹⁷⁴）に対するもっとも辛辣な批判は、三部作・第二巻『学校への道』で、その全容を示していて、きわめて根源的に記述されている。語り手が「答える聴き手」に定期的呼びかけ、記憶に対する喝采に参加するように勧める、アンティルの伝承物語の形式に基づいて構成されたこの風刺は、滑稽さにあふれていて、思い出への大らかな優しさにすっかり包まれている。かけがえのない幼年時代のさまざまな時期を蘇らせる想起の過程は、ひとつの本質的な亀裂をめぐって形をなしてゆく。家の親密な世界と、ペリノン小学校の世界とのあいだの

173 Ibid., p. 150. [同書、162-163頁]

174 *Chemin-d'école*, op. cit., p. 152.

亀裂だ。小学校の中心は明らかに教師、西洋の知識の伝授役であり、クレオール
の欠陥を矯正すると考えられている、あの「文化の整形外科」の先生である¹⁷⁵。

人びとは悪習を忘れるために学校に行くのだった。悪習とは、悪魔憑
きの風習、ニグロやクレオールの風習などだが——それらは全部一緒
だった。先生は、時々、大声でこう言った [……]。「いつでもフランス、
ようするにフランス！」おお、ウィルキンゲトリクス、ジャンヌ・ダル
ク、クレマンソーの国よ、マレルブ、ラシーヌ、ユゴーを私たちのた
めに作りだしたラテン文明の由緒ある源よ。

新米の黒ん坊の少年は、知識との生まれて初めての接触にすっかり麻痺す
るのだが、この少年にとって、本物の他者の体験は、学校教師の言語を発見
することで、初めてなされたのである。この奇妙な感じによって、少年は人生
において初めて、自分の母語であるクレオール語が「教室で禁止され、フ
ランス語とはかりしれない深淵によって分け隔てられていることを知る。「[……]
先生と一緒にいると、話すことにはたった一本の巨大な道しかなかった。この
フランス語という道はよそよそしいものとなった。発音が変わった。リズムが
変わった。抑揚が変わった。多少なりとも親しんできた単語が、異なる音を
響かせはじめた。それらの単語はまるでどこか遠くの水平線からやって来るか
のようで、クレオールの単語とは似ても似つかなかった。先生が使う比喻、用例、
出典は、もはやこの土地のものではなかった。先生はラジオの人びとが大西
洋汽船会社の水夫のようなフランス語を話した」¹⁷⁶。

語り手が幼年時代に受けたさまざまな驚異を見出す『学校への道』におけ
るほど、複数の言語を別々に生きているという感情——ハイチ人作家フランケ
ティエンヌが「分裂した声」と呼ぶもの——が際立って明らかになったことは
一度もない。クレオール語が「教室のフランス語化した空間では冒涇の言葉
のように」¹⁷⁷ 響いた時代、「お母さんの言葉」^{ラング・マンマン}、「家言語」^{ラング=メゾン}¹⁷⁸ と、新たに学んだ言語、
「自分たちの手に届かない、風が吹いても不動のままの紫ハチドリの壮麗さを

175 Ibid., p. 170-171.

176 Ibid., p. 68.

177 Ibid., p. 119.

178 Ibid., p. 69.

保っている」¹⁷⁹ あのフランス語が、自分自身のうちで奇妙に共存することに、少年は折り合いをつけなければならない。シャモワゾーがフランス語で書くことを自ら選択したとき、この共存は幼年時代の思い出とさまざまな内的葛藤を引き起こすことになるのだが、言うまでもなくこの葛藤を視野におさめておく必要がある。一部のクレオール語作家は、この選択のせいで彼を非難することにもなるからである。シャモワゾーにとって、クレオール語で書くことにとどまることで、自分の読者を減らしてしまうことは問題とはならなかった。「私がクレオール語で書いていたら、乾季の強まる二月のマントウー蟹よりも人目につかないままだっただろう」¹⁸⁰ という、『支配された国で書く』における彼の告白は意味深長である。選択は即座になされた。より流通し、より伝播した言語を奪いとり、その言語をクレオールのやり方でこねあわせ、かきまぜ二つの特有言語を融合させること。その際、絶対的な単一言語使用という誘惑の声に屈服しないこと。そんなことになれば、エドゥアール・グリッサンの言う〈関係〉の多言語的性質にしたがって、諸言語を**関係**という視点から理解することに失敗するだろう。パトリック・シャモワゾーは、たとえ過小評価され、消滅の危機にさらされた言語だとしても、ある言語の松明の火だけを捧げもって前進することをためらうのだが、それは正確に次のことを意味すると解さなければならない——彼がまさしく苦しんでいる、疎外を深めるダイグロシア[二言語使用]という亀裂を再現することの拒否。それはハティビの流儀でなされる「二—言語」^{ビュラング}において結晶化している拒否である。感傷の図書館で、「二言語で生きれば、君の人生は絶え間ない翻訳となる」¹⁸¹ と励ましながら、シャモワゾーはハティビの寛大さを讃えている。作家は、二つの言語を永遠に競い合わせる必要はない。シャモワゾーにとって、疑いはない。クレオール主義の一部の作家たちがイデオロギーとして打ちだした方向にしたがって、二言語のうちのいずれかを選び、もうひとつの言語に対抗しなければならぬとすれば、実際には、ひとつの支配が別の支配に置き換わることにしかならないだろう——それでは、「フランス語圏は、君の言語 v s 私の言語という、同じ苦境のなかにとどまることになる。負けは最初から決まっているのだ……」。逆に、「魅惑する言葉」のほうは、「覚醒したエネルギー」¹⁸² そのものである。

『学校への道』は、学校が運ぶさまざまな表象と、自己の内部で感じること

179 Ibid., p. 68.

180 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 74.

181 Ibid., p. 330.

182 Ibid., p. 325, 126.

の間のずれを、味のある縦横無尽な筆致で描写しているが、民族の差異を意識する瞬間の苦い記憶も記している。一九五〇年代にマルティニックの小学生だったシャモワゾーに、成功の手段として伝えられた理想の外見は、圧倒的に「透きとおった青い目」である。ランボーが一八七三年、「悪い血」（『地獄の一季節』）でまさしく距離を取った自己の外見である。黒ん坊の少年にとって、この理想的外見は、当時は理解されず、いまだ自覚されていなかったネグリチュードと、ガリア人の祖先の神話における標準的な姿とのあいだの、乗り越えがたい断絶を具体的に示すものである。祖先はガリア人だとする異論の余地なき神話とのあいだの乗り越えがたい溝を体現している。教師は、「フランスは普遍だという陶醉」¹⁸³のうちに、まるで聖典の図像を参照するように、このガリア人神話を参照する¹⁸⁴。

この頃、青い眼をして、小麦のように金髪のカリア人は、みんなの祖先だった。この頃、ヨーロッパ人は〈歴史〉の創設者だった。[……] クリストファー・コロンブスこそが、アメリカ大陸を発見した。遠い昔の一夜、いまだ人間性という恐怖を知らず、自分を待ち望んでいたこれら何百万もの野蛮人の住む世界を、コロンブスは切望したのだった。「野蛮な諸君、ご存知か、彼らは新世界に鉄、車輪、牛、豚、馬、小麦、ライ麦、藍、サトウキビ等々をもたらしたということを」
「ジュール・フェリーにならってはつきり言わなければならないが、高等人種は、原始的種族に対して権利と義務があるのだ、ブ・ン・メ・イ・化の！……」

小説には、ヨーロッパ世界に属する、書物だけの知識や紋切り型が、このように数多くちりばめられている。シャモワゾー少年は、幾分途方にくれながらそれらを発見し、やがて驚くほどやすやすとわが物にする。モミ、リンゴ、雪、エピナル版画 [エピナルの町で作られる色刷り版画。通俗的な伝説や歴史を題材にする] など、子供の謎めいたデッサンに母親はとうとう心配になる。「彼はあれこれとべちゃくちゃ喋ることができた。魔女カラボス、七人の小人、セイレーンの話、リンゴ、洋梨、授業中に居眠りする相棒ジャック、ピエロ = アレット = モワ = シュ = アリュムピエロ、君のペンをぼくに貸せが口癖の友人。眠れる森の美女の悩みを、彼

183 *Chemin-d'école*, op. cit., p. 150.

184 *Ibid.*, p. 170.

は知っていた。春、夏、秋、冬についても一通りしゃべり散らした。エッフェル塔、電車、干し草の束を描くことだってできた。マン・ニノットに、魔女たちが長い箒に乗って空を飛ぶと説明したりもした [……]。マン・ニノットは彼の膨大な知識に有頂天だった。少年が家を、もくもくと煙を立てる煙突を生やし、ナラとモミの木立に囲まれた姿で描くのを見つけたときにはさすがに眉をしかめたが。何ダッテ?!……」¹⁸⁵

探しだすこと、記憶の奥底に残骸として眠っているささやかな感動を探し求め、「ブロンドの髪をして、頬は赤く、眼は青い幼年時代」¹⁸⁶ という奇妙な時代をよみがえらせること。その時代、クレオール世界は「フランスのさまざまなイメージという高い城壁」¹⁸⁷ にぶつかっていた。この探究から、おそらくは次の直観が生まれたのだ。この城壁にはしる亀裂の上にこそ、未来の作家の文学的感性は、言葉の喜びの発見を通して、ひとつの健康として、構築されるのだという直観。「黒ん坊の少年はぼかんと口を開けて、テキストではなく、先生が単語を発するたびに口のなかにほおぼっている喜びを」¹⁸⁸。『学校への道』で、唯一先生に向けられる感動的なオマージュも、この方向でなされている。「親愛なる先生、たしかに、ぼくのなかで書物の価値は高まっています。先生が敬ってくれたおかげで、本には永遠の生命が吹き込まれました。先生は本をいつも繊細に扱っていました。いつも敬意をもって本を開いていました。そして典札書のように閉じるのです」¹⁸⁹。後に、シャモワゾーの感傷図書館のなかで、敬意を込めて呼びだされるのは、こうした作家たちの残響であり、その神聖な描線である。この感傷図書館は、文学的・哲学的記憶の群島をめぐる大航海に沿って構成されているが、引用の権威によって押しつぶすような構えは持っていない。むしろ、たがいに引かれ合う親和力のつぶやきを広め、**踏み跡** [痕跡] の概念を例証している。アンティル世界できわめて重要なこの概念は、小道、軽く触れることを示し、しっかり作られ、何度もたどられた道とは正反対の、はっきりとあるのが見分けがたい通り道へのかすかな手がかりを意味している。こうした踏み跡のひとつが、サン＝ジョン・ペルスへの追憶であり、その影はシャモワゾーの重要作品のほとんどに付きまとい

185 Ibid., p. 44.

186 Ibid., p. 87.

187 Ibid., p. 167.

188 Ibid., p. 161.

189 Ibid., p. 180.

いる。『奴隷の老人とモロス犬』、『支配された国で書く』、『カリブ海偽典』——ここでは、彼が「うかがいしれない、高慢で横柄な人間」¹⁹⁰であることが強調されている——、『独房の日曜日』、それに「サン＝ジョン・ペルス考」という美しい文章がそうだ。「サン＝ジョン・ペルス考」は、二〇〇六年に発表された、四〇の断章をまとめたものであり、この文章を通じてシャモワゾーはこの年長の有名人に対する甘くも苦い賛辞を送っている。感傷図書館にはさらに次の作家がふくまれている。ヴィヨン、ラブレー、シェイクスピア、ボードレー、ランボー、ロートレアモン、マラルメ、セガレン、フォークナー、カテブ・ヤシン、アドニス、マフムード・ダルウィーシュ、フランケティエンヌ、ヘミングウェイ、セルバンテス、チャーホフ、さらにイエーツ、デレク・ウォルコット、レオン＝ゴントラン・ダマス、ジルベール・グラシアン、ジャン・ジュネ、オクタビオ・パス、イオネスコ、ベケット、谷崎潤一郎、ニーチェ、チェスター・ハイムズ、ジョイス、ダンテ、ジュリアン・グラック、ブルースト、ヴァンサン・プラコリ [マルティニックのフランス語作家]、ミシェル・トゥルニエとサン・アントニオ [フランスの推理小説家フレデリック・ダールの別名]、アンドレ・シュヴァルツ＝バルトとカブレラ・インファンテ、キャリル・フィリップスとアクセル・ゴーヴァン [レユニオンのフランス語作家]、アントナン・アルトーとレサマ＝リマ [キューバのスペイン語作家]、ポール・ヴァレリーとエミール・オリヴィエ [ハイチ出身の亡命フランス語作家]、コンラッドとウンガレッティ、モハメド・ディブとアルベルト・サヴィーニョ [イタリアの作家・画家]、ルネ・シャールとエドモン・ジャベス、セゼールとモンテーニュ、リルケとアマドゥ・クルマ、トニ・モリソンとネルーダ、ヴェルハーレンとペソア、クンデラとグリッサン、コンフィアンとジャック・ステファン・アレクシ [ハイチの作家]、エドガール・モラン、トウル・ヴィルヒャウルムソン [アイスランドの詩人] と匿名の著者による古代のサーガ、『カレワラ』（「注意深い筆致、戦闘の呼吸、忘れられた記憶と創設のしるしによって魔法にかける完璧な歌」）¹⁹¹と『千夜一夜物語』——「〈多様なもの〉の息吹」¹⁹²によって集められたテキストの波動——。ここかしこで、言葉たちが交差しながら、大陸と群島、ニグロと白人、亡命者と愛国者、自由な人間と支配された人間が集められ、どのような順序づけもなされないまま編みあげられている。他にも、息吹きの種類性から、何人かの音楽家の名前が挙げられている。たとえば、「孤独な叙情性の力、そして、ありきたりのハー

190 *Biblique des derniers gestes*, op.cit., p. 532. [『カリブ海偽典』前掲、582頁]

191 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 53.

192 *Ibid.*, p. 282.

モニーにしゃがれ声を響かせ、むきだしの力で情動を刻印する声」¹⁹³と形容される、ルイ・アームストロング。この興奮、この「受粉する力」の運動を、シャモワゾーは、『支配された国で書く』の「感傷図書館」の部分で見事に描いている。「[……] 多数の書物が私のなかで、異花受粉のようにせめぎ合っていた」。これは「異なるエクリチュールの運び屋、高尚な言語の密輸入業者たちだ。それらの声のひとつひとつがどのようにして領土を破壊してきたのか、どのようにして国境を抹消し、境界を反転させ、一個の開かれた声^{オルガン}となり、さまざまな味から蜜を得ていたのか、私にわからない。諸言語は、そうした声のうちでその虚飾を失っていた。諸言語は、もはや垂直的にそびえ立つことはなく、繁殖する複雑さに自らを開いていた」¹⁹⁴。したがって、『支配された国で書く』のほとんどどの頁にも散種され、他の作品ではより目立たない形でまかれている感傷図書館の届く範囲は、「ゆるやかな反響」、受粉の緩慢な浸透が届く範囲ということになる¹⁹⁵。

眠っている偉大な書物は、穏やかな潜在力を秘めている。別の書物を介して、再読される必要さえないまま、それらの書物は目覚める。一冊の目覚めた書物は、他の千の書物を目覚めさせる。それらの書物はたがいをひそかに呼び合っている。示し合っている。一方から他方へ移動し合う。ゆっくりと、忍耐強く、果てしなくつづく反響。ある書物を再読するたびに、そんな反響が活性化され（確認され、啓示され）るのだが、それはいつでも別の着弾点からの反響なのだ。

それゆえ感傷図書館は、「生命を自分のうちで繁殖させる（驚異の蘇生）」¹⁹⁶という欲望に関係づける必要があるだろう。感傷図書館は、シャモワゾーにおいては、生きること、知ることへのきわめて強烈な欲求の表れのひとつであるように見える。ときには一個の哲学が丸々要約されている、きわめて濃密な格言を通して、この想像の博物館をみたとお気に入りの作家たちは、数々の勇氣と魔術的効果をあたえるものとなり、それが大群となってそこにいるのだ。アンティル諸島の明日を今日よりも尊厳をもって迎えたいという希望に踏みとどまろうとすると、作家たちは招集され、指名される。「[……] 私は

193 Ibid., p. 126.

194 Ibid., p. 102.

195 Idem.

196 Ibid., p. 346.

自分の古びた感傷図書館を、自分のうちに堆積する作家たちの存在を呼び集めた。彼らは、それぞれが支配された国を自分のうちに抱いており、そこで行った戦いを贈り物として私にくれるのだ」¹⁹⁷。それゆえ、子供時代の内密な領土とともに、「古くからの家族という生物学的関係とは無縁の、交換による姻戚関係=親和力」も考えなければならない。なぜなら「エドガール・モランが言及するあの世界という家族という考え方を、避けて通ることができないだろう」¹⁹⁸からである。シャモワゾーがこのように、親和力というゲーテの概念を再び採りあげることには、ある作家=助言者の影響がきわめて大きい。その作家=助言者は、シャモワゾーの知的成熟において決定的役割を果たし、「サンゴの壁」にある日道を切り開いてくれた人物、エドゥアール・グリッサンだ。最初はきわめて晦渋で、理解するのが難しいが（「私たちは彼のテキストを前に、まるで象形文字を前にしているように感じていた」）¹⁹⁹、この作家のおかげで、ネグリチュードがあまりに本質主義的で、ユートピア主義に退きがちだとしてこの考え方を放棄した後、シャモワゾーは自らのクレオール性へ接近し、その輪郭と実質をより深く掴むことができるようになった。たしかに、ネグリチュードは避けて通ることのできない道である。『クレオール礼賛』の著者たちは断言する。「セゼールのネグリチュードは一つの洗礼、回復された私たちの尊厳の始まりの行為だ。私たちは永遠にエメ・セゼールの息子である」²⁰⁰。パトリック・シャモワゾーは、「世界内ニグロ」、「アメリカスにおける失われたアフリカの息子」として、青春時代、セゼールの叫び、その詩が脈動する肉体それ自体と、内奥から共鳴する。「セゼールを語らなければならない、口にも胸にも彼をもち、彼の頭蓋骨のなかに彼の言葉の地球的活動を迎え入れなければならない」。ところが、その強力な影響力にもかかわらず、この身体的・精神的交感は、開かれた複合的アイデンティティのモデルを選び、祝福するための予備的段階に過ぎない。そのようなアイデンティティは、カリブ海のきわめて特異な歴史と調和させるかたちでしか、そもそも考えられないものである²⁰¹。

クレオール性とはカリブ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、レヴァン

197 Idem.

198 Ibid., p. 326.

199 *Éloge de la créolité*, op.cit., p. 23. [『クレオール礼賛』前掲、31頁]

200 Ibid., p. 18. [同書、25頁]

201 Ibid., p. 26. [同書、39頁]

トなど(歴史)の軌が同じ土地に集めた諸々の文化要素の相互交換的^{アンテラクティブ}な、相互浸透的な集合体である。三世紀にわたって、こうした現象の影響下にあった島々と大陸の一部は、新しい人間性が打ちだされる真の鍛冶場であった。そこでは、言語も、民族も、宗教も、習慣も、世界中から集まってきた人びとの生き方も、突如として脱領土化され、新たな生を模索せざるを得ないような環境に移植されたのだ。

『クレオール礼賛』は、自分自身に対する違和感について、アンティル人が自己満足に陥らずに作成した調書だが（「私たちは根本的に外在性を刻印されている。それは遠い昔から今日に至るまで真実である。私たちは西洋の価値のフィルターをとおして世界を見てきた [……]」²⁰²、『学校への道』は、代理教師というわき役と、そのアフリカ主義の言説への揺るぎない情熱を通じて、その対極を伝えている。「彼の主張では、私たち祖先はガリア人ではなく、アフリカ人だった。執拗に、喜びながら、嬉しいのか怒っているのか分からない有り様で、先生と正反対のことを彼は言うのだった。[……] 現地人の先生が白を見ると、彼は黒を置いた。高い鼻に対してべしゅんこの鼻を、直毛に対して縮れ毛を、理性に対して情動を褒め称えた。ヨーロッパに対しては、アフリカでもって対抗した」²⁰³。このように、アイデンティティに関するパトリック・シャモワゾーの意見の表明は、クレオールに特有のものの見方、あるいはその見方を可能にする複合的な概念の創設というものを考慮しなければ、まったく理解できないことになる。二〇〇七年に刊行された、エドゥアル・グリッサンとの共同署名による短い声明文『壁が崩れるとき。法外なナショナル・アイデンティティ?』²⁰⁴は、移民と国民アイデンティティ省²⁰⁵の創設に対する抗議として作成されている。一方では、セガレンの読者であるグリッサンが擁護する、不透明性の原則、多様なものの原則、他方では、二人の作家が引き受けたクレオール化概念の新たな評価に、それぞれ深部で呼応する修辭的意図が、明らかにこの声明文をつらぬいている。クレオール化については、ごく最近、シャモワゾーが『マルフィニ鳥の九つの良心』において、神話的フフ鳥

202 Ibid., p. 14. [同書、14頁]

203 *Chemin-d'école*, op. cit., p. 182.

204 Patrick Chamoiseau, Édouard Glissant, *Quand les murs tombent. L'identité nationale hors-la-loi ?*, Paris, Galaade/ Institut du Tout-Monde, 2007.

205 正式名称は「移民・統合・国民アイデンティティ・連帯開発省」(Ministère de l'immigration, de l'intégration, de l'identité nationale et du développement solidaire)。[訳注]

を通じて、エコロジー的観点から例証している。このように、クレオール化の概念そのものが生まれるのは、クレオールという母胎を転位し、拡張することからなのである。その転位、拡張は、計算づくの異種混濁性や型通りの混交に対する、あまりに単純化された礼賛によってではなく、危険をとまなう、流動的な要素、おのきのうちに、真に新しいものを供給する要素の支えによってなされる。幼年時代——いくつもの幼年時代——は、それゆえ他者性と何度も対決することによってクレオール性の発明に寄与する、内密な記憶の旅の道具となるだろう。クレオール性とは、あらかじめ確定された輪郭をもたず、人類学的・文化的な絡み合い全体によって決然と練りあげられる地方である。あまりに血統主義的であるゆえに不毛なノスタルジーの媒介物であるような「唯一の」型の外に引き抜かれるのは、耐えることが困難なことだが、それは生き方に関する選択に影響する困難そのものである。たとえば、それこそが『テキサコ』が問うていることであり、そこではプランテーション社会から都市的近代への移行に伴う複雑な事情のすべてが提出されている。ここでもまたシャモワゾーは、状況の推移の描写と、危機的体験の活写において見事な手腕を発揮しているが、それらの演出においては、否認せずに粘り抜き、懐古趣味的な伝統に陥らないようにして進むことが必要とされる。そこでこそ、彼の批評的臆想は、幻視者としての資質と調和するのであり、まさしく今や、未来を想像し、うぬぼれもなく、学者ぶった高飛車な態度もとらずに現状を総括し、人間を気遣い、時間と空間のすき間から人間が収集してくるものに注意を研ぎ澄ませなければならないのだ。

都会と生者の寓話、あるいはメランコリー

クレオールの母胎から都会の神話への移行は、『テキサコ』（一九九二年ゴンクール賞受賞作）によって確かなものとなる。この「貧しい叙事詩」²⁰⁶、クレオールの「都市の詩」²⁰⁷では、マルティニック近代の全歴史が再検討されるのだが、それは「ちょっとした土地を囲って、テキサコ石油のタンクの影に家を一軒建てて来た」²⁰⁸人びとの歴史を通してなされる。このため、やがて人びとが集まってくるこの地区はテキサコという名で呼ばれることになるだろう。テキサコは「フォール＝ド＝フランスの無秩序」であり、少なくとも「その〈秩序〉の詩」²⁰⁹、「生きる欲求に捧げられたこのあばら家の詩学」²¹⁰だ。「テキサコ。そこに見えるのは、大ドラム缶の大聖堂に、屑鉄のアーケードに、惨めな夢が流れているパイプの仕掛。土とガソリンでできた街なき街」²¹¹。「奴隷の鎖の最後の頃」²¹²、奴隷制廃止、自由ニグロが「洪水の水か、包丁の波か、はたまた怒りの泡とばかりに突進し」²¹³、丘陵に戻っていったあの奴隷解放期、それから、特異な運命をたどることになる震源地の街サン＝ピエールへの移住、一九〇二年のプレ山噴火によるこの街の消滅、その後、当時フォール＝ロワイヤルと呼ばれたフォール＝ド＝フランスへの移動というクレオールアン＝ヴィルの街場が形成されるまでの風景が描かれる。そうした風景とともに、ムラートでもなければ地つきのニグロネグ＝ドゥ＝チエルでもない、自由となった奴隷の子孫の戦いが繰り返される。なぜなら、街の勃興は何よりも、奴隷制度廃止の始まりと一致し、これによって奴隷制の終焉が否定しがたい形となるからである。「フォール＝ド＝フランスとサン＝ピエールは、いちばん大事なところで一緒だった——鎖につながれた夜のなかで、松明の明かりの役を果たしていた」²¹⁴。物語を語るのには、テキサコ地区の「創設の始祖」マリー＝ソフィー・ラボリユールである。このマリー＝ソフィーが、父方の祖父エステルノーム、プランテーションの毒殺師だった「独房の祖父」——「それは職業じゃなくて、農園での奴隷

206 *Texaco*, op.cit., p. 495. [『テキサコ』下巻、星笠守之訳、平凡社、1997年、277頁]

207 *Ibid.*, p. 186. [『テキサコ』上巻、前掲、217頁]

208 *Ibid.*, p. 27. [同書、26頁]

209 *Ibid.*, p. 236. [同書、278頁]

210 *Ibid.*, p. 312. [『テキサコ』下巻、前掲、61頁]

211 *Ibid.*, p. 152. [『テキサコ』上巻、前掲、176頁]

212 *Ibid.*, p. 219. [同書、258頁]

213 *Ibid.*, p. 108. [同書、123頁]

214 *Ibid.*, p. 223. [同書、262-263頁]

制に対する戦いだっただ」²¹⁵——の記憶を遡り、回想をはじめ。そこでも問題は、「歴史つてももの一枚下に隠れている、どんな本も語っていない数々の物語」²¹⁶のもとで、もはや「サトウキビもなければベケもない人生」に結びついた、この街場——「足の指が泥の色じゃない街場」²¹⁷——の素晴らしい希望を語り、描き出すことである。「インフォーマント」のマリー＝ソフィー・ラボリユーは「マニオクのようにすりおろされた」父親の思い出を、膨大な回想手帳に注意深く書きとめ、その回想手帳を言葉の記録人、オフゾード・シヤムシヤムの鳥に託す。言葉の記録人自身は、マリー＝ソフィーの手帳を、文字記憶の痕跡をもたないこの社会で、生命に不可欠の伝達、つまり記憶の中継という掟に従い、フォール＝ド＝フランスのシェルシェール図書館に預ける。この図書館だけが、想起の息づかい、その執拗な震えを唯一証明する場所なのである。正義のために戦うこの「ファミ＝マタドール女闘士」の物語は、一世紀半以上の時期におよぶ。小説のリズムは、歴史上のさまざまな時期によって区切られているが、それぞれの時期は居住様式の変遷のうちに反映されている。「藁の時代（一八二三——一九〇二）」「木箱の時代（一九〇三——一九四五）」「ファイバーセメントの時代（一九四六——一九六〇）」「コンクリートの時代（一九六一——一九八〇）」。「どの時代にも、熾烈で非情な戦いが繰り広げられたが、それは何より新しい風景のなかに住む場所を見つけ、解体の連続にあつてもその場で持ちこたえるための戦いだっただ。フォール＝ド＝フランスの共産党系市長の委託によって、一人の都市計画者がやって来るまでそれがつづいた。この人物は当初「黙示録にでてくる騎士のひとり、つまり近代主義の市役所から遣わされた破壊の天使」²¹⁸と思われていた。しかし、この地区の住民の劇的な運命に心を揺さぶられ、マリー＝ソフィーが驚異的な物語を懸命に聞かせてくれたことから、都市計画者は、この地区を否応なく脅かす破壊と、おそらくは「団地のウサギ小屋」²¹⁹への地区住民の追い立てから、テキサコを救うために行動するようになる——思いがけない救い主は、こうして「キリスト」と呼ばれることになる。マリー＝ソフィーは、庶民的な周辺地区を認めようとしない街場に、驚くほど執拗に対抗する気概を体現しているのである。

過去に旅しようとするれば、マルチニニックの歴史のなかに途方もなく深く潜

215 Ibid., p. 49. [同書、53頁]

216 Idem. [同書]

217 Ibid., p. 48. [同書、51頁]

218 Ibid., p. 39. [同書、41頁]

219 Ibid., p. 20. [同書、17頁]

ることになる。奴隷制廃止以前の「サヴァンナの自由人」から、「政治をリードしていた」「大ムラート」まで、さまざまな民族階級が対立を繰り返すことで新たな民族階級が生みだされ、中心であれ周辺であれ、街場の施設がどのように配置されるかに決定的に影響をあたえることになる。その記述からは、農村からの人口流出の社会学そのものがあらわになるのだが、この社会学は「肌を白くすること」²²⁰が人間になる指標であること、そしてとりわけ都市の極度の暴力を明らかにしている。その背景には、プランテーション構造の解体後、解放された旧奴隷が、小屋を建てるために断崖の斜面を不法占拠スクワットしにいても、誰一人自分が耕していた土地の所有者になれなかったことがある。この大変動によって、実際には、伝統的な序列を転覆するような、都市の新しい読み方が否応なく示されることとなる。歴史の基層をになうのは、もはや西洋モデルのように中心街ではなく、周辺地域となったからである²²¹。

彼女 [マリー＝ソフィー] は私たちのクレオールクレオールの街にある二つの空間を読みなおすことを教えてくれました。消費の新たな欲求によって生きている中心街と、私たちの数々の物語の宝庫で、民衆の街になっている近郊都市圏です。[……] 中心街では、思い出を壊して西欧の都市をお手本に改造がおこなわれています。ここ近郊ではみんな記憶に生きています。中心ではみんな世の中の近代化に溺れています。ここではみんな古い根っこを持っています。それも、深くて硬いのではなく、言葉の与えてくれるあの軽やかさで、時の上を四方八方に溢れるほどに広がってゆく根です。

都市はこうして、クレオールの変転が刻まれる皮膚になる。「西洋の都市計画者がテキサコのうちに見るのは、都市秩序にできた腫瘍」だが、言葉の記録人はといえば、都市問題の核心に言葉の問題があり、それが都市問題と密接に結びついていることを理解している。「[……] クレオールクレオールの街は人知れず新しい言語を語って、バベルをももう恐れませぬ」²²²。

クレオールクレオールの悲惨ミゼラブルな人々の叙事詩は、何よりもまず抵抗の叙事詩だ、抵抗だけが、自由の唯一可能な形式なのだから。「泣くのはもうたくさん、闘うこ

220 Ibid., p. 94. [同書、107頁]

221 Ibid., p. 218. [同書、257頁]

222 Ibid., p. 282, 345. [『テキサコ』下巻、前掲、25、101頁]

とが、私たちの心のなかにあった」²²³。逃亡奴隷が平野とブランテーションとの絆を完全に断ち切ることを選ぶのに対し、元奴隷の地つきのニグロにとって、闘いは継続中であり、いまや街を征服しなければならないのだ。「背の高い街。巨大な街。自分たちが勘定に入っていないような、そんなひとつの記憶をもった街。連中にとっては、街場はまったくわけのわからないものだった」²²⁴。ムラートが征服したサン＝ピエール、「賑々しく歌いだす」²²⁵ サン＝ピエールは二十世紀初頭、ポンペイと同じ運命をたどることになる。この炎と灰の瞬間がもたらした心的外傷は、奴隷制の心的外傷とおそらく同じほど深く、記憶に刻みこまれる。マリー＝ソフィーの父エステルノームは、この出来事を思い出さなければならないとき、「とりとめもないことを呟くことしかできなかった。意味はよくわからなくても、上手な説明と同じくらい恐ろしかった」²²⁶。しかし、火山が引き起こした怒りと破壊は、まだクレオールの歴史の漠然としたメタファーにすぎない。「[エステルノームの顔に貼り付いた] 人生の悩みは[……] 炎の焼き金よりももっと痛ましかった」²²⁷ からだ。マリー＝ソフィー・ラボリユエが体現するクレオールのエネルギー、そして、立ち退き運動と「渇水」によるテキサコ消滅の脅威に対する「目立たない征服」²²⁸ 闘争のうちに緊張を高める彼女の決意と忍耐力は、「都市のマングローヴ」²²⁹ のなかで、地区住民（「クレオールの「地区」、それは分かり合う人たちってこと」²³⁰）を「ブドウの房のように」結びつける連帯を基礎としている。それゆえ作家はこの「都市のマングローヴ」を、スラム街に帰着させることを拒んでいるのだ。逆境や失意に対しては、「詩という薬」²³¹ もあれば、ランボー、ジョイス、そしてもちろんセゼールの朗読もある。詩人にして国会議員兼市長、「ベケと大ムラートに対するわれわれの消えない復讐」である「パパ・セゼール」は、小説の終盤近くにテキサコ住民のもとへ支援の手を差し伸べる。「一番その道に通じたフランス白人よりも物知りで学があって凄い」²³² 「黒いニグロ」であるこの詩人の作品を読むことで、マリー＝ソフィーは新たな生の飛躍を取り戻す。「[……]

223 Ibid., p. 48. [『テキサコ』上巻、前掲、52頁]

224 Ibid., p. 107. [同書、122頁]

225 Ibid., p. 210. [同書、247頁]

226 Ibid., p. 194. [同書、227頁]

227 Ibid., p. 195. [同書、229頁]

228 Ibid., p. 323. [『テキサコ』下巻、前掲、76頁]

229 Ibid., p. 172. [『テキサコ』上巻、前掲、201頁]

230 Ibid., p. 336. [『テキサコ』下巻、前掲、91頁]。原文では強調箇所。

231 Ibid., p. 466. [同書、246頁]

232 Ibid., p. 319. [同書、68頁]

私はみずから本を手に取り、ちつともわからないままにひとりで読んで、私の血を黒くする祈りのエネルギーにただ運ばれていった」²³³。取り壊しのたびに、地区は粘り強く、再建される。「そこでもう次の夜から、シーシュポスの辛抱強さとフェニックスそのものの打ち勝ちがたさに恵まれた [……] 私たちは、残骸でまた家を建て直すのだった。だから(三十ダースもの回数建て直された)私たちの家ときたら錯乱したモザイクみたいに見えた [……]」²³⁴。

シャモワゾーが都市に投げかける視線に、自己満足はない。シャモワゾーは、ヴェルハーレンの慧眼に靈感を受け、十年も前から、『第二世界の都市の手帖』において、都市の退廃した光景を書きとめている。

そう、都市はひとつの危険なのです。都市は大都会になってとどまることはありません。かつて諸々の帝国が周辺を窒息させたように、都市は田園を沈黙で凍りつかせます。民族国家の廢墟に、都市は多民族的、民族横断的、超民族的、国際的なものとして、怪物のように打ち立てれます——ある意味では狂ったクレオールとも言えますが、そういうかたちで街は非人間化された人間のたったひとつの構造となるのです²³⁵。

街場に関するこの幻滅は、最初は、十九世紀後半の、砂糖産業における労働者の搾取に結びついているが（「工場は七又の大蛇おろちみたいに息を切らしていた。工場はエネルギーではあはあ言っていた」²³⁶、その後は、アンティル諸島への財政支援という新たな有罪判決に基づいている。「けれども、街場のまわりには何の職もない——もう街場は、フランスからやってくる船を待ちながら細々と暮らしていたから」²³⁷。フォール＝ド＝フランスは、サン＝ピエールとは正反対に、魅力もなければ、魂もない街として描かれている。一九〇一年から一九〇八年にかけてのコンクリートの時代は、失望と、空約束と、街場の排斥の時代に他ならない。目印という目印がごちゃまぜにされるとき（「街場にはもうベケはいない。それじゃあ、どうやってベケを叩くことができる？

233 Ibid., p. 468. [同書、248頁]

234 Ibid., p. 429. [同書、201-202頁]

235 Ibid., p. 455. [同書、232-233頁]

236 Ibid., p. 182. [『テキサコ』上巻、前掲、212頁]

237 Ibid., p. 246. [同書、290頁]

もうお屋敷なんかない、それじゃあどこから逃亡しようっていうんだい？
もう工場もない、それじゃあどんな熱狂に身を捧げようっていうんだ？」²³⁸、
唯一残るのは小説の血の通う心臓、つまりテキサコの栄光と悲惨だ。テキサ
コは「どんな地図にも掲示板にも」²³⁹ 載っていないが、都市の知恵のすべてを
生みだす。それは、クレオール世界の還元不可能な複雑さ、そのありそうも
ない奇跡的な均衡を、ゆつくりと、我慢強く解説することを可能にする忍耐の
記憶である。

『第二世界の都市の手帖』²⁴⁰ は、メランコリックな夢想というかたちで、
歴史の重荷から解かれた現代都市という舞台装置を作りあげる小品だが、
荷運び屋やさすらう者に特有の雰囲気はいまだに強く感じ取れ、その貧しく
も超自然的な肖像がきわめて独特な幻想世界を確立している。『テキサコ』で
すでに、マリー＝ソフィーが、恋人ネルタのうちに、ランボー的夢幻境を思
わせる奇妙な風景を読みとっていた。ネルタは、世界へ通じる道へ立ち去り
たいという願望に身を焦がしていたのだ。「[……] 私は心締めつけられる思い
で熱い砂の丘を見たかと思うと、街の正面や喉の渴いた駱駝や絢爛豪華なイ
ンドの寺院や途方もなく大きな遺跡やイグルーやガラスのような氷に映る赤
茶げた月が震えるのが見えたような気がするのだった」²⁴¹。これらの「第二世界
の場所」は、『第二世界の都市の手帖』と同年の二〇〇二年に出版される『カ
リブ海偽典』のなかでさらに思いえがかれることになる。しかも、「第二世界
の場所の手帖」は、この大河小説の内部に二回挿入されており、そこでは「第
二世界の存在たち」は「本当と本当ではないものとのあいだをさまよっている
怪物たち」²⁴² として定義されている。実際、『カリブ海偽典』で、バルタザール
は人間社会に完成ということがあり得ないことを知り、サラのための避難所
を発明する。そのためには、「この世界から隠されている、第二世界を見つけ」²⁴³
なければならない。シャモワゾーが強烈に抱いている、もう一つの世界を想
像するというこの願望は、思いがけないものではない。人間性を失わせる都
市の諸様式を前にして、作家が感じる不満足の結果であり、この懸念ははず

238 Ibid., p. 376-377. [『テキサコ』下巻、前掲、138頁]

239 Ibid., p. 419. [同書、190頁]

240 *Livret des villes du deuxième monde*, Paris, Monum/Éditions du patrimoine, 2002.

241 Ibid., p. 344-345. [『テキサコ』下巻、前掲、100-101頁]

242 *Biblique des derniers gestes*, op.cit., p. 641. [『カリブ海偽典』前掲、698頁]

243 Ibid., p. 538. [同書、633頁]。原文では強調箇所。

に一九九七年、老戦士の「メランコリーの目録」の一つの途中で表明されていた。『支配された国で書く』において、老戦士はこのように推測する²⁴⁴。

おそらくどこかに存在しているのだ、人里離れた一角、サイバースペースから忘れられたひとつの民族の内部、あるいは巨大都市の変異する一地区で、西洋的發展に代わる選択肢のいくつもの提案が、世界＝内＝人間について考え、その多様な開花を検討するもうひとつのあり方が……。

このもうひとつの場所が想像上どのような形をしているかが、『カリブ海偽典』でよりはっきりと提示されている。「これらの〈場所〉は国家でも、故郷でも、国でもないことに注意しなければならない。／〈場所〉は横断可能であり、こちら側にある。／〈場所〉は群島の形に並んでいる」²⁴⁵。

独立主義者はここで、観想的な幻視者、夢に形をあたえ、人びとの「情報通信から取り残された孤独」²⁴⁶を注視するシナリオライターに姿を変える。詩的なものが宗教的なものいつでも取り替えられ、境界領域インターフェイスの概念が国境の線引きに置き換えられるようなこの世界では、導きの糸は、街の形が完成しないこと、その寄せ集めの錯乱である。「太陽」、「夜想」、「虚無」、「再開」という四つの「循環」が作るリズムにしたがって、『第二世界の都市の手帖』は展開される。この小品は都市の膨大な形態とその運命を引き合いにだし、混じり合わせる。「ポール・フェヴァルが垣間見た吸血鬼の都市」²⁴⁷、「アンドレ・ジッドが語っていた」、「夜明けとイスラームの色彩の都市、薄紫色の椰子の木々

がその上に身をかかめている都市」²⁴⁸、「子供だけの民族」が「泥まみれの路地をゴミからゴミへ」²⁴⁹さまよっている「製鉄と鉄鋼の都市」²⁵⁰。「四方八方に伸びた都市」、非物質的な「都市への夢想から生まれた都市」へのポストモダンなこの哀歌の中心には、「コンピューターが生みだす衝動と人工衛星の毒」²⁵¹による痙攣、工場によって汚れた都市の絶望、破滅にむかう螺旋と派閥主義の暴

244 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 347-348.

245 *Biblique des derniers gestes*, op.cit., p. 603. [『カリブ海偽典』前掲、657頁]

246 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 336.

247 *Livret des villes du deuxième monde*, op.cit., p. 39.

248 *Ibid.*, p. 31.

249 *Ibid.*, p. 53.

250 *Ibid.*, p. 20.

251 *Ibid.*, p. 45.

力に突如捉えられた宇宙進化論、そうしたものに委ねられた人間の墮落した存在が宿っている。荷運び屋とさすらう者の作家シャモワゾーは、この作品で、彼の社会学的洞察力をあますことなく示し、無数の漂流のうちに座礁する若者たちへ寄り添うことに慣れた保護司のまなざしで、その鋭敏な感受性を十分に発揮している。「街場で魂のない日銭仕事に沈没」²⁵² することのないために闘う人間は、はるか昔から存在する。さすらう者の祖先、現代の宿なしに先駆けるこれらの放浪者、「混沌-世界を直観的に理解している」²⁵³ 人びと、グリッサンが『大いなる混沌』の冒頭で敬意を表しているこれらの人びとは、奴隷制が廃止されてからは、「自由民の最後のもう一種類、奴隷と毛のはげ落ちたよぼよぼのガマガエルたちとのちょうど中間の連中」²⁵⁴、つまり物乞いか強制労働者の姿を取っている。『テキサコ』でさすらう者のモデルとなっているのは、アルカディウスという人物で、彼は自由を必死に渴望する遊牧民であり、一言で言えば「街場の逃亡奴隷」²⁵⁵ だ。『第二世界の都市の手帖』で、都会の熱狂と「金融界のメガシステム」²⁵⁶ の裏面で、神の目が届かないところで、焼印を押され、打ちひしがれている姿で見出されるのは、まさしくこの「賃仕事に必死で、生き延びることに埋没した [……] プロレタリア」²⁵⁷ である。この手帖は、はしがきの言葉によれば、世に知られぬ「放浪者の持ち物のなかから見つけ出された」²⁵⁸ ものである。マリー＝ソフィー・ラポリューのノートにそうしたように、シャムの鳥はこの手帖の予期せぬ所持者にして転写する人になる。廃物を使ってプリコラーージュされたこの手帖は、相続人不明の持ち物、「気高い彷徨」²⁵⁹、さらにはいくつかの輝かしい驚異をひとつひとつ物語る。渡り歩いてきた「都市の聖書」²⁶⁰ は、幻視、断片、スナップによって織られていて、そのすべてはインクだけでなく、「ケチャップの跡、油の青い染み」、「ネオンから落ちてきた星屑」²⁶¹ を用いて書かれている。このポストモダンの「酔いどれ船」は、退廃する現代性の空間における超自然的な航海だ。抑えがたいリズムで横断してきた寄港地は、あの第二世界の探究がなされた標識となっている。

252 *Texaco*, op.cit., p. 157.

253 Édouard Glissant, *Les Grands Chaos. Poèmes complets*, Gallimard, 1994, p. 409.

254 *Texaco*, op.cit., p. 91. [『テキサコ』上巻、前掲、103頁]

255 *Ibid.*, p. 459. [『テキサコ』下巻、前掲、238頁]

256 *Ibid.*, p. 402. [同書、167頁]

257 *Livret des villes du deuxième monde*, op.cit., p. 68.

258 *Ibid.*, p. 13.

259 *Ibid.*, p. 51.

260 *Ibid.*, p. 14.

261 *Idem.*

ボードレール的な港である「物思いにふける都市」²⁶²、「遊牧民」が「大草原を託しに」来た「重工業の都市」²⁶³、ヘリオポリス[エジプトの古代都市。太陽神ラー信仰の中心地]のような、土占い師が渡り歩き、「始原の鉄と神の凝視する片目の神秘をとおして空を掴む、太陽の真の娘」²⁶⁴である「聖なる都市」。「車軸の下に隠れた避難民の群れ、麻薬という星を求めて瞳孔を見開いた若者たち」、あるいは「早魃の災禍、放射線汚染」や「民族主義の猛威」²⁶⁵から逃れる人びとがおもむく敗走の都市。これらの「酸性の霧がかかる都市」²⁶⁶の混沌のなかで、精神的苦悩というアルコールの隣には、住むことができるという幻想を人びとが抱いたように思える、尊大な都市の輝きがある。しかし「解体された部族、失墜した聖なるもの、疲弊した神々」こそが、この孤独な泡たちの真の寝台である。そこでは、一貫性というものがまったく不可能な、サイケデリックで調子の狂った現代性をめぐる変奏より、「パイレックスと鋼鉄」、「ハウケイ酸ガラスとプレキシガラス」²⁶⁷の反射のほうが、未来派のエクリチュールやサイエンス・フィクションにふさわしい——ちなみに、シャモワゾーの書き方はバロック様式に近いとよく評されるが、実際には未来派、SFというジャンルのほうに親近性が高い——。

詩人シャモワゾーは、資本主義の漂流のなかで機能不全に陥る都市を描いてきたが、前作にあたる小説『マルフィニ鳥の九つの良心』（二〇〇九）では、環境保護への責任と、その責任から導かれる倫理的義務という決定的問題に取りかかっている。都市を相続する人間がいけないという危機感は、地球全体に宿命的に拡がり、生きている人の良心というものを減少させている。その良心は、シャモワゾーにおいては鋭敏な意識となっていて、それほどまでに鋭利なもののだが——彼にとっての問題は、「押しつけるべきどのような真実もない」²⁶⁸という拒絶の態度と結びついている。ここでもシャモワゾーはエドゥアール・グリッサンと緊密な哲学的対話を交わしているのであり、グリッサンによれば、「真実のものなど何ひとつない、あらゆるものはただ生きているの

262 Ibid., p. 18.

263 Ibid., p. 20.

264 Ibid., p. 22.

265 Ibid., p. 27.

266 Ibid., p. 42.

267 Ibid., p. 42 et 43.

268 *Les Neuf Consciences du Mallin*, Paris, Gallimard, 2009, p. 222.

だ」²⁶⁹ということになる。『テキサコ』では、祖先の一人は「自然を駆け抜けるほんのわずかな震えにも覚える聖なる驚異」²⁷⁰を注意深く伝え、周囲に対する敬意を表しているのだが、この不安にみちた注意力は、アフリカの遺産によって伝えられ、クレオール生活体系のなかで生きている人間がずっと受け継いできたものである。この問題は『第二世界』でもやはり強烈に提起されていて、懸命な筆致で、「硫黄の水と重い鉛」²⁷¹を飲む都市の致命的な痕跡を追跡し、その痕跡がもたらす災厄を明らかにしようとしている。「都市を築くために、森林はなぎ倒され、玄武岩の断崖は打ち壊され、粘土の海溝は掘り崩された。河はねじ曲げられ、滝は飼い馴らされ、[……] 厳かな猛獣は沈黙へ追いやられた」。とりわけ「円形交差路に植えられた小低木の断末魔」²⁷²の象徴的イメージは、『マルフィニ鳥の九つの良心』という環境保護派の幻想的寓話を生みだす萌芽として読むことができる。このアンティルの寓意がおよぼす倫理的影響は、マルティニック島サン＝ジョゼフ村のラビュシオン地区という限定された場所を大きく超えている。「文学は、[……] その源である民衆の現実そのものを超えていつも震えている」²⁷³ものなのだから。ここではエクリチュールがクレオール語主義から解放され、決然とした自律性を獲得しているため、真に賭けられているものは、言語の問題、あるいはクロルデコン〔有機塩素系殺虫剤〕事件に席卷されていたアンティル諸島の現状とは別のところにある²⁷⁴。この新たな闘いには、たしかに世界のマイクロコスモスとしてのマルティニックを強調し——「この島の火山の凝固、その破壊、その消滅、その強制的根つき、その凶暴な展開」²⁷⁵——、島の豊かな自然を保全を求めようとする関心が見て取れる。写真集『空から見たマルティニックの隠された財宝と自然遺産』（二〇〇七）に付された大変美しいテキストは、同じ意図を表明しているし²⁷⁶、ジャン＝リュック・ド・ラガリーグの見事な写真がふんだん

269 Édouard Glissant, *La Terre magnétique. Les errances de Rapa Nui, l'île de pâques*, Paris, Le Seuil, 2007 (en collaboration avec Sylvie Séma), p. 118. この一文でもって物語は締めくくられる。これは以下にも見出せる。 *Philosophie de la Relation. Poésie en étendue*, Paris, Gallimard, 2009, p. 106.

270 *Texaco*, op.cit., p. 56. [『テキサコ』上巻、前掲、61頁]

271 *Livret des villes du deuxième monde*, op.cit., p. 45.

272 *Ibid.*, p. 42.

273 *Texaco*, op.cit., p. 416. [『テキサコ』下巻、前掲、187頁]

274 クロルデコンはアンティル諸島の農業で大量に使用された殺虫剤。2007年、有機農作物、食料、公衆衛生への深刻な汚染が大々的に明るみになった。

275 *Écrire en pays dominé*, op.cit., p. 107.

276 *Trésors cachés et patrimoine naturel de la Martinique vue du ciel*, photographies d'Anne Chopin, HC Éditions, 2007.

に取められた写真集『メランコリーの描線』も、一九九九年、まったく同じ意図にそって、マルティニックの職人たちの驚くべきポートレートを再現していた²⁷⁷。それに対して、『マルフィニ鳥の九つの良心』が高く掲げるのは、「生きた人間の満ち潮の歌」である。歴史的記憶の記録の後に、〈想像界の戦士〉が何としても保護しようとするのは、まさに「生きた人間の記録」である。歴史的記憶を描く小説の伝統が、ここでは世界のさまざまな力、ひどく脅かされたその均衡——つまりは生態系^{エコロジー}の記憶に関する瞑想、「朗唱」によって刷新されている。都市は、生者の巨大墓地として完全に姿を消し、この環境詩学^{エコポエティク}の作品では、自然世界の驚異的な教えと入れ替わっている。いまや、「遠方」が「すべて接近してきた」のだ²⁷⁸。

『マルフィニ鳥の九つの良心』では、主要登場人物は鳥である。その一羽は、皇帝然とした猛禽類であり「ワシの系統に属する鳥」²⁷⁹、マルフィニ鳥であり、もう一羽は、冴えない様子の虫みたいな鳥、フフ鳥である。フフ鳥は、実際には「ハチドリ種」のものである^{エメルツエイユ}驚異をにない、その鋭敏さと羽ばたく活力は奇蹟である。この二羽の鳥は、言ってみれば人間の表と裏、日向と日陰、光と影である。一方は、自分の支配力に慣れきった、血に染まったものを渴望する肉食の鳥であり、アラヤと呼ばれる、ある種の肉食動物の本能や爬虫類の欲動、自らを捕らえて放さない「太古からの要請」²⁸⁰に操られている。もう一方は、休みなく動きつづける微細なきらめき、「小数点以下の生、微々たるもの、一個の原子」²⁸¹であり、堪え忍ぶ人生の不満のざわめきを間断なく集め、このざわめきを空中に維持しようとする。一方は、大きさを尊大に誇示し、もう一方は、「無限の自由」²⁸²をもった振動する宝石であり、「突然、後ろ向きに飛ぶこともできる……」²⁸³。この二羽の周りを、ハチドリやその他の鳥たちはもちろん、有害族も動きまわっている。シャモワゾーは、痛ましい記憶のせいで、人類を有害族と名づけるのだ。「[……] 私は、有害族の生息しないどこかの場所と、彼らが至るところに設えたあの鋭利な墓所との違いをつねに感じ取っ

277 *Tracées de mélancolies*, photographies de Jean-Luc Laguarigue, Le Gros-Morne, Traces, 1999.

278 *Les Neuf Consciences du Malini*, op.cit., p. 179.

279 *Ibid.*, p. 86.

280 *Ibid.*, p. 23.

281 *Ibid.*, p. 117.

282 *Ibid.*, p. 34.

283 *Ibid.*, p. 31.

ていた。彼らが近寄るものはすべて変質した。彼らが制作したものはすべて彼らの拡張にしか適していないことがわかった。彼らが住んだ場所はすべて回復不能なほど枯渇していた」²⁸⁴。シャモワゾーの語りの伝達には、独特の型があるが、その系譜に連なるかたちで、小説の最後のページに小さな覚書が記されている。それによれば、語り手はこの寓話物語を、マルフィニ鳥の口から直接採集したという。「兄弟、生きる者よ、私は極限から話している。[……]物語を切望しない苦しみはない」²⁸⁵。少しずつ、もうひとつ別の生き方、風景の新しい捉え方に、マルフィニ鳥は静かに導かれる。一方、フフ鳥は、マルフィニ鳥の存在に不安や敬意を抱くようにはまったく見えない。「私たちは、合図もなければ、言葉にもできないし、言葉で表現されたこともない、そんな距離をたもった共犯関係をもつようになった」²⁸⁶。フフ鳥はあらゆるアラヤから解放され、取るに足らない外観に反して、自己制御と確固とした意志に満ちてはいるが、同類から定期的な攻撃の対象にされる。苦みにも失意にも決して悲しむことのないこの「小さな不可触賤民」²⁸⁷は、同類にあざけられても、天候の猛威に襲われても、「暗く、厳かで、苦い塊」²⁸⁸であるマルフィニ鳥と同じく陽気で決然としているために、徐々にマルフィニ鳥の「小さな師匠」となり、やがてその師匠になる。ちっぽけな鳥が「生きる知恵」²⁸⁹となり、その後を猛禽類が追うかたちで、二羽の鳥は一緒に、どんな緊密な連関が世界のさまざまな部分を結びつけているのかを探り、理解する旅にでる。二羽の鳥が徐々にお互いの眼で見るようになることが、フフ鳥が発揮する並外れた抵抗力と同じほど、小説が擁護しようとする核心部である。フフ鳥は、虫のように小さな身体をしているが、それに反比例して環境破壊と勇敢に戦うのだが、この破壊はラビュション地区の周辺にあらわれ、その後は鳥全体、さらには鳥を越えて拡がってゆくのだ。フフ鳥はまさに最後の〈戦士〉であり、「緩慢な死」²⁹⁰の進行、世界の精気の枯渇と汚染に対抗するために、「平然として遠征」²⁹¹をおこなう。フフ鳥は、ラ・フォンテーヌの寓話の伝統をまっすぐ受け継いだものであり——「ひとはしばしば、自分より小さなものを必要とする」²⁹²——、生きている

284 Ibid., p. 89.

285 Ibid., p. 18.

286 Ibid., p. 117.

287 Ibid., p. 75.

288 Ibid., p. 209.

289 Ibid., p. 121.

290 Ibid., p. 144.

291 Ibid., p. 183.

292 Jean de La Fontaine, « Le Lion et le Rat », *Fables*.

者が自己の維持のために絶対に必要とするあの限りなく小さな力、人種や身体の大きさという先入観に結びついた平板な明白さなどものもしない力なのだ。猛禽類は、始めは疑いに耳を貸さず、さまざまな確信に満足していたが、「果てしなく質問攻めにする民」²⁹³を前にして、王様気取りの態度を段々と保てなくなる。フフ鳥の振る舞いを見ていると、面くらい、「絶え間ない問いかけ」という健全な病がゆっくり染みこんでくる。「胸をえぐる傷口に、私は宿る」²⁹⁴と、『帰郷ノート』の詩節を思わせる、セゼールのような調子で²⁹⁵、鷲は打ち明ける。こうしてマルフィニ鳥は、フフ鳥と群鳥の旅に、「島から島へ」²⁹⁶の旅を始める。それは征服とは対照的な旅であり（「私たちは、何も探していなかったために、あらゆるものを発見した」）²⁹⁷、共感覚のような絡み合いを学び、「無限の歓待」²⁹⁸を目の当たりにする。いくつもの海を渡りながら、猛禽類は「領土なしに存在する」²⁹⁹という重大な試練に直面するだけでなく、自分の捕食本能から距離を取るといふ困難とも対決する。「原初の諸力のただ中で」、フフ鳥はほとんど「神」³⁰⁰の域に達していて、アニミズム文化の父祖伝来の神話をふたたび活性化し、人間と動物と樹木の共生が、太古の聖性を帯びるようになる。

しかし、二羽の鳥の周囲で、獣たちは衰弱し、世界の「見えない網の目」³⁰¹には解体のおそれがある。生き物をほとんど感知できない仕方と蝕むような何か、思いがけない徴候、意地の悪い変調としてきざしてくる。その前兆を渡り鳥が運んでくる³⁰²。

うるさく鳴きながら魚を狙う輪のなかで、鳥たちは錯乱した話を交わし [……]、絶えず溶ける氷の断崖に言及した。樹々が正気を失って、風を受けてぐらぐらしはじめたこと、風がどこからともなく奇妙な軌道に乗って吹くことなどを話した……。季節が転げ落ちるように進ん

293 Ibid., p. 161.

294 Ibid., p. 222.

295 『帰郷ノート』よりも、「海藻暦」と題された詩の冒頭の一節「私は聖なる傷に宿る」をむしろ想起させる（生前最後の詩集『私、海藻』所収）。この詩はエメ・セゼール『ニグロとして生きる』（立花英裕・中村隆之訳、法政大学出版局、2010年）に引用されている。〔訳注〕

296 Ibid., p. 104.

297 Ibid., p. 105.

298 Ibid., p. 171.

299 Ibid., p. 47.

300 Ibid., p. 96.

301 Ibid., p. 69.

302 Ibid., p. 112.

だり、あまりに遅く訪れたりすることを話した [……]。自然の怒りは記憶にないほど高まっていて、何世紀もの習慣を変えてしまい、世界はいま叫びを挙げているのだと思わせるほどだった……。

前兆を示している黙示録を押さえ込むため、フフ鳥は予防策を講じ、生態系エコロジー保護の行動を起こす。この作家の分身は、極度に用心深いのが、生態系の調査に不意に乗りだし、手始めに「[昆虫の] 死骸の場所と花々との相関図」³⁰³を作成することで、緩慢な死の謎を解明しようと試みる。フフ鳥は、「生き物のはかり知れない絡み合い」³⁰⁴の複雑さを理解し、「花を咲かせる生命」³⁰⁵が涸れてしまった地区に懸命に種を蒔き、翼に花粉を乗せて根気よく運んで散布し、「花粉交易」の重要な仲介者となるが、その必死の散布に反して、生命の衰弱は避けがたく、麻痺状態に次第に陥ってゆく。そのような麻痺には絶対に逆らわなければならないのだが。「目を引く有用性」³⁰⁶がなく、絶えず継続されるこの儀式こそ、この小説で生命に不可欠の儀礼にまで高められものである。ここでは、サン＝ピエールの熱雲、奴隷制の陰險な野蛮さ、「沈黙の支配」への警鐘は、有害族の手で毒された自然の破滅に置き換えられているのだ。

『マルフィニ鳥の九つの良心』は、円熟期の小説なのだろうか。言葉のクレオール的大胆さはこれまでの作品に比べて弱まっているし、表現の官能的な力もまた和らいでいるように見えるが——小説の結末部では、フフ鳥の例にならって、マルフィニ鳥は「愛の熱狂」³⁰⁷さえも諦めている——、この主題の伝統的な描き方に比べれば、作品は疑いもなく高揚とめまぐるしい展開を示している。教訓話のようにみえる、この深い洞察力にみちた哲学的余談のもっとも重要な場面は、消費主義の破滅的なむなしさと、世界のざわめきへの積極的な凝視、そのざわめきに溶けこんだ凝視とでも呼べそうなものとのあいだの静かな闘いである。それは本能に対する意志の勝利と、自己制御の獲得を意味する闘いであり、それによって作品は、人間の節度への支援、非暴力の賛美となる。そこでは、世界への敬意を学ぶことは、自己修養と不可分に結びついている。マルフィニ鳥は少しずつその食欲を節制することを学びながら、そう

303 Ibid., p. 142.

304 Ibid., p. 120.

305 Ibid., p. 138.

306 Ibid., p. 206.

307 Ibid., p. 223.

することで精神の鋭敏さを得る。「自分の身ぶりから本源的な有用性を断つ」³⁰⁸ ことの習得は、本能の連鎖の切断とまったく同じく、宇宙を分かちもって存在する、世界に存在するという意識のうちにさなれる根本的な禁欲であり、それはフフ鳥の取り入れたガンディー的平和主義と同じものである。粗食、「敬虔な儉約」³⁰⁹ に対するこの崇拜は、脱成長の理念にきわめて近く、環境保護派としてのシャモワゾーの人間主義が十全に刻印されている。粗食への崇拜はこの人間主義の必然的な帰結なのだ。それは同時に、『高度必需品宣言』の美学的・政治的要求、〈美〉がもたらす快樂とも結びついている——「美が感受できない毎秒は、私には恥ずべき浪費となった」³¹⁰。またフフ鳥のあの絶え間ない受粉行為が象徴しているものにも、『マルフィニ鳥の九つの良心』の哲学的教訓はふくまれている。フフ鳥は、おそらくクレオール化の生きた寓意以外の何ものでもなく、「いくつもの〈与えるもの〉」³¹¹、つまり多数の父から生まれた、雑種の被造物だ——この雑種性という形は、シャモワゾーの名前の成り立ち自体と無関係ではなく、『学校への道』の語り手は彼の名前の複合的性格をからかいながらこう述べている。「彼の名は、ほら、何といったか、いろんな動物の、猫とか、シャモワゾー鳥とか、シャモワゾー駱駝とか、それに家禽とか骨で一杯の名前だった」³¹²。フフ鳥というほとんど見えない小さな被造物は、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの『星の王子さま』のように、誰も見ていないものを見ているが、この鳥のおかげで、シャモワゾーは、世界への鋭い意識を具体的に表すことができるが、マルフィニ鳥のほうは、どうやら人間の病的な側面を象徴していて、定期的にひとを打ちのめす根深い憂鬱な気分、「陽気である」ことを受け入れることへのためらい、抑えることのままならない残虐な欲求という思い上がった態度などを表している。

フフ鳥の絶え間ない行き来と興奮はまた、言ってみれば、作家の考える書き方の理想を比喩的に伝えている。シャモワゾーは、『テキサコ』のマリー＝ソフィーを介して、気がかりな問いかけをしている³¹³。

オワゾー・ド・シャム
シャムの鳥さん、こんな文章ってあるものかね、語られたことと沈黙

308 Ibid., p. 55.

309 Ibid., p. 174.

310 Ibid., p. 177.

311 Ibid., p. 38. 原文は強調。

312 *Chemin-d'école*, op. cit., p. 54.

313 *Texaco*, op.cit., p. 413 [『テキサコ』下巻、前掲、182頁]

に通じていて、それでいていつまでも生きていて、円を描くように動きながらいつでも循環していて、かつて書かれたことを絶えず命で潤して、それからちょうど螺旋みたいにその円を毎回創造しなおすような、そんな文章が？ そう、その螺旋っていうのは、いつでも未来と以前との両方のうちにあつて、絶えず一方がもう一方を変化させながら、でもいわく言いがたい統一を失うことは決してない、そんな螺旋なんだ。

二〇一一年と二〇一二年に出版された二つの最新作において、自己の充実を不断に探求する思考は、その歩みをさらに深めている。『蝶と光』は、「生まれたばかりの」孫娘ノエミへ捧げられた哲学的童話であり、〈認識〉をめぐり夢想というかたちを取りながら、『マルフィニ鳥の九つの良心』によって開始された秘儀伝授の冒険をつづけている。「みずみずしい羽」³¹⁴をもつ若い蝶は、おびただしい眩惑から身を守る術を身につけた〈長老〉の弟子となり、世界の教えへと接近する。それは「いちばん深い闇の中心にこそ、光は保たれている」³¹⁵という、『クルソーへの足跡』の最後で明かされた教えである。

『クルソーへの足跡』は「理解力をもつにいたった」³¹⁶人間を、島の境界と対決させるという実験である。シャモフゾーのロビンソンは、デフォー、さらにはトゥルニエの傑作 [『フライデー、あるいは太平洋の冥界』] の書き換えであり、彼らの言葉とバルメニデス、セガレン、グリッサン、ファノンの言葉を、扉のエピグラフに掲げながら、起源の不在、さらに〈他者〉との関係をめぐり思索を深めている。「この一部であり、この一部でないという困惑、外側から脅かされ、内側から襲われるという困惑」³¹⁷に関する思索。小説の当初の図式が、ここでは根源的に改編されている。ここに登場するのはもはやフライデーでなく、「ディマンシュ」[日曜日]であり、ロビンソンのもう一人の自己にほかならない。それはロビンソンと人びとが考える人物にまだなっていないロビンソンである。内面の日記として構想されたこの物語は、「強迫観念的な土地測量」³¹⁸と島の支配を次第にあきらめた自己が、それまで見たこともない自己となって「堂々と闖入」し、混沌と大波乱を引き起こすさまをたどってい

314 *Le Papillon et la Lumière*, Paris, Philippe Rey, 2011, p. 12.

315 *L'Empreinte à Crusoe*, Paris, Gallimard, 2012, p. 230.

316 *Ibid.*, p. 219. 強調は原文。

317 *Ibid.*, p. 29.

318 *Idem*.

く。かつて独房がもう一人のカロリーヌを生みだしたように(『独房の日曜日』)、島は新しいロビンソンを生みだすのだ。内的な波乱を生じさせるのは、ここでは「この世の先史時代からやって来た」³¹⁹ 足跡であり、それについて考えることで、「今までこの島で好き勝手に振る舞ってきた現実に」恐るべき「亀裂」³²⁰が走るのを、ロビンソンは意識するようになる。自分が今まで「この島の全知の管理者、比類なき偉大なる文明化の促進者」³²¹以外の何ものでもなかったということ、彼はその時理解する。衝撃ははかり知れない。「私は見知らぬ土地で暮らしていたのだ」³²²。物語の息を切らすような書き方、「エネルギーの渡し守」³²³であるセミコロンによって惜しげもなく息継ぎがなされる、ながく途切れない文章は、羊皮紙の伝統を引き継いで、創造的な接合をおこなっている。日記作家は、写生字となったロビンソンにもなるのだが、このロビンソンが書き写すのはバルメニデスの『詩のなかの詩』とヘラクレイトスの未完の断片である。この入れ子構造によって、ロビンソンは火山島の寓意となる。ギリシャ的思考は、「高邁な人間性」³²⁴を表す作品を前にした究極の衝撃のうちに、彼を揺りうごかし、震わせる。

シャモワゾーのそれぞれの書物は、歴史、道徳、人間、記憶、言語、文化、生態系の変調のなかにわれわれを投げいれるが、シャモワゾーの作品そのものは、「調子外れの接合点」、どこまでもつづく不平等の真上につねに位置している。数々の絶望に注意を凝らしながら、彼の作品はさまざまな〈石-世界〉^{ゼーブル・モント}を訪れ、いくつもの深淵、独房、熱狂する都市に足を運び、呪われた場所、語られることのない場所の封印を吹きとばし、小さな生命が身を寄せ合う漂流の旅を小声で語る。彼の作品が、生きとし生けるものの生成変化、調子外れに害をなすようになった人間の役割をめぐる問いへと高まっていくのは、おそらく、

[……] さまざまな物語は、世界の解読できないものを包み隠すことにしか役立たない

319 Ibid., p. 217.

320 Ibid., p. 133.

321 Ibid., p. 147.

322 Ibid., p. 148.

323 Ibid., p. 240.

324 Ibid., p. 175.

からである。シャモワゾーが強調するように、「どんな身ぶりをする時にも、ある倫理の明確な発端にとどまるようにふるまう」ことに執着しなければならない³²⁵。

325 *Les Neuf Consciences du Mallini*, op.cit., p. 225, 60.

アンソロジー

- 『七つの不幸の年代記』(1986)
- 『ソリボ・マニフィック』(1988)
- 『テキサコ』(1992)
- 『奴隷の老人とモロス犬』(1997)
- 『支配された国で書く』(1997)
- 『カリブ海偽典』(2002)
- 『第二世界の都市の手帖』(2002)
- 『幼年期の終わり』(2005)
- 『独房の日曜日』(2007)
- 『マルフィニ鳥の九つの良心』(2009)
- 『クルーソーへの足跡』(2012)

『七つの不幸の年代記』

「負けっぱなしの荷運び屋」である主人公ピピは、ベケの財宝を埋めた後に主人に殺される「奴隷ゾンビ」アフカルから、かつての奴隷たちの記憶を受けとる。その記憶はピピの寝ているあいだに「十八の言葉」として姿を変えながら現れる。以下はそのうちのいくつか。

その3

ピピリ鳥よりも早く、奴隷頭は呼び子を吹く。その鞭はバシッバシッとよく音を立てる。遠くでは大農園の教会の鐘の音が響いている。会計係の点呼のリズムに応じて、眠くてまだ身体が思うように動かないまま列をなす。こうしておれたちはようやく祈りの文句を口にして粗末な食事にありつくのさ。[……] 貧しさとか悲惨さとかを想像しちゃならないよ、〈生きる〉なんてこれっぽっちも必要ない、見事につくられた反射神経があるだけ。[……] 苦しみなんかじゃなく（苦しみは絶対的なものだから、日常の言葉では話せない）、放心のゆるやかな眩暈があるだけ。正午になると、よぼよぼの婆さんに連れられて、塩漬け、茹でたバナナ、マニオク、タフィア酒にありつく。おれたちは食べながら暑くなり、言葉が高揚してくる（サトウキビ畑で育った新しい言葉だ）。すると身体は苦しみで動きが取れなくなる。両手はずきずき痛む、あの意地悪な葉っぱがつけた傷が歌いだすのさ。鞭か呼び子をもった奴隷頭は、仕事の再開を告げる。そうしておれたちやサトウキビ畑に夜の肛門が開くまで呑み込まれるのさ。考えてもみろ、これが数限りなく繰り返される。どこからともなく切りつけてくる葉の刃を受けたり、蛇が差し出す毒がまわって死んだりして、おれたちはゆるやかな溺死の運命を受け入れるようにして毎時間の死を受け入れているのさ。

[……]

その9

〈神〉。〈三位一体〉。〈贖罪〉。〈永遠〉。謎に包まれた言葉で、上陸の日にそ

う告げられた。ある老人が朝も晩もこれを繰り返していた。その白人の司祭は毎日曜ミサの素晴らしいお話の前に、説教のなかでこの言葉を使うのだ。[……] 復習教師の老人は洗礼のときにおれたちの代父をしてくれた。片手をおれたちの肩の上に、犠牲のヤギの角に乗せるように置いて、その人はおれたちに付き添ってくれた。おれたちひとりひとりの洗礼を済ませることで高まる恩寵の照らしを受けるのはその人自身だったのさ。夜になると、神父の求めにしたがって、ダンスと夜話コントの集いから引きあげ、小屋に引きこもり、自分自身に黙って耳を澄ませ、白人たちがいまや所有しているとおれたちが確信している、彼らの魔術的力が覚醒するのを待ち焦がれていた。おれたちはこの新しい〈神〉にすっかり身を委ね、〈神〉からその白い力を奪いとり、この生活、この土地、この途方もない歴史を理解することを願っていた。朝になると復習教師の老人は、この土地の神に導いた魂の数のせいでも立派になり、死ぬほど酒を飲み、痩せこけた老体に鞭を打って踊り、さらには十本の剣の刃に向かって飛びかかっても一向に傷つかないのだった。しかし、おれたちは、この洗礼におびえ、飼ひ慣らされた神、いまや少しはこちらの影響を受け、主人を打ち倒すのを手伝ってくれそうな神と夢のなかで出会えるような眠りを求めていたのさ。いいかい、おれたちには知る由もなかったんだ、この神が自分の領土を支配なんかしていないということ。主人はこの神を恐れていないということ。いつものどこかの鉄犬が連れてるダニと一緒になんだ。こんな騙し話はもう通用していないだろう？

その10

おれたちは船から疥癬、壊血病、赤痢、天然痘をここに持ち込んだのさ。やつらはおれたちをマスタード、酢、レモン、スカンポの煮汁にしみ込ます。やつらは心底おれたちのハンセン病、狂気、癩癧を恐れていた。もつとも古い競り市場を突如として壊し、病気の近親者全員の価値を下げってしまうからさ。だが、象皮病、どうしても赤土を求めてしまう嗜好、顎の病気、発熱、砂ノミ、ノミよりも、下疳、潰瘍よりも、性病、ひどい頭痛、容赦なき下痢、シャム病〔黄熱〕よりも、不幸の突つき棒で正確無比に命の枝からおれたちを摘み取ったのは、心痛だったのさ。大工の葉〔学名ジュスティシア・ペクトラリス〕、唐胡麻油、サゴでんぶん、クジラの脳みそから採れる世にも稀な油、タチアオイの軟膏、トモシリソウの水、鎮痛剤ワイン、やつらの聖なる薬箱

のなかの皇帝丸葉、辰砂、水銀の蜜、リサージ、吐葉、アヨー粉、無数の煎じ薬用のシオデ、テリアカだって、おれたちの長老が持ちこんだ旧来の薬草の知恵には対抗できなかった。

[……]

その11

女たちは腹の外に命をまるごと押し出す術を昔学んだのさ。女たちが強縮するように命じる。するとたくさんのちびの生が広く高いところに向かって運ばれるのさ。女たちはじっと動かさず、視線をさまよわせ、命の羽をかきむしっていた。その様はまるで苦い波の上に傾くあのココヤシの木のようなのだが、女たちはそのとき、ココナツの房のことなんか考えたくはない。わかるかい、自分の肉体を殺すのに、どれほどの絶望と愛が必要かってことを？ おれたち男は、女のかたわらで自分だけの不幸と闘う。二倍も恐ろしい女の苦しみのことなんかまるで気かけないで。おれたちは毎晩一人の女をひっくり返した。女の腰を砕いて、いちばん強いため息をつかせようと試みた。腰をつくたびに、おれたち自身の命は強くなり、ほんの少し背筋を伸ばし、それから、本物の犬となって、季節を待つお腹という限りない絶望と一緒に女たちを見捨てるんだ。愛された命、おそらく拒まなくてはならない命が、九ヶ月間つづく拷問。地面に落ちたマンガーよりももっとうまく女たちをくすませる、あの孤独な劇が終わるまで。生み、小屋の闇とと突如開かれた魂の深淵のなかで殺さなければならぬんだ。いいかい、おれたちはそのとき、いつだって女から離れ、のんきにタフィア酒を味見して、陽気なダンスをやってみるのさ。女たちはそんなおれたちの振る舞いを許してきたと思うかい？

その12

民話の夜、おれたちは断崖に身投げしたカリブ族のことを話していた。海はもっとも美しい墓を、彼らの前に開き示していた。奴隷制の番犬たちをまく見事な踏み分け道！しかしおれたちは沈黙を維持していた、おれたち自身の死への跳躍をうまく思い浮かべるために。奴隷船に乗るとすぐ、上陸するとすぐ、最初の小屋に入るとすぐ、収穫期の真っ最中に行われる死への跳躍を。知ってるかい、ある仲間、自殺のとき、髪が真っ白になっていたことを。知って

るかい、自分の舌を呑みこむには忍耐も力も必要だってことを。おれたちは死者を数えていた。その亡霊の大群は、ここの白人連中ひとりひとりに対する残虐な復讐の機会をうかがっていた、故郷に帰る路銀としてね。待つあいだ、植物のことなら何でも知っているあの薬草ハバハバ=フイユの達人たちが、農耕用と二輪荷車用の牛、羊、風車用ラバに毒を盛ったものだから、農園全体が、甲羅のない蟹のように拍子外れなリズムで歩いていた。

[……]

『七つの不幸の年代記』ガリマール社、1986年 [1988, p. 152-157, 161]

『ソリボ・マニフィック』

語り部ソリボ・マニフィックは、突然「言葉で喉を詰まらせ」で死んでしまう。それはちょうど語り部が〈言葉の達人〉の儀礼にしたがって、聴衆に自分に答えるよう呼びかけたときである（「エエ、クリイ？／エエ、クラア！」）。太鼓叩きのシュセツ、太鼓と一体化して民話^{ユント}にリズムをつけるシュセツが、彼に連れ添っていた。以下の抜粋は、彼らのパフォーマンスが相乗効果を発揮して、アンティル社会の口承性の文化的鍵となる瞬間を示している。

[……]

アン！ ソリボ・マニフィックはくるとまわり切って姿をあらわした。濃い口髭、あごの先には簪のようにとがった髭をもち、黄色く赤いその眼はタフィア酒飲み^{タフィア}の達人の証だった。白いナイロン地のワイシャツには、なんと金色のカフスと、銀色の袖がついていた。ひどくすり切れたテルガル地のズボンは、エナメルのサンティアゴ靴の上にびったりと垂れていた。要するに、ソリボは自分の名前のもう片方マニフィック〔「素晴らしい」の意〕の名に値した！……彼は帽子を持ちあげ、聴衆に挨拶した。皆の衆、「今晚は」と言うのは、屋間じゃないからで、「お休みなさい」と言わないのは今夜は白い夜〔眠れない夜〕になるからさ、不吉な土曜日の板豚〔板のように痩せたカリブ海の豚〕のように白く、砂糖キビ畑の真ん中を、お日様もないのに日傘を差して散歩するベケもかなわないほど真っ白くなるからさ、エエ、クリイ？……

「エエ、クラア！」と連れ添いは答えた。

アロージドル

すると、遠くのざわめきが静まった頃に、〈言葉の達人〉は、薬の効かない熱を聴衆に感染させながら話をした。大事なのは言われたことを理解することではなく、言われたことへ自分を開くことであり、運ばれるがままに身を任せることだ。なぜならソリボは演奏家〔アレクサンドル・〕ステリオが息をぐっと吹き込むクラリネットのソロよりも曲芸的に喉で音を出すからだ。ソリボの声は夜通しとどろいた。言葉の達人に自分たちが眠りこけてないことを示すのに、聴き手は力いっぱい「エエ、クラア！」と答えた。「ミスティクラア！」はラテン系オーケストラの楽隊の通過のように響いた。空が白くなり靄のかかった風が夜明けを告げる頃、ソリボ・マニフィックは言葉の方向を変えるときにしゃっ

くりをした。それから、皆さん、どうしてなのか、どのようになのかは分からないが、「パタトサ！」と彼は叫んだ……。 (「パタトサ！」はクリッククラックの応酬のなかにはない。語り部は「エェ、クリィ」と言って「ミスティクラァ！」を求めたり、「聴衆が眠っていないか」を確かめるために「スゥブレ？」と問いかけたり、タフィア酒や太鼓のリズムを求めたりするが、けっして「パタトサ！」と叫ぶことはない……。) にもかかわらず、この苦しみの叫びに対し、聴衆は「パタトスイ！」と答えたのだった。へまをする一番の候補者は、いつも羊の群れのなかにいるとは限らない、引っ張るほうが失敗することだってあるのだ。

彼は喉を詰まらせたまま木の根元に倒れ込んだ。見開いた眼差しは民話の^{コント}高揚を追いかけているように見えた。片手を喉にあて、もう片方を顔のあたりに上げ、汗がしたり落ちるあいだ、幸福を目の当たりにしたニグロの老人のようにぼう然としたままだった。いま、時間が経ってから考えてみると、確かにタマリンドの木の葉はざわめいていたし、コウモリはシュセットの松明を三回かすめながら私たちに警告していたのだ。にもかかわらず、聴衆は、不衛生な足裏に寄生する犬の砂ノミのように屈託がなく、我慢強く待っていた。ちょっとでも喉が渴けばラフィア酒の大瓶がまわってくるし、太鼓叩きはこれが〈言葉の達人〉の即興の物まねだと思っていたので、それを元気づけ、太鼓から空洞のレウォズの音を引きだしていただけに、待望の気分はますます盛り上がっていた。うつろな眼をしたまま、シュセットは自分の肉体を離れ、〈カ〉に全霊を捧げたか、さもなくば〈カ〉のほうが彼の腹から芽吹いたのである。ぶるっとひとつ身震いして、男は溶けて小樽になった、そしてシュセットの身体は、子ヤギの草と同じほどくぶんぶふうなった。口は静かに、太鼓の響きを反芻していた。踵は音を刻んでいた。太鼓叩きが隠しもつ、第三、第四の手を彼は用いていた。それらの手はくるくると回転しながら山びことなり、結晶質の破片となり、乾季の踏み分け道のふくらんだ土のうえを早駆ける命となった。それは聞く術を心得ている人びと（この現象を前にして、奔放な解釈ができるようになった人びと）に、ラム酒の音色をもった、超人間的だがなじみ深い声の響きを伝えていた。「おお！ シュセットがそこで喋っている……」

[……]

『テキサコ』

以下の抜粋は、一九五〇年代、テキサコ地区に寄港した石油タンカーから出てきた船員の上陸を語っている。船員と地区住民との一時的な、定期的に刷新される出会いは、カリブ海が提供する強烈な喜怒哀楽の物語と、この海を舞台とした悲劇の歴史が語られる機会でもある。

[……]

どのタンカーにも、多かれ少なかれ騒々しい船員の一行が乗っていた。この悪党どもは船が動かないあいだ、街場に繰り出したりブローローニュの森の縁あたりで商売女たちに会ったりしていた。連中は山ほど銭を使い、七つの国の言葉を話し、九つの不幸を持ち運び、映画館でメキシコ人みたいに酒を飲み、アルコールの火で灰になってテキサコにもどって来る。そうしてみんなに心のうちを開き、カリブの海で出くわしたいろいろなことを語りだしてみせる。連中は鼻先まで金を積んだ例のガリオン船のことを物語る。クラゲみたいに透き通って、タンカーを横切りながら苦い海藻の匂い、傭兵の歌、舳先の柱のところの窓にちらっと見えるご婦人たちの笑い声を立ちのぼらせ、窓から漏れ出る音楽の陽気さには涙を誘われる、そんなガリオン船の話。船の航跡に現れる、珊瑚のように白くて薔薇色をしたあの鮫たちのことを物語る——何世紀ものあいだそうしてきたような顔をしながら大口をかちかち鳴らして奴隷船のまわりを回って、船がその積み荷をみんな自分たちのほうに放り投げるものだから、魂たちのざわめきにあってられて、この鮫どもはアフリカの十三の言葉で苦しみを綴り出すんだ。(酔った船乗りたちが言うことには) 墓場みたいに夢を見るこのカリブの海は、悪夢に憑かれている——深海が石油タンクにつながっていて、海底の夜のなかに流されていった幾百万の人間の聖歌^{ネボンナ}を鋼鉄に宿らせ、その人波はアフリカを思い出しながら、鎖と鉄球で覆われた恐ろしい絨毯になって、鳥々を屍体の契約で結んでゆく。連中は年月の照り返して年代物の象牙みたいにオパール色になった「サンタ・マリア号」の舳先に立つクリストファー・コロンブスを物語る——この船はアズテカの民、インカの民、アラワクの、カリブの民の塵を、言語の、肌の、血の、崩壊した文化の灰を、そう、〈新〉世界とかいう世界の農園という農園に仕掛けた広大な侵略の塵を結晶にした船なんだ——永遠の昔から、彼がやってくるずっと前から、見通

すことのできないインドを前にして舳先に凍りついている〈発見者〉を、幽霊たちが裁いていた、裁いていたが無駄だった、なぜならこの〈不吉なる者〉は、際限なく眩きつづける破目になった取り返しのつかない物語に赦してもらったかのように、いつも幽霊たちから逃れてしまうんだ……そんな話すべてが、タンカーの船員たちをますますうんざりさせ、頭を狂わせ、ますます引きつらせて、テキサコでの私たちのちっちゃな悪夢の数々を汚染していった——ああ、悲しいけれど兄弟、私は身に沁みて感じていたんだよ、やつらが私たちの家を通してゆきながら呼び起こしていたあの恐怖の数々は、私たちにも住み着いているんだってことを。

[……]

『テキサコ』ガリマール社、1992 [1994, p. 442-443]

[『テキサコ』下巻、星塾守之訳、平凡社、1997年、216-218頁]

『奴隷の老人とモロス犬』

メートル＝ベケ
〈白人主人〉は、逃亡奴隷を追跡するモロス犬の後を追ひ、〈大森林〉の容赦なき濃密さと相対する。そこで、彼は両義的な感情に襲われ、自分の置かれた極度の孤独、精神の退廃がどれほどのものであるかを感じる。この「頭のなかの嵐」は、奴隷の主人の心のなかへ、著者が私たちを入り込ませる希有な一節のうちのひとつだ。数々の著名作家（ボードレーやサン＝ジョン・ペルスなど）への言及がなされている。

[……]

彼にはわからなかった。この土地を開墾し、未開人どもと対立し、あのニグロ連中の面倒を見て、野蛮人どもにプランテーションと砂糖精製の知恵という美を授けるために、自分がどれだけ闘ってきたことか。彼の人生は、勇気と苦しみ、仕事と疲労、高ぶる精神と安寧を知らない心の連続、ただそれだけだった。それなのに、極度の疲労にもかかわらず、〈主人〉はよく眠れなかった。大いに発揮してきた勇気や、力強い建設者としてのヒロイズムとは無縁の、心を掻きみだす恥辱が自分のなかにあることを見破っていた。この感情を書物が明らかにした原罪のせいにしたこともあったが、ミサは何ひとつなだめてくれなかった。告解も無駄だった。恥辱の感情は、言うに言われぬもの、口にだしてはならないもの、見えないもの、打ち明けられないものに巻きついたままだったが、それらが何であるのか彼にはまるでわからなかった。彼は自分に誇りを抱いていたが、この誇りは、ある時刻になると、大道芸人の衣装のようにはがれ落ちるのだった。これらの木々と場所の真ん中で、彼は一人きりであり、ずっとしがみついていた英雄的精神にはもはや大した重みはなかった。征服者の巨大帆船の数々を——それは避けられない定めだ——彼は操縦した。猛り狂うカリブ族に対して砲撃を見舞った。命を落とした友人兄弟をランビ貝の下に埋めた。オウムを仕留め、^{ラマンタン}マナティーの油を燻し、砂浜を走るツグミの卵を丸のみした。かの地を焦がれて流涕の身を嘆き、擦りきれた思い出となくした手紙に涙した。タバコとインディゴ、それからサトウキビを植えた。ニグロを護送するために船を改造した。ニグロを売った。ニグロを買った。ニグロには、彼の人種のなかでも最良の境遇をあたえた。石造りのどこよりも高い壁を建て、偉大な者たちが眠る大理石の根城とゴチックの穹窿を築いた。そ

れから錨泊地の鏡のなかに白い街を建設した。それから混血女の髪の上にくつもの港を作った。湯気を立てている土地を開墾し、火山が吐きだしたいくつもの川を治め、泉の小天使の夢想を妨げる蛇を追い払った。大きな小屋を薄明と粘土でこしらえ、水車を築き、精糖所を建てた。役に立つ道を通し、十字路の印をつけた。アルコールの秘密と生きる喜び（たなびくレースをつけたつばの広い帽子を被り、真っ白な腕をした、透き通るように白い女性のそばで）を追求した。マングローブ林と傾斜面では、もっとも肥沃な畑から恵みを得た。一度も泣かず、自分の行為を聖なるものとする正統な神を疑うことはけっしてなかった……。オオ、ソレナノニ孤独ダ！……年を経るごとに強まるこの沈黙。数々の勝利の影にあるこの孤独という毒。自分の歩みを解体してしまうこの運命。逃亡行為を根絶するために〈大森林〉について語る^{ホスチア}ことが、いまや彼にも宿っていた。〈かつて〉を知り、過ぎ去った無垢の聖体を隠し、始原の力でもなお震えているこの〈大森林〉が、いまや彼の心を動かしていた。〈大森林〉はすでに逃亡奴隷たちを魅了していた。逃亡奴隷たちは、母親の腹のなかのように、この森に身を匿っていた。畑の溝に落ちるより、ここで死ぬことを望んでいた。ひとが大聖堂を凝視するように、逃亡者たちは木々を見つめた。木々にうやうやしい尊敬の念を示した。すると木々は彼らに話しかけるのだった。〈主人〉のほうは、木々を悪意で飾り立てた。ゾンビの巣窟、悪魔の巣窟、熱の巣窟、神隠しの巣窟！……。こうした嘘は彼の心中に予期せぬ仕方であっていた。〈主人〉はいまそのことを感じていた。〈大森林〉は力強かった。〈大森林〉は力づくで、あるいは不幸を呼び起こして、ひとを裸にした、むきだしの堪え難い状態にした。森の影に包まれながら、〈主人〉は恥辱に圧倒された。彼は恐ろしかった。開拓者として振る舞うのに躊躇していた。征服者としての足取りは震えていた。引き返してはならなかった。自分の周囲に視線を投げてもいけなかった。空から降ってくる光の柱を見つめてもいけなかった。自分の犬に執着しなければならなかった。死ぬまで犬の後を追っていくこと。この犬だけが、彼が生き延びるのを可能にするだろう。こうして〈主人〉は苦行の道を歩くのだった。

[……]

『奴隷の老人とモロス犬』ガリマール社、1997 [1999, p. 103-106]

『支配された国で書く』

「あの粉々に砕かれた人々」つまり奴隷たちを「結びつける」には、〈語り部〉が不可欠だ。以下の一節は、この知られざるオーケストラの指揮者への讃歌として読むことができる。彼こそ、奴隷制の力づくの支配に最初に抵抗した者の一人だった。

[……]

すると、最初の〈語り部〉が〈農園〉に現れた。踊り手と魔術師ニグロの延長線上に。

私には、彼の最初の言葉が聞こえてくる、疲労するほどエネルギーが積み重なってゆくダンスの夜のあいだ、あるいは、マニオクをすりおろすあの通夜の集まりで。冗談が自然にでてくる。皮肉が効果を発揮する。〈白人たち〉をみなばかにする。〈主人〉をばかにする。自分をばかにする。突然、私があのおちっぽけな力をうまく捉えてそれを伝えると、今度は私が〈語り部〉となる。手始めに笑わせる、笑いだけが不足しているからだ。仲間を楽しませ、さまざまな状況を把握し、これを結んだり解いたりし、狡知や機転を走らせ、支配的な道徳を消滅させ、言葉の意味を偽装して、話を聞こうとする〈主人〉の裏をかく。通夜のさいには死者たちのそばに立ち、始めるべき生を知らせるために、悲嘆に暮れるひとりひとりのうちに拒否の火をおこし、戦いを見分け、まったく想像もつかない勝利がありうると、そうした話をでっちあげる。

〈主人〉はひっそりとしたニグロの集いを好まなかった。危険なものに思えたのだ。歌を、リズムを、遠慮のない言葉を彼らはうながした。太鼓叩きと踊り手を黙認していたのと同様、〈語り部〉が話すのを、彼らはやがて認めるだろう。そして〈語り部〉は、奴隷の酔いの楽しみを巧みにあやつって、〈主人〉を安心させることになる。しかし、私は〈語り部〉として、あわれな微笑みを煌々と燃える皮肉へと高める。その取り乱した疑い深さを押しすすめ、現実の秩序を解体する陽気な懐疑主義に変える。細切れになった夢を、驚異が次々に噴出する場所に運ぶ。牢番の時間を、強いリズムのきいた、螺旋をえがき、渦巻き、あらゆる場所に四散する、砕かれた時間の漂流へと進路変更する。みんなが私の言葉に取り憑いている、カリブ族の幽霊も美しいアラワク族も多

種多様な奴隷も、それだけでなく〈主人〉も、毎年上陸する移民たちも。私は、〈語り部〉として、さまよう声に言葉をあたえる。私の身体は、さまざまな身ぶり、歌、踊りでみたされている。太鼓を呼び、太鼓に話しかけ、太鼓に答える。すると太鼓は私の言葉の束と一緒に飛びたつのだ。私の声は明快さを失って、呪文で麻痺状態に陥れる術を知っている。(逃亡奴隷)のこわばった跳躍を、農園に浸透する、細々とした異端の行為に私は変える。〈主人〉をあまりに崇めることで結局はばかにし、神を恐れるあまり、異教の風変わりな外観を装わせる。勝手に思い浮かぶさまざまな言葉のなかを自由に行き来し、自分を取り囲むさまざまな存在の不可解な姿勢をまねる。人間を動物に、土を水に、太陽を月に、嘘をいくつかの真実に混ぜあわせる、するとあらゆることがあらゆることに結びつくのだ。一人っきりで話しているのではないし、誰かの代わりに話しているのではない。みな声をそろえるなかで、私は話しているのだ。向こうから呼ぶかければ、こちらは声をかけ、支持されれば、問いかけ、先を超されれば、追い越し、囲い込まれば、逃げだし、懇願されれば、言葉を濁し、遠ざかれれば、寄せ集めて問いかける。向こうがさきやけば、即興で答え、向こうが喉が哽れるまで話すように求めれば、逃げだし、向こうが指を鳴らせば、跳んで戻り、向こうが足でリズムを刻めば、地面にしがみつぎ、向こうが手で拍子をとれば、こちらは洪水に吞まれてびしょぬれだ……私は自分を生き生きさせる夢のなかにいる。そして、突如として、理解する。〈語り部〉とは、身ぶりによって元気を回復するこれらの身体に、一緒に話し、一緒に答え、おなじ歩調で歩き、おなじ喜び、おなじ恐怖、全員での逃亡を味わうように誘う者なのだ。松明のほのかな明かりが語り部を囲む震える集いを照らすと、自分が多種多様な声を持ち、さまざまなリズムを刻む身体であると私は感じる。その声のひとつ——気の触れた独唱者——が、身体に宿るすべての声の表皮を作っていると。おお、この薄暗い夢は私に教える——「〈語り部〉と一緒に話しているのだ！」

[……]

『支配された国で書く』ガリマール社、1997年 [2002, p. 184-186]

『カリブ海偽典』

死に際に、主人公バルタザール・ボデュール＝ジュールは、さまざまな身ぶりの思い出を追想している。以下で言及されているのは、あのガルガンチュア的な食欲であり、反植民主義の闘士として、ながい人生のあいだに彼が遍歴してきた世界中のあらゆる場所での、食べ物を見つけるありとあらゆる方法である。

[……]

集まった人々は（すでに最初の攻撃の想起で動揺していたのだが）、いくぶん不安をこめて彼を見つめていた。彼の眼は、それぞれの味が運ぶ思い出、つまりさまざまな光景、香り、手触り、宙に漂う気分、要するに味覚の感興に生涯にわたって沈殿していた、いきか闕下のさまざまな知覚を追っていた。この味覚の感興は無限に続くようで、彼の言い方によれば、そのおかげで彼は誰よりも少しだけ長生きできたのだ。

[……]

子供は、おそらく、父リモレルのもろもろの才能を受け継いでいたのだろう。この種の食べ物しゅの専門家になったからだ。次々に学んだおかげで、それからずいぶん時間が経ってから、世界に身を投じた反逆者は、とても風変わりなやり方でものを食べることができたので、仲間たちを嘩然とさせることになった。彼らの証言はないが、バルタザール・ボデュール＝ジュール氏自身の言葉によれば、彼は植物学者でさえ知らないようなさまざまな小生活圏で栄養を得る知識をもっていた。インドシナでは、暗い森の中で、滋養のある花卉、乳色のキノコ、ほとんど見えない石果、数々の胞子と樹皮を見つけた、と彼は言い張った。そうした胞子や樹皮について、彼はただ匂いを嗅ぐだけでどんなにささやかな効能も特定したのだという。ココナッツ・フランのようなマングローブ林の上質な泥、ビールの味がする灰色のウジ虫、キャッサバのフライのように歯のなかでぱりぱりいう、食用ではない昆虫の羽が好物だった、と彼は言った。アルジェリアの砂漠で、ビジャール將軍の落下傘部隊に包囲された最悪の時、荒れ果てた土地を小刻みに走る小さな白い昆虫をついばみ、自分の部下たちにある種の棘や、感じ取れないほどの水滴の上に転

がる、ごく小さな鱗うろこや小葉の吸い方を説明した、と彼は言った。動く砂丘の奥を、水を求めてどこまでも走る、ほとんど甘い味のする根の掘り起こし方を部下たちに教えた、と彼は言った。マデイラ川では、睡蓮と赤い蔓植物で栄養を摂り、ポリビアで失望を味わったとき、あの優しい混血女と痴呆症のミイラに出会う前には、サボテンの果肉、小さな苔、急流沿いに咲くアサツキで宴会を開いた、と彼は言った。他の場所については、正確な思い出はもはやなかったが、それでも彼の主張によれば、夜花を咲かせ、それ以外の時間は岩石、凝灰岩のなかで青みを帯びた根として生き延びる植物たちのおかげで、彼は死を逃れた。コンゴのナイル川や、マダガスカル島では（おお、生命の聖地よ！）、昆虫たちのゼラチン、繊維質の側根、コブ牛の血、一群のカタツムリとウジ虫を食べた、と彼は言った。相変わらず彼の主張によれば、雑然と生い茂った藪の近くで、生き延びようとして危なっかしく飛び立った翼のある果物と、飛散する花粉の流れを捕まえようと考えたことさえあった。仲間のなかで彼を真似しようとした者たちは、ただちに中毒を起こし、恐ろしい下痢を繰り返しながらこの世から消えていった。[……] そうは言っても、友人たちよ、パンザーニと脂っこいホットドックを食べる者たちよ、おいしい植物のなかで、わしは蘭だけでは食べない。というのも、蘭は飢えとは別次元にあり、心のために、魂と眼のために存在するからだ。蘭は我々に、ひと筋の水、わずかな空気と苔を食べて、それを滋養の力へと変える術を教えてくれる！ 蘭を食べようものなら、生きることの原則を損なうことになる、この世の峻厳な物質のなかに書き込まれ、美として表れた、生き延びるための教訓を破壊することになるのだ！ 植物は蘭を通して考える！ 節約しながらの永遠と、変わらない沈黙という厳かな知恵を、植物は蘭を通して、我々に表現しているのだ……！ [……] 世の始まりの時に戻ったはずなのに、いまや世界の終わりにいた。あらゆるものが、岩、土、木々の上の残り滓でさえ、生きたいというわしの激しい飢えに糧をあたえることができたのだから！…… どのような生命も、わしのなかに入ることができた。あらゆる生命の構成要素、あらゆる動物、あらゆる滋養がわしのなかに入ったが、その錬金術のすべては、さらに他の錬金術と結びつき、かならず自らを豊かにすることができた……。わしは何でも食べる男になっていた！……

[……]

『カリブ海偽典』ガリマール社、2002年 [2003, p. 244-247]

『カリブ海偽典』塚本昌則訳、紀伊國屋書店、2010年、271-274頁]

『第二世界の都市の手帖』

語り手は、とある宿なしがなくした手帖を見つけたが、そこにはさまざまな現代都市の幻覚的な光景が記されていた。憂愁にみちたこの本がわれわれに差しだすのは、こんな凍てついた夢想である。

[……]

私は見た、泥まみれの小路、果てしない路地を、子供たちの民がゴミからゴミへ渡り歩くのを。路地は幾重にも曲がりくねっていて、巨大な迷宮となり、そこではあらゆる無実の人びとがあらかじめ毒ガスにやられていた。子供たちは身体を売り、廃棄物を食べ、死の群れの襲来から生き延びようとしていた。

私は見た、何のしるしも記章もない、魂の渇きにいかなる約束も与えない薄暗い都市を。そこで暮らす人々は自分をじっと見るための大きな鏡もっていた。人びとは名前も顔もない自分たちを見て涙を流していた。彼らは静まりかえった広場と、エンジンの爆発音しか聞こえない集会所に出没していた。孤独と無関心の引き裾が至るところに漂っていた。人々はこの引き裾を横切つて人工の星と機械仕掛けの夢で溢れたカートを押していた。忘れられた神々の騎士になり、狂信者となる人びとがいた。自分のDNAの優秀さを示すようにして、古い言語を振りかざす人びともいた。また、古い伝統を寄せ集め、大聖堂のように積み上げることで、伝統をより一層賛美し、殺戮もいとわない同一性を自分のために構築する人びともいた。こうした人びとを見るたびに、それがいつの時代にもあまりにも多いので、私は涙するのだった。

都市が発展すればするほど、人びとは孤独を感じ、もはや顔もなければ名前もない組織体に、自分が依存し、搾取され、支配されていると感じるようになる。その組織体はもはやどのような理念も掲げていなかった。そのことにまったく気づかない人びとは地下鉄の色に染まり、ショーウィンドーに並ぶ強制されたもので身を飾り、濡れた歩道を照らす無数のネオンの戯れのなかでしか感動と出会うことはなかった。

[……]

都会人は都市を作りだすことなく都市を語り、結局はこの整備された砂漠を創った。その砂漠で新たな蛮族が新たな部族、氏族を探していた。彼らは動物や古びた組織のふるう暴力よりも弱い暴力を用いて探すのだ。タグ、ラップ、ストリートボールによって、都市の周辺にただよう妄想のなかに詰め込まれたこののけ者たちは元気づいた。彼らはさまざまな言語、暗号、絵画、音響、記章を創って、肌に入れ墨として彫り、(いかなる儀礼とも関係なく) 自分の鼻、耳、眉毛、唇、舌、性器に穴を開け、時代遅れのものから粗野な力を引きだすと、この力を高く掲げて澄んだ驚きを引き起こした。彼らの身ぶりはそのどれもが聖なるものを欠いた聖なるものの残滓であり、容赦のない盲信に墮した儀礼のしるしだった。

[……]

『第二世界の都市の手帖』モニウム／パトリモワンヌ出版、2002年 [p. 53-55]

『幼年期の終わり』

〈^{リレー}非現実の女〉はシャモワゾーの初恋の人だ。「クレオールの幼年時代」と題された自伝三部作の最終巻『幼年期の終わり』で、黒ん坊の少年と少女との最初の出会いが驚嘆の瞬間だったことを語り手は回想し、出現＝^{アパリシオン}幽霊の感動的な肖像を素描している。

[……]

ある日、それがいつの週末だったのかは覚えていないが、シレーヌおぼさんの階段で——黒ん坊の少年はそこに座って騎士団の一大苦境について夢想していると——、ある〈人〉が目に入った。すると乗馬見習いの彼の心は、段を数えることすらなく転げ落ちていった……。

ある〈人〉、つまりその〈女性〉は彼女の家の階段の手すりに肘をつき、心ここにあらずだった。熟したマンゴの実のように青白く、髪の色は赤と黄色が半々に入り交じり、瞳はなんとも形容し難く、それらのせいで現実感がほとんどない混血女^{シヤドーズ}。少年はまだ知らなかったが、彼女は五人兄弟の長女で、年長に押しつけられる不快な役目を引き受けていた。つまり、自分自身の人生を何とかするだけでなく、家事手伝いや兄弟姉妹の世話で母親を支えること。王国をもたない女男爵^{バロンズ}のようなものだった。彼女はこの重荷を、不運に見舞われた無垢なひとがよく示すあの優しさで堪えた——また、ミノタウロスへ捧げる貢ぎ物として、途方もない孤独を抱え、階段の上でじっと夢想にひたる時間を過ごしていた。ひとつの叫び声が溜屋のなかへ連れ戻すまで、彼女はずっとそうしていた。しかも、黒ん坊の少年が彼女をちらっと見かけたときにそれは起こったのであり、そのせいで彼は気苦労の塊に変わってしまっていた。見かけるやいなや、あの子は消えてしまった！ 平穏さは終わりを告げた。心穏やかな日々よ、さらば。静寂の潮は、いまや空っぽだ。彼女を見たせいで、彼はもはや明晰な未完成、不毛の孤独、不動の焦燥でしかなくなった……その世界では、他のあらゆる生き物が、突然彼には興味のないものになってしまった。

黒ん坊の少年は、呆然としたまま、彼女が戻ってくるのを待ちわびた。[……] 彼は待ちに待った、待ったという言葉が文字通り意味する時間、待ちつづけた。

週末、彼女にふたたび会うことは二度となかった。少年はじっと耳を傾け、母親の怒鳴り声、子供たちの不平不満の声を見破り、時々、貿易風アリゼのようなため息を聞きとった。こわれそうな波形のギピュール・レースでできた泉のせせらぎのようだった。この遠くからの声はサボジラの実の滑らかさに似ているように思えた。満月の夜の冷気のなかでジャスミンがあたえてくれる恵みに似ていた。まるでお伽噺から驚異が分離され、いまここで、この激しい陽射しのもとでは存在することなどほとんど考えられない、ココシャットの種子の色の眼をした、すぐに消え去るこの混血女のうちで、現実に姿を現したかのようだった。驚異は奇妙な感情の発露のうちにも具体化されていた。その感情は悲しみでも、心痛でも、不満でもなく、悲劇のなかにある、〈モーセの揺り籠〉〔月下美人に似た花〕の夜の開花にもっともふさわしいもの、つまりメランコリーだった。

[……]

『幼年期の終わり』ガリマール社、2005年 [p. 219-222]

『独房の日曜日』

奴隷制が廃止される以前の時代に、ある訪問客が〈ブランテーション〉を訪れ、〈主人〉と奴隷の関係を規定している、情け容赦ない社会体制を観察している。小説の最後で、この「陶器の販売人」が実はヴィクトル・シェルシュール [フランスの政治家 (1804-1893)。1848年に奴隷制廃止の政令を発した] 以外の何者でもないことを、読者は知ることになる。

[……]

〈主人〉が建物のあいだを通るあいだ、建物は日曜日の欲動で震えている。案内役を務めるニグロが現れた。黒い長衣のフロックコートを着た訪問客の二輪馬車を、彼は案内する。〈主人〉の声を聞いて彼が満足していると、ルブリエは感じる。あらゆる訪問はひとつの名誉であり、とりわけフランスからの場合にはそうだった。彼らは話を交わし、たがいに自己紹介をする。男はこの島とそのいくつもの〈農園〉にやって来た陶器の販売人であり、すでにいくつかを訪問し、この農園は三番目だ。訪問のさい、彼はアルザス製陶器のいくつかの版画を見せ、注文を受ける。この販売人を前にして、〈主人〉はほんのわずかに自信を取り戻す。彼は大げさな身ぶりで、自分の所有する土地、ニグロ、家畜を、われらの〈主〉が『創世記』第一章二八節で述べているのと同じ見事に一致する開墾者の素晴らしい営みを紹介する。産めよ増やせよ、土地を満たし支配せよ、海の魚、空の鳥、大地を動きまわるすべての動物を配下にせよ！……。陶器の販売人は率直な人間だ。自分は奴隷制廃止主義者であり、奴隷制に反対する立場だが、良識的な立場をとっている、痛めつけられてきたニグロたちには猶予が必要だからだ、と言う。〈主人〉はばかばかしいと言う。反対して義憤に駆られる連中は現実を見誤っている、とりわけニグロのことをわかっていない、と。〈主人〉は訪問客を自分の〈大邸宅〉に招く。

子供たちが訪問客をながめ、妻が彼にココアを差しだすあいだに、全能の主人は壺の陳列部屋に赴き、手足を洗い、バッハのカンタータを口ずさみ、香水をつけ、白いリネンに着替え、神の像に祈りを捧げる。それから、彼は訪問客に会いに戻ると、きわめて礼儀正しくあらゆることを彼に説明する。〈大邸宅〉の二階から基盤の目をしてうねる一面のサトウキビ畑を彼に示す。あら

ゆる野生の屑から清められたこの自然を彼に語る。このしわくちやな粘土、この野蛮な森、富として連れてきたのに、死んだふりをするあの連中。この地獄絵図に彼が手をかざす、すると彼の手だけがこの地獄を住みやすい環境に変えるのだ。擁護すべき文明について、彼は話す。自分の文明が素晴らしいものであり、まだ闇の部分にこの文明を広げなければならないと彼は信じている。世界を担う者たちの務めを信じているのだ。とりわけ、彼はニグロを御することができる。こうして〈主人〉は、彼がニグロについて何を知っているかを訪問客に述べる。

連中は怠け者で、不品行で、嘘つきで、盗人で、うぬぼれ屋でからかい好きだ。コンゴから来た連中は逃亡しやすく、自分の腹のなかにある毒で苦しんでいる。マンディゲの連中が本気で熱中するのは踊りしかない。フラニの連中は、やつらの兄弟分の牛のよき番人だ。クラマンティは、悪魔の怒りを鎮めるために自殺したがる連中だ。ミーヌ族は、何の意味もなく首をくくる、生きる理由がないからだ。アヨ族は丈夫だが、石のように生気がない。イボ族は、どこかの焼き芋をくちやくちやと食べることにしかエネルギーを注がない。アラダの連中は犬を食べる、汚らわしい魔法使いだが、脅えているときには果てしなく働く……。〈主人〉はこれらの人々が持ち込んだ悪魔のような偶像を恐れていて、それゆえ彼らを本当の神へ導こうとしている。〈大邸宅〉とニグロ小屋のあいだでは、悪に対する善の戦争が繰り広げられていて、彼はその最前線にいる。誰にでも魂があるわけではなく、だれにでも徳があるわけではない、だから仕事に就かせるのは、連中を真に改善することなのだ……。それから彼は子供たちのブロンドの髪、その黄色みを帯びたもじゃもじゃの髪を手でなでる、そろそろ現れる頃だと予測していたのだ、そしてまさしくその白さで選んだ妻の青白い顔に触れる。それは、人間性を汚染するこのマングローブのなかで保たれる純粋な輪だ。〈主人〉は辛辣な言葉を並べながらたくさんのことを話し、陶器の販売人はその話をじっと聞いていた。しかし〈主人〉は、極度に注意を凝らし、訪問客の精神が見つめ問いかけ探していて簡単には動じないと感じていた。

彼はたくさんのことを日常の安楽な環境で話したが、自分が述べたことのうちに自分がもういなくなり、どこか別の場所に落ちてしまい、なおも落ちていると感じている。

彼はまた、自分の心中に入り込んでしまった何か、彼の精神のなかである場所から別の場所へと移りつづける未知のものを、陰気な訪問客が運んできたとも感じている。

[……]

『独房の日曜日』 ガリマール社、2007年 [p. 64-66]

『マルフィニ鳥の九つの良心』

フフ鳥は、小さな勇敢なハチドリだが、生への驚くべき意識に取りつかれ、並外れた自制心をもっている。マルフィニ鳥はそれを前にして、疑念にとらわれ、アラヤという欲動が象徴する、自らの肉食の本能と捕食の習性から距離を取ろうと試みる。以下の抜粋では、マルフィニ鳥は自分の驚異的な努力と「ちび師匠」への自己移入について物語っている。

[……]

オレは突然理解した、フフ鳥には誰も見えていないものが見えているのだと。フフ鳥は別のやり方で見ているのだと。別のものを見ているのだと。緩慢な死は打ち負かされておらず、いまなおあるだけでなく、フフ鳥はその死に至るところで、四六時中見分けているのだ！……。それは幻覚なのだろうか。透視能力なのだろうか。いや。むしろひとつの明晰さ、不幸のように激しい明晰さであり、それが見えない竜に一人で立ち向かわせているのだ。驚嘆の息を吐くとフフ鳥の度量はより一層大きく見え、それとともに、壮麗な生き物であるオレが、このちび師匠を前にして自分が未熟だと感じるのだ……。

オレは、一片の狂気のなかを、まっすぐ前に飛びたつた。自分が何をしているのか、何をしようとしていたのか、もはやわからなかった。頭のなかは絶望にとらわれて、オレは飛んでいたのだが、その絶望のせいでいろいろな妄想を押しつけられそうになった。こんなにも多くの懷疑、多くの疑問のために、オレは生まれたわけではなかった……。アラヤにすべてを委ねずに生きること、オレの精神を焼きつくす地獄だった。どれほどの風に流されながら、この崩壊のなかで羽ばたきつづけたのか、オレにはわからない。不安な苦境のただなかで、オレは後ろ向きに飛ぼうとし、飛びながら宙に止まろうとし、ちび師匠のように旋回したり迂回しながら加速する狂気を味わってみようとした。これでは自分の苦悩が強まるばかりだった。オレの精神は真実に直面していたが、オレははまだそれを避けていて、だからといって振りはらうこともできないのだった……。

オレはちび師匠の無尽蔵のエネルギーがうらやましかった。そのありえない

秘密を教えるよううるさくせがんでもみた。いったい何があのような力をあいつににあたえているのだろうか。あいつが舌で捉えるのを何度か見たことがある、あの雨や露のしずくがその源なのだろうか……。あいつが花冠の中心から集める術を心得ている、あの花の蜜なのか、それとも花の錬金術によって密漬けになったあの虫たちなのか。そこには花が隠しもつていて、ちび師匠の強烈な燃焼を養うような霊薬があるのだろうか……。それはどんな魔法なのか……。ちび師匠が長時間ずっと遠くへ飛ぶことができ、はるかに旺盛でいられるのは、おそらくあのエキスのおかげなのだ……。ちび師匠は、あの陽射しを浴びた花蜜に支えられて飛んでいる、爬虫類のような舌で自分の血にそれを供給しながら！……。ヒインク！ だから、白昼堂々、みんなが見ているときに、オレはラビュシオン地区に止まり、遠慮なく花をむさぼり始めたのだった。

オレは頭がおかしくなったようだった。

このどろどろとしたものを嘔みながら、自分が羞恥に震えているのをオレは感じていた。同時に、不純物から抜けだし、死んだ貝殻を打ち砕いて、何かの味（不快だが、新しい）を自分の肉食の舌だけでなく自分の存在すべてに知らせるという危険な冒険に自分が乗りだしていることにも気づいていた……。

この狂気の発作が和らぐと、オレは自分を取り戻してゆっくりと飛び立ったが、断末魔があるように倒れた。打ちひしがれ、朦朧とし、陰鬱で、辛かった。目の端には、ラビュシオン地区を行き来するフフ鳥の姿と、これに敬意をもって挑み、追跡しているハチドリたちの姿が見えた。

オレは自分に立ち返り、本来の自分自身に集中していたかった。

すべてに注意深い態度を示して何になるのか。

アラヤの牢獄からどうして逃げだすのか。

あのちびと出会ったことでオレは地獄へ突き落とされた。まるで責め苦にか通じていない通過儀礼を受けているようだ。あのちびはオレに、オレのもうひとつの可能性を開いてくれたが……。それは手の届かないものだった。オレの思い上がった意識の届く範囲に仕掛けられた罠のように。力強いマルフィニ鳥、比類のない大鳥であるこのオレにたいして、残酷な運命は、助言者として、鳥のなかでもっとも小さい部類の、取るに足らない生き物を、ちつぽけな存在

を押しつけたのだ。不当だし、考えられないし、許しがたいことでさえあった。オレはフロマジェの木の股にぐたりと倒れ込んだまま、翼を閉じ、嘴も下げ、オレの高貴な血統の鳥たちの恋の季節が過ぎ去るのを眺めることしかできずにいた。

[……]

『マルフィニ鳥の九つの良心』ガリマール社、2009年 [p. 166-168]

『クルーソーへの足跡』

語り手ロビンソンは、島の砂浜に人間の足跡を見つけたばかりである。島にいるこの人物を見つけたいという欲望に駆られ、ロビンソンは、起伏に富んだ夢のなかへ身を投じ、自己を魅了するとともに恐れさせもするこの見知らぬ人物の肖像を思い描き、その人物が一人であるとも、仲間たちと一緒にいるとも想像する。

[……]

私は彼を細部から想像しはじめた。あの足跡の衝撃を考えると、背が非常に高く、大変な巨漢で、半ば巨人であるにちがいない。私の記憶が朦朧として領域を開放したので、ニグロの外観をした、あるいはベニノキで身体のあるところに化粧したインディアンの外観をしたその姿を私は思い描いてみた。いずれにせよ彼はあの太陽のおぞましい息子たちの一人だ。彼らは塩で身を焼くのに慣れ、星々を解説し、自分たちの鼻腔ひとつで風を思うがままに操る術を知っている。彼はこの地域をよく知っており、ながく続く孤独のなかでも恐れずに渡り歩くにちがいない。彼の丸木舟は外海を長時間航行するにも耐えられるだけ十分に巨大なはずだ。丸木舟をどこに隠したのだろうか？……私がまだ知らない入江に？……手下たちは彼をただ下ろしただけで、近々彼を探しに戻ってくる手筈だったのか？……これほどまでに抜け目なく、ここまでやって来て、見つからないよう留まっているなんて、彼はいったい何ものなのだろう？……そんな知識があるのだから、私のことなど一瞬で滅ぼすことのできる戦士なのだろう。残忍な軍隊が大挙をなして私の心にやってくると、肩に住み着き、肩甲骨を砕き、腰をふさぐのだった。釘のついた斧、刃のついた短杖、腹を切り裂く投槍、毒を塗った矢、クジラの骨で作った剣、貝殻の刃がついた棍棒……彼は裸にちがいない、ミノタウロスのペニスを包む鞘だけをつけているにちがいない。その髪はトカゲの血で編まれているはずだ。そして耳にはヒスイの棒とくじゃく石の錐のピアスをしているのだ。空と地面とを同時に見ることができるよう、その額は恐ろしいほどまでに平らなのだ……

[……]

私は彼が切れ長の目をしていると想像しはじめた、あるいはターバンで覆われているかもしれず、剣先のついた鉄かぶとをかぶり、トルコのサーベルをこれみよがしに帯剣し、駱駝にまたがっている姿を想像した。彼が自分の民とともに闇の儀礼を行なっている姿を私は思い描いた。儀式の最中に彼は石のジュースを飲み、天体にちりばめられた預言を読んでいた。彼が羽毛を褒めたたえ、非情の大河のそばのトカゲの家族を引き合いに出すのを私は思い描いた……彼は自分の両親の腸を、巨大な貝殻の壺のなかへ運ぶのだが、そうすることで、どこかはわからないが、空の悪しき部分と話すことができるようになるのだ。彼は、自分の妻たちが身ごもっているときに赤いトウモロコシを焼いたり、一握りの花粉を用いて雨に降るよう命じるにちがいない……。

[……]

『クルーソーへの足跡』ガリマール社、2012年 [p. 69-70]

略年譜

- 1953年12月3日 パトリック・シャモワゾー、マルティニックのフォール＝ド＝フランスに生まれる。5人の子供のうちの末っ子で、2人の姉（ミリエルとマガリ）と2人の兄（マックス、ミゲル）をもつ。
フォール＝ド＝フランスにてベリノン小学校、サント＝マリ＝カトリック中学校に通う。15歳のときに戯曲と詩を作る。いずれも未発表。読書家で、この頃のお気に入り読書はカミュ。
- 1975年9月 フランス本土へ出発。パリ＝シュッド大学（ソー大学）で法学および社会経済学を学ぶ。
- 1981年 マンマン・ドクロ
『水の精 対魔女カラボス』（戯曲語り）刊行。
- 1986年 小説『七つの不幸の年代記』（クレベール・エダン賞およびモーリシャス島賞を受賞）を出版、小説家としてのキャリアを始める。1988年、エドゥアール・グリッサンの序文および補遺「^{ジョブール}荷運び屋の言葉」を付けて再刊。
- 1988年 『クレオールの民話』出版（児童文学大賞）。同年、第二小説『ソリボ・マニフィック』刊行。
- 1989年 『マルティニック』およびジャン・ベルナベ、ラファエル・コンフィアンとの共著『クレオール礼賛』出版。『クレオール礼賛』は1993年に二か国語版（フランス語と英語）として再刊。
- 1990年 自伝的物語『幼い頃のむかし』。1993年再刊、カリブ海カルベ賞受賞。『学校への道』（1994）および『幼年期の果てに』（2005）と合わせて「クレオールの幼年時代」の三部作をなす。
- 1991年 ラファエル・コンフィアンとの共著『クレオールとは何か』を出版。同年、『ランフィニ』誌にミラン・クンデラのシャモワゾーをめぐる論考「複雑多様な出会いのように美しい」が掲載。

- 1992年 『テキサコ』でゴンクール賞を受賞。
- 1994年 『夜の言葉』を書く——アンティルの新しい文学』をラルフ・ルートヴィヒと共同制作。ロドルフ・アマディの写真を付したカイエンヌの監獄^{バーニュ}をめぐる小冊子『ギユイヤヌ、監獄^{バーニュ}の痕跡 = 記憶』を出版。ギイ・デロリエの映画『ペアンザン王の流刑』の脚本を執筆。
- 1997年 『奴隷の老人とモロス犬』(小説、作中にエドゥアール・グリッサンの言葉^{バーニュ}を挿入) およびエッセー『支配された国で書く』。
- 1998年 母マン・ニノット永眠。『七つの幸福をもたらすエルミール——サン = ティエンヌ蒸留工場のある年老いた労働者の打ち明け話』(写真ジャン = リュック・ド・ラガリーグ) および画家モールの挿絵による児童書『いくつもの驚異』を出版。
ソルボンヌ大学で開催されたエドゥアール・グリッサンをめぐるコロックに参加。奴隷制を人道に対する罪と認知することを求める、国連への請願書をグリッサン、ウォーレ・シヨインカとともに作成。
- 1999年 写真集『メランコリーの描線』(文シャモフゾー、写真ジャン = リュック・ド・ラガリーグ)。
- 2000年 『入り混じる土地の小屋』(写真ジャン = リュック・ド・ラガリーグ)。
2000年1月21日付『ル・モンド』紙に、ジェラルド・デルヴェール、エドゥアール・グリッサン、バルテヌ・ジュミネとの連名で「海外県再建宣言」を発表。これにより独立主義者としての政治的立場を明確にする。ギイ・デロリエの長編映画『中間航路』の脚本に署名。奴隷船の大西洋横断を生々しく描くこの映画はアメリカ合衆国で2500万人の動員数を記録することになる。
- 2002年 大河小説『カリブ海偽典』(「海外領土フランス通信網」(RFO) 審査員特別賞) および『第二世界の都市の手帖』を出版。『雨の監督官 付・富のアクラ』(ウィリアム・ウィルソンとの共作による児童書)、マルティニックの視覚芸術家セルジュ・エレノン^{バーニュ}をめぐるカタログ『エレノンの

聖なる森』をドミニク・ベルテとの共著で出版。

- 2004年 シャモワゾーが脚本を書いた、ギイ・デロリエの『ビギン』、ジョゼ・アイヨの『北浜辺』の公開。
- 2005年 チュニジアの都市カルタゴで行なわれたエドゥアール・グリッサンをめぐるコロックの機会に初めてアフリカの地を踏む。カンヌ映画祭「ある視点」部門の審査委員担当。「フランス共和国内務大臣のマルティニック訪問に際し同大臣に宛てた公開書簡」をグリッサンとともに発表(2005年12月7日『ユマニテ』紙)。
- 2007年 『独房の日曜日』(RFO 書籍賞) および『空から見たマルティニックの隠された財宝と自然遺産』(写真アンヌ・ショパン) 出版。国民アイデンティティ省の発足を受けて『壁が崩れるとき——法外なナショナル・アイデンティティ?』をグリッサンと共同執筆。ギイ・デロリエの監督作品『アリケール』の脚本担当。
- 2009年 『マルフィニ鳥の九つの良心』。バラク・オバマがアメリカ合衆国大統領に選出されたことに刺激され、グリッサンとともに『世界の御しがたい美。バラク・オバマへ』を発表。
アンティルでの大規模な社会蜂起を受け、『高度必需品宣言』をエルネスト・ブルルール、セルジュ・ドミ、ジェラルド・デルヴェール、エドゥアール・グリッサン、ギヨーム・ビジャール・ド・ギユルバール、オリヴィエ・ポルトコブ、オリヴィエ・ピュルヴァール、ジャン＝クロード・ウィリアムとの連名で発表。
『殺し屋の奇跡大全』(バンドデシネ。ティエリ・セグールによるデッサンと彩色)の第一巻刊行。
- 2010年 芸術文化勲章コマンドゥール賞 [最高位の勲章] 受勲。
- 2011年 『蝶と光』刊行。
- 2012年 『クルソーへの足跡』刊行。



『マルフィニ鳥の九つの良心』の挿絵はパトリック・シャモワゾーによるデッサン（2011年）。

作品

戯曲語り、小説、物語、エッセー

Manman Dlo contre la fée Carabosse (『マンマン・ドコロ 水の精対魔女カラボッス』) [Théâtre conté, illustrations de l'auteur] Paris, Éditions caribéennes, 1981.

Chronique des sept misères, suivi de Paroles de djobeurs (『七つの不幸の年代記 付・荷運び屋の言葉』) [préface d'Édouard Glissant] Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 1986 ; rééd., coll. « Folio », 1988.

Solibo Magnifique (『ソリボ・マニフィック』) Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 1988 ; rééd., coll. « Folio », 1991.

Éloge de la créolité (『クレオール礼賛』) [avec Jean Bernabé et Raphaël Confiant] Paris, Gallimard/Presses universitaires créoles, 1989.

Éloge de la créolité/In praise of creoleness [édition bilingue] Paris, Gallimard, 1993. [恒川邦夫訳『クレオール礼賛』平凡社、1997年]

Antan d'enfance. Une enfance créole I, Paris, Hatier, coll. « Haute enfance », 1990 ; rééd., Gallimard, coll. « Folio », 1993. [恒川邦夫訳『幼い頃のむかし』紀伊國屋書店、1998年]

Lettres créoles : Tracées antillaises et continentales de la littérature. Haïti, Guadeloupe, Guyane, Martinique, 1635-1975, Paris, Hatier, coll. « Brèves littéraires », 1991 ; rééd., Gallimard, coll. « Folio », 1999. [西谷修訳『クレオールとは何か』平凡社、1995年；平凡社ライブラリー、2004年]

Texaco, Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 1992. [星埜守之訳『テキサコ(上・下)』平凡社、1997年]

Écrire la « Parole de nuit ». *La nouvelle littérature antillaise* (『〈夜の言葉〉を書く——アンティルの新しい文学』) [avec Ralph Ludwig] Paris, Gallimard, coll. « Folio », 1994.

- Chemin-d'école. Une enfance créole II* (『学校への道』) Paris, Gallimard, coll. « Haute enfance », 1994 ; rééd., coll. « Folio », 1996.
- Guyane. Traces-mémoires du bagne* (『ギユイヤヌ、監獄の痕跡 = 記憶』) [avec Rodolphe Hammadi] Paris, CNMHS, coll. « Monuments en parole », 1994.
- L'Esclave vieil homme et le Molosse* (『奴隷の老人とモロス犬』) [avec un entre-dire d'Édouard Glissant] Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 1997 ; rééd., coll. « Folio », 1999.
- Écrire en pays dominé* (『支配された国で書く』) Paris, Gallimard, coll. « L'un et l'autre », 1997 ; rééd., coll. « Folio », 2002.
- Biblique des derniers gestes*, Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 2002 ; rééd., coll. « Folio », 2003. [塚本昌則訳『カリブ海偽典』紀伊國屋書店、2010年]
- Livret des villes du deuxième monde* (『第二世界の都市の手帖』) Paris, Monum/Éditions du patrimoine, coll. « La ville entière », 2002.
- À bout d'enfance. Une enfance créole III* (『幼年期の果てに』) Paris, Gallimard, coll. « Haute enfance », 2005.
- Un dimanche au cachot* (『独房の日曜日』) Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 2007.
- Les Neuf consciences du Malfini* (『マルフィニ鳥の九つの良心』) Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 2009.
- Le Papillon et la Lumière* (『蝶と光』) [illustrations Ianna Andreadis] Paris, Philippe Rey, 2011.
- L'Empreinte à Crusocé* (『クルソーへの足跡』) Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 2011.

児童書

- Au temps de l'antan. Contes du pays Martinique* [illustrations de Mireille Vautier] Paris, Hatier, coll. « Fées et gestes », 1988. [吉田加南子『クレオールの話』青土社、1999年]

Émerveilles (『さまざまな驚異』) [peintres de Maure] Paris, Gallimard Jeunesse, coll. « Giboulées », 1998.

Le Commandeur d'une pluie, suivi de *L'Accra de la richesse* (『雨の監督官 付・富のアクラ』) [illustrations de William Wilson] Paris, Gallimard Jeunesse, coll. « Giboulées », 2002.

L'Orphelin de Cocoyer Grands-Bois. Encyclomerveille d'un tueur I (『大森林ココイエの孤児——殺し屋の奇跡大全 第一巻』) [bande dessinée, dessin et couleur de Thierry Ségur] Paris, Delcourt, coll. « Terres de légendes », 2009.

記事、共同署名の文章、序文、寄稿

Martinique (『マルティニック』) [photographies de Michel Renaudeau et Emmanuel Valentin] Paris, Richer, coll. « Tourisme », 1991.

Elmire des sept bonheurs. Confidences d'un vieux travailleur de la distillerie Saint-Étienne (『七つの幸福をもたらすエルミール——サン=テティエンヌ蒸留工場のある年老いた労働者の打ち明け話』) [photographies de Jean-Luc de Laguarigue] Paris, Gallimard, 1998.

Tracées de mélancolies (『メランコリーの描線』) [photographies de Jean-Luc de Laguarigue] Le Gros-Morne (Martinique), Traces, 1999.

Cases en pays-mêlés (『入り混じる土地の小屋』) [photographies de Jean-Luc de Laguarigue] Le Gros-Morne(Martinique), Traces/HSE, 2000.

Les Bois sacrés d'Hélénon (『エレノンの聖なる森』) [avec Dominique Berthet] Paris, Dapper, 2002.

Rétrospective Ernest Breleur (『エルネスト・ブルルール回顧展』) Médiations auprès d'Ernerst Breleur (「エルネスト・ブルルール考」) Le François (Martinique), Fondation Clément. 2006.

Quand les murs tombent. L'identité nationale hors-la-loi ? (『壁が崩れるとき——法外なナショナル・アイデンティティ?』) [avec Édouard Glissant] Paris, Galaade/Institut du Tout-Monde, 2007.

Trésors cachés et patrimoine naturel de la Martinique vue du ciel (『空から見たマルティニックの隠された財宝と自然遺産』)
[photographies d'Anne Chopin] Paris, HC éditions, coll. « îles en images », 2007.

L'Intraitable Beauté du monde. Adresse à Barack Obama (『世界の御しがたい美——バラク・オバマへ』) [avec Édouard Glissant] Paris, Galaade/Institut du Tout-Monde, 2009.

Manifeste pour les « produits » de haute nécessité [avec Ernest Breleur, Serge Domi, Gérard Delver, Édouard Glissant, Guillaume Pigeard de Gurbert, Olivier Portecop, Olivier Pulvar et Jean-Claude William ; www.tout-monde.com/pdf/Manifeste.pdf] Paris, Galaade/Institut du Tout-Monde, 2009. [中村隆之訳『高度必需品宣言』『思想』1037号、岩波書店、2010年9月、8-16頁]

Le Tremblement du monde. Écrire avec Patrick Chamoiseau (『世界の震え——パトリック・シャモワゾーとともに書く』) [avec Fabienne Swiatly] Lyon, À plus d'un titre, coll. « les merles moqueurs », 2009.

新聞・雑誌記事

« Manifeste pour refonder les DOM » (「海外県再建宣言」) [Gérard Delver, Édouard Glissant et Bertène Juminer] *Le Monde*, Paris, 21 janvier 2000.

« Lettre ouverte au ministre de l'Intérieur de la République française, à l'occasion de sa visite en Martinique » [avec Édouard Glissant] *L'Humanité*, Paris, 7 décembre 2005. [中村隆之訳「遠くから——フランス共和国内務大臣のマルチニック訪問に際し同大臣に宛てた公開書簡」『現代思想2月臨時増刊 総特集フランス暴動』34巻3号、青土社、2006年2月、34-38頁]

« Méditations à Saint-John Perse » (「サン＝ジョン・ペルス考」) *La Nouvelle Anabase. Revue d'études persiennes*, Paris, L'Harmattan, 2006, n° 1, p. 21-34.

« J'ai vu un peuple s'ébrouer... Nous n'avons jamais été aussi vivants. Les « états généraux » ne sont pas à la hauteur de la dynamique à l'œuvre » (「私はひとつの民が荒々しく息を吐くを見た……」。

やはりわれわれは生の充溢を知らないできたのだ。『三部会』は現在の運動の力の高みには見合わない」) *Le Monde*, Paris, 14 mars 2009.

インタビュー

- « La guerre doit être menée sur le terrain de l'imaginaire » (「戦争は想像界で行なわれなければならない」) [retranscription : www.lesperipheriques.org] *Les périphériques vous parlent*, Paris, n° 10, 1998.
- « Devenir des fondateurs... Plaidoyer pour un Guerrier de l'imaginaire » (「創設者たちの生成……〈想像界の戦士〉のために」) [retranscription : www.lesperipheriques.org] *Les périphériques vous parlent*, Paris, n° 13, 2000.
- « Entretien avec Patrick Chamoiseau » (「パトリック・シャモワゾーへのインタビュー」) [avec Liesbeth De Bleeker] *Francophonía. Studi et ricerche sulle letteratures di lingua francese*, Bologne (Italie), Département des Langues et Littérature Étrangères Modernes de l'Université de Bologne, vol. 51, 2006, p. 91-106.
- « Il faut créer des guerriers » (「戦士を創り出さねばならない」) [avec Christian Casaubon et Laurent Roux] *La Femelle du requin*, Paris, n° 30, 2007-2008.
- « Patrick Chamoiseau, entretien public avec Anne Douaire » (パトリック・シャモワゾー、アンヌ・ドゥエールによる公開インタビュー) *L'Écrivain masqué*, Beïda Chikhi (dir.), Paris, PUPS, 2008, p. 231-248.
- « Un imaginaire pour une mondialité à faire. Fragments de deux rencontres avec Édouard Glissant et Patrick Chamoiseau » (「世界性を作らなければならない、そのための一個の想像界。エドゥアール・グリッサン、パトリック・シャモワゾーとの出会いの断片」) [entretiens filmés, DVD français, anglais, espagnol, italien] *Les périphériques vous parlent*, Paris, n° 29, 2010.

アンステイチュ・フランセ Institut français

代表：グザヴィエ・ダルコス

Président, Xavier Darcos

総館長：シルヴィアンヌ・タルソ = ジルリー

Directrice Générale Déléguée, Sylviane Tarsot-Gillery

秘書室長：ローランス・オエール

Secrétaire Générale, Laurence Auer

書籍・知識促進部 Département livre et promotions des savoirs

部長：ポール・ド・シネテ

Directeur, Paul de Sinety

出版部長：ニコラ・ペクー

Responsable des éditions, Nicolas Peccoud

アンステイチュ・フランセ日本 Institut français du Japon

代表：ベルトラン・フォール

Directeur, Bertrand Fort

フランス語・書籍・フランコフォニー部門主任：マキシム・ピエール

Responsable du pôle français, livre, francophonie, Maxime Pierre

フランス語・書籍・フランコフォニー部門、書籍・メディアテーク担当：ピエール・ラボリ

Chargé de mission livre et médiathèques,

Pôle français, livre, francophonie, Pierre Laborie

